
とある魔術の絶対重力 ブラックホール

プロジェクトE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の絶対重力 ブラックホール -

【Nコード】

N4837R

【作者名】

プロジェクトE

【あらすじ】

学園都市第3位だった御坂美琴を抜いて新第3位になった神無月有真。

襲い来る魔術師・超能力者。

科学と魔術が交差する時神無月有真の物語が始まる。

第01話 ビリビリビリ言ってんじゃないわよー！

> i 1 9 5 2 2 — 2 6 2 2 <

「は

っ・・・」

「おい当麻、俺の真横で世界の終わりのような溜息をつくなよ」
そう、今日七月十六日は『7がつ16にちシステムスキャン能力測定』の日だった。そのため午前中で測定の終了した俺こと神無月有真は、クラスメイトの上条当麻と第7学区にある学校から帰宅ならぬ帰寮している最中だった。

ここ、学園都市は超能力開発を行う街だ。学園都市はあらゆる教育機関・研究機関の集合体であり学校の授業として超能力の開発を行っている。学園都市の人口の約8割は学生で日々自身の能力の向上に努めている。そして学生の能力レベルを測定する行事こそが能力測定だ。学生は定期的に能力測定を受けることが義務付けられており、その能力測定の日というのが今日だった。あと4日で夏休みという時期にあるこの検査は結果の優れない学生にとっては悪夢のような行事だ。そして、その悪夢の直撃を受けた人物こそ俺の隣で沈んでいる上条当麻だった。

「溜息にでもしないと消化できないんです！ そりゃあ、毎度のことながら無能力者だつてことも能力測定受ける前から分かつてはいたことさ、ああ、分かっていたさ、でもそのせいで補習させられるのは納得がいかないんです！」
当麻の迫力に押されて若干たじろいでしまう。

「・・・あ、そうだ、今朝学校行くときになんか新しいクレープ屋が始まるって言うチラシもらったんだ。補習前の景気づけに奢つてやるから元気出せって」

「マジですか!? 今月の食費の入った財布を落として無くしてしまった私上条当麻にクレームを奢わたくしってくれませんか!？」

「俺の知らない内にまたそんな不幸に遭あっていたのか・・・というか奢おごるって言った瞬間に目をキラキラさせて土下座を敢行かんこうするな、なんだ一人大行列か! ええい、止めるー! 周りの視線が俺に突き刺さるー!!!」

『常盤台中学』

二三〇万人もの学生を抱え東京都の三分の一の広さを誇る超能力開発機関『学園都市』の中でも五本の指に入ると言われる名門の中学校だ。同時に世界有数のお嬢様学校もある。名門の名は伊達だてではなく入学は困難だ。その理由の一つは入学条件の一つに『強能力者レベル3以上』という区切りがあることだろう。どんなに財産があろうともこの基準をクリアできなければ入学することはかなわない。某国の王族の娘をあさり不合格にし、国際問題に発展しそうになったこともあるほどだ。逆に能力があれば入学することはできるのだ。また、常盤台中学は総生徒数二〇〇人以下という少人数制を採とっていることも入学を難しくしている。しかしこの基準のおかげもあり現在では『超能力者レベル5』を二人、『大能力者レベル4』を四七人も抱えるに至っている。才能あるものを集めその交流によってさらに才能を伸ばすこと、そして少人数制を使い一人一人を集中的に教育できるので高い能力を育てられること、それが名門の名を守っているのだろう。

常盤台中学には女子寮がある。校舎から走って20分ほどの距離にあり、常盤台の生徒はここからバスに乗り学校まで移動する。朝このバスに乗り遅れると全力で20分もの間走り続けなければ学校に間に合わない。走って20分の距離ともなるとかなりの距離だがこれでも学校の敷地内である。常盤台中学は隣接する4つのお嬢様学校と土地を共有し合うことで『学舎の園』と呼ばれる普通高校の

約15倍もの面積の共用地帯を作り出している。

そんな常盤台中学女子寮の食堂の一角で学園都市に7人しかいない超能力者^{レベル5}の一人第三位の御坂美琴^{みさかみこ}は食後の紅茶を飲みながら午後の予定を考えていた。

(あゝ『能力測定^{システムスキャン}』も午前中で終わっちゃったし、午後はどうしよう。漫画は昨日立ち読みしてきたし)

今日は七月十六日の木曜日、美琴は毎週月曜日と水曜日が漫画の立ち読みの日と決まっていたけど昨日コンビニで漫画を読んでしまったばかりだった。いくらお嬢様学校の生徒といえども実態はこんなものである。典型的な絵に描いたお嬢様^{てんけいてき}というのは逆に珍しいくらいだった。美琴が午後の予定を静かに考えていると食堂の誰よりも大きな声が彼女の思考を^{ぶんだん}分断した。

「おーーーーーねーーーーーさーーーーーまーーーーー
ーーーー」

美琴が声の方を振り返ると予想通りツインテールの後輩が勢いよく走ってこちらに向かってくる。そう、このツインテールの少女は白井黒子^{くろこ}、美琴を尊敬してやまない美琴のれっきとした後輩である。まあ、尊敬では済まないレベルで美琴を慕っているのだが。

「どうしたのよ、黒子。そんな必死な形相で走ってきて」

「どうしたのよ、黒子。ではありませんわ、お姉さま。そんなこと言っている場合ではありませんの。あー、悔しいったらありませんわ。どこの馬の骨とも知れない輩の分際でーーーー！」

「ちよつと、アンタは何をそんなに悔しがっているのよ」

「うー、お姉さまが、お姉さまの学園都市第三位の座がどこの馬の骨とも知れない輩^{やかい}に奪われたんですの！これが悔しがらずにいられましょうか」

黒子の大声が響き渡り食堂内は一瞬シンとなった。そして、次の瞬間には、

「ねえ、今の聞いた？ 御坂様が第三位の座を奪われたって話

」

と、食堂はその話題でもちきりになった。今の一瞬だけで学校全体の噂になるのが目に見えた美琴は頭を抱えた。そんな美琴の様子には気が付かない白井は自分の思いのたけをひたすらに語る。

「もう、黒子は悔しくて、悔しくて、それに聞いた話ではお姉さまの第三位を奪って輩は今まで超能力者レベル5ですらなかつたそうですよ。そんなどこの馬の骨とも分からない輩にお姉さまのポジションをとられたかと思うと、キー、いらいらしますの！ というわけでお姉さま今から真相を確かめに行きますのよ」
そういつて白井は美琴の腕をつかむ。

「ちよつと黒子、行くつてどこに行くつもりよ」

「わたくしの在籍する『風紀委員ジャッジメント』の第177支部ですわ。あそこからなら『書庫バンク』にアクセスできますから」

そういつて白井は美琴の腕を取ってズンズン進んでいく。

腕を引つ張られズルズルと引きずられるようにして行く美琴だが内心では、

(私を超えて第三位になった能力者か、ちよつと戦つてみたいかも) などと考えていた。そんな美琴の心情を読み取ったのか白井は、

「お姉さま、いま新しい第三位が誰かはつきりしたら戦つてみたいとか考えていたでしょう。だめですよ、権限を持たない一般人が無闇に能力を使うと色々なところから睨まれますの。それでなくともお姉さまは超能力者レベル5、たださえ目立つというのにお姉さまと新しい第3位の超能力者レベル5同士で戦つたりしたらどうなると思つていますの？」

「わ、分かつてるわよ、そのくらい。私だつてそのくらいの分別はあるわよ」

若干取り繕つたような美琴を白井がジト目で見るが、あきらめたようにつぶやいた。

「分かっているならいいんですの、でもお姉さま町の不良にからまれたときも能力で対処せず私たちを待つてくださいね」

そうなのだ、美琴は町でからまれることが多々ある。そんなときも

基本的に風紀委員を待たずに自分で何とかしてしまおう。常盤台はお嬢様学校で有名なので金目当てで近づいてくる男も多い。しかし、常盤台のお嬢様たちがみな強能力者以上であることも覚えておくべきだろう。何も知らずに近づけばあっという間にボコボコにされないのは目に見えている。確かにお嬢様ということもあり男に慣れていない者もいるが、美琴のようにあしらうのに慣れてる者もいるのだ。

「うーん。今度から少しは待つようにするわ」

白井はその今度が永遠に来ないような気がして溜息をつき、あきらめた。

周りの視線から逃げてきた神無月は再び歩く速度を落としていた。そんな神無月に上条は問いかけた。

「それで、そのクレープ屋ってどこにあるんだ？」

「ん？ ああ、第7学区ふれあいひろばって書いてあるからすぐ近くだな」

「そうか、良かったー」

当麻は何か素晴らしく安心した顔をしている。

「何をそんな安心した顔で喜んでるんだ？」

と神無月が上条に問いかけると上条は『そんなことも知らないのか！？』といった顔になった。

「今日は木曜日だぞ！？ スーパーでお肉のタイムセールがあるから間に合うか気になったに決まってるだろ！」

「知らねえよそんなこと！ 確かに安売りしてたら嬉しいけど、そんな曜日ごとの安売り品まで把握してねえよ！」

「くー、ブルジョワめ。貧乏学生の懐具合をなめんな！ ん、待てよ・・・今日は俺だけじゃなく神無月もいるんだからセール品が2倍買えるんじゃないか！？ お一人様一パックのお肉が2パック

買える！ ふ、ふふ、ふふふふふ」

「・・・」

クレープを奢るだけじゃなく、食材漁りにも付き合わされるのかと神無月は一人溜息をついた。

「ここがわたくしの所属する第177支部ですわ」

食堂を出た二人はバスと徒歩を駆使して風紀委員《ジャツジメント》の第177支部まで来ていた。白井の能力は『空間移動』テレポートで美琴と共にここまで移動することも可能だが、学園都市では緊急時と授業以外での能力の使用は基本的に禁止されているので結果としてバスと徒歩という移動手段になったのだった。

「へー、アンタの仕事場ってこんなところなんだ。今まで来たことなかったから少し新鮮」

美琴が支部内を見回す。室内は、企業のオフィスのような雰囲気、壁際には落し物を保管するラックやプリンターなどが置かれている。大きめの棚には過去の事件の記録などを保管しているのか広辞苑よりも分厚いファイルがいくつも並んでいる。また、荷物も多いように段ボール箱の壁ができています。ほかに、休憩用のソファと作業用デスクがいくつか置かれていた。美琴が室内を物珍しそうに見ていると知らない少女の声が美琴の隣にいた白井にかけられた。

「あれ、白井さん？ それにそちらの人は誰ですか？」

大きな棚に隠れて見えなかった奥の作業用デスクの前の椅子に腰かけていた少女が白井に話しかけた。黒髪のショートヘアのほんわかというか飴を転がすような甘ったるい声の少女で、髪飾りが特徴的な少女だった。彼女の髪飾りは造花で遠目に見ると花瓶を頭に乘っけているのではないかと思うほどの数があった。その少女の隣には長い黒髪に白梅を模した髪留めを付けた少女がいた。どちらも同じ学校の制服を着ている。

「ああ、初春이었습니다の。お姉さま、こちら柵川中学^{さくがわちゅうがく}1年の初春^{ついは}飾利^{るかざり}さんですの」

「初春飾利です。よろしくお願いします」

初春は美琴が白井と同じ常盤台中学の制服を着ていることに気が付いたあたりから緊張しているようだった。

「えっと、初春そちらは？」

白井は初春と一緒にいたもう一人の少女の方を見る。

「あたしですか？ あたしは初春のクラスメイトの佐天^{さてん}涙子^{なみこ}です。

初春の親友やっています」

二人の名前を聞くと今度は自分がと美琴が名乗る。

「初春さんに佐天さんか、私は常盤台中学2年の御坂美琴よろしくね」

美琴は名乗ると同時にニコツと笑った。すると初春がすぐに食いついた。

「え！ もしかして超能力者^{レベル5}の第三位超電磁砲^{レールガン}のあの御坂さんですか！」

ものすごい食いつきように美琴は少したじろいだ。そして初春の問には白井がすぐさま答える。

「そうですね、常盤台中学のEース超電磁砲^{レールガン}の御坂美琴といえばお姉さまのことですわ」

うわー本物だーと初春と佐天はテンションを上げている。そこで初春ははたと気が付いた。

「そういえば、白井さんも御坂さんもどうして今日はここに？ 白井さん今日はお仕事の日じゃないですよね。緊急な事件も起こっていないですし」

白井は初春の言葉にはっとした顔になると叫んだ。

「何をいつていますの、緊急に決まっていますわ！ お姉さまが第三位ではなくなったとの噂がありましたのよ。だからわたくしたちはその真偽を確かめに来たんですのよ！」

「え、ホントですか白井さん！？ そういうことなら私も手伝いま

すよ」

「お願いしますわ、初春。その手のことはあなたの方がわたくしよりずっと速いですから」

ハイというが早いか初春はコンピュータのキーボードをすごい勢いで叩き始めた。書庫バンクにアクセスしているのだろう。少しの間4人がコンピュータのディスプレイに注目しても静かになった。そして初春のキーボードを叩くカタカタという音だけが響く。

「ありました美坂さんのデータ。あ、ホントみたいです、確かに第四位になっています」

確かに画面に移された美琴のデータには第四位と書かれていた。

「初春、お姉さまの上に現れた現在の第三位も調べてもらえますか？」
「大丈夫です、そっちも調べてあります」

初春がエンターキーを押すともう一人のデータが画面に出力された。
(名前：神無月有真かななつきゆうま レベル：超能力者レベル5 順位：第三位 能力：絶対重力ブラックホール へえ、こいつが新しい第三位ってわけね。おもしろいじゃない、どこかで出会ったら戦ってみたいわね)

美琴がそう考えていると佐天は能力に疑問を抱いた。

「絶対重力？ どんな能力なのでしょうねこれ。御坂さん分かりますか？」

「うーん、私も聞いたことない能力名ね。黒子分かる？」

「わたくしも聞いたことがありますわね。初春は分かりますか？」
「ちよつと待つてください、それも今調べます」

初春がカタカタとキーボードを叩くとそれらしい記述が見つかった。
「未知素粒子制御系の能力の一つで重力を制御する能力、だそうです。でも、これ以上は何も書かれていません」

「重力か、今までに見たことのない能力ね。ねえ、こいつの写真ってないの？ 私のデータには写真が載ってたのに。」

「このデータ更新されたのが今日の午前中みたいで写真までは載ってないみたいです。でも普通なら昔の写真くらい載せると思うんですけど」

美琴は少し残念そうな顔をしたがすぐに笑って初春を労^{ねぎ}う。

「そっか、載ってないか。わざわざごめんねこんなこと調べさせちゃって」

「いえいえ、こんなことぐらいお安いご用ですよ」

二人の会話の最中、白井は美琴が写真を見れなかったことに逆にホッとしていた。

（お姉さまのことですし、写真があれば相手を見つけて戦うに決まっていますの。今回ばかりは書庫^{バンク}のデータに写真が載っていないくて助かりましたわ）

とりあえず、相手の名前と能力は分かったがそれ以上の成果は無かった。そして、午後にやることもまた無くなってしまったのだった。「それにしてもまた、やる事が無くなっちゃったわね、これからどうする黒子」

「そうですね、どうしましょうか」

と悩む二人に佐天が声をかけた。

「御坂さんと白井さんこれから暇なんですか？ あたしと初春はこれから何かキャンペーンやってるっていう新しいクレープ屋に行くつもりなんですけど一緒にどうですか？」

そう言っ佐天はそのクレープ屋のチラシを見せた。

「えーと、なになに、クレープ屋らぶるん第7学区ふれあい広場NEW OPEN先着100名様にゲコ太紳士Verマスコットプレゼント、こんなことをやっているんですの。せつかくですから行ってみませんかお姉さま？ っってお姉さま？ どうしたんですのぼんやりしたりして」

美琴の目はチラシにくぎ付けになっていた。

「えっ何、なんか言っった黒子？」

白井は視線をもう一度チラシに戻し、読みなおす。

「いえ、お姉さまがずいぶん熱心にチラシを読んでいるものですか、お姉さまはクレープ屋さんにご興味が？それとももれなくついてくるプレゼントの方ですか？」

すると美琴は顔を赤くして否定する。

「わ、私はそうクレープに興味があるのよ。ゲコ太になんて興味ないんだから、だってカエルよ両生類よどこの世界にこんなものもらって喜ぶ女の子が・・・」

そう言った美琴のカバンからゲコ太（通常Ver）のストラップがはみ出しているのを初春と佐天は気が付き思わず口からあ・・・という声が出た。二人の視線に気が付いた美琴は顔を赤くして驚きの表情で固まる、白井はこらえきれずに口を手で押さえながらプププと笑うのだった。

「うわ、すっごい人」

「何でこんなにちっちゃい子が？」

佐天と初春は尤もだった。クレープ屋のある第7学区ふれあい広場は、大勢の子供たちであふれていた。どうやら、学園都市内の学校に入学する子供たちとその保護者が下見のために大型バスで見て回っていたようだ。そして、ちょうどこのふれあい広場で休憩することになったようだ。この人数なのでクレープ屋にも既に列ができている。その最後尾に4人は並ぶのだった。

「休憩は一時間ですー。あまり、遠くに行かないでくださいねー」とバスのガイドが大きな声で呼びかけている。

それを聞いて初春は白井に話しかける。

「どうも、タイミングが悪かったようですね」

「そうですね、わたくしは先にベンチを確保してまいりますわ」これだけの人がいると座る場所の確保は難しくなる。折角クレープを買うのだからゆっくり食べたいのが人情だ。こんな炎天下えんてんかの中立ちながらクレープを食べるのはあまりいいものではない。そういうわけでの白井の提案だった。

「あ、じゃあ私も、佐天さん私たちの分お願いしますね。」

「お金は後でお支払いしますわー」

二人は4人の中で一番先頭にいた佐天にクレープを頼んだ。

「え、ちよっ・・・」

後ろを佐天が振り向くとすでに初春と白井は座る場所確保に移動してしまっていた。そして、美琴は腕を組んで指でとんとん二の腕を叩いている。ゲコ太（紳士Ver）は限定100個なためかなり焦っているようだ。そんな美琴を気遣って佐天は言う。

「・・・御坂さん、順番換わります？」

そんな佐天の言葉に美琴はパツと一瞬間を輝かせたが、すぐに表情を戻して取りつくろつ。

「べ、別に順番なんて。私はクレープさえ買えたらそれでいい

」

一度興味ないと言ったのでプライドのためか断ってしまう。そんな美琴の横を子供たちが駆けていく。

「やった、ゲコ太ゲットー」

「わたしもわたしも」

そんな子供たちを美琴の視線は羨ましそうに追いかけていく。それを見た佐天は苦笑いで溜息をついた。そして佐天の順番が回ってきて注文していたクレープを手渡される。

「お待たせしましたー、はい、どうぞ、最後の一個ですよ」

おまけのゲコ太マスケットもついてきた。

「あ、どうも・・・って、え、最後？」

そう佐天が聞いた瞬間に後ろの美琴が膝をついて崩れ落ちた。

「あ~~~~~」

こんな日差しの強い晴れた日だが、美琴の周りだけ暗くなるような負のオーラがまき散らされている。そんな重い空気に耐えきれなくなった佐天は美琴に話しかける。

「・・・あの」

美琴がゆっくりと佐天の方を向く。その目はとても羨ましそうな色をしている。

「よかつたら、これ」

と佐天がゲコ太マスコット（紳士Ver）を差し出すと、美琴は今までに見せたことのない俊敏さでゲコ太マスコットを佐天の手ごと握り締める。まるで、カマキリが獲物をとらえるかの如きスピードだった。

「え、いいの、ホントにいいの!？」

すでに手は標的であるゲコ太を掴んでいる。

あまりの勢いに佐天は後ろに若干後ろに下がりつつ答える。

「ええ」

「ありがとーーーーー!」

「い、いえ……」

美琴は佐天の手を握りながら、力いっぱい頭を下げる。すでにプライドとやらはどこかに消えてしまったようだった。その後、初春たちのところに戻る美琴はスキップに口笛というとてもふわふわした足取りだった。

「ほら、お姉さま遠慮なさらず」

「いらないうって言うてんでしょ! 何よトッピングに納豆と生クリ

ームって!」

そのチョイスする白井も白井だが、売る側も売る側だと言わざるを負えない。

そんな他愛もない話をしてしていると楽しい空間をぶち壊す大声が響き渡った。

「おら! 近づくんじゃねえ! それ以上近づいたらこのガキぶつ殺すぞ! ガキぶつ殺されたくないや、金を用意しろ! 今すぐ3000万だ!」

その声と共に爆発音と拳銃の発砲音が聞こえた。4人の座っていたベンチの後ろに通っている道路の真ん中で3人の男が子供を人質に

取り拳銃を向けているのだった。

「な、何？ なんなの？」

佐天は驚いていたが、白井と初春の行動は迅速じんそくだった。二人は即座に風紀委員ジャッジメントの腕章を付ける。白井は残っていたクレープを全部口に押し込むとベンチを乗り越え道に出る。その際、初春への指示も忘れない。

「初春、警備員アンチスキルへの連絡と怪我人の有無の確認、急いでくださいな」
それだけ言うとすぐに犯人の指定したラインギリギリまで接近していった。初春はすぐに白井の指示通り警備員アンチスキルへの連絡を始めた。

「はい、そうです。第7学区ふれあい広場前の道路で子供を人質にとった身代金要求事件発生警備員アンチスキルの出動を要請します。」

それらを見ていた美琴は自分もと白井の方に走って行ってしまった。美琴が犯人の指定したラインのところにつくと、子供たちの親とバスのガイドがいた。

「お願いです、息子を、息子をどうか返してください！」

「うちの娘もです、返して下さい！」

「子供たちを返して！」

ラインギリギリから犯人に向かって悲痛な叫びが投げかけられる。

「うるせえ！ 返してほしけりや金寄せって言うてんだろーが！」

「っー！」

（何、あいつら・・・子供を盾にしてまで！ 許せない！）

美琴は今のやりとりで頭に血がのぼってしまふ。そんな美琴の体の周りでバチバチと電気が渦巻く。聞き覚えのある電気の奏でる音で美琴に気が付いた白井はすぐに美琴を止めに入る。

「お姉さまなんでここに来ているんですの！ まあ今はそのことはいいですわ。とりあえず落ち着いてくださいませ。迂闊に攻撃したりはしてはいけませんわ。」

「子供たちが捕まってるのよ！ 眺めてるなんてできないに決まってるでしょ。」

「駄目です、お姉さま。お姉さまも見えるでしょう、犯人は子

供の頭に銃を向けているんですの、攻撃したりしたら子供たちの命が危険なんですのよ。仮に犯人を3人とも倒せてもお姉さまの電撃で銃が暴発しないとも限らないんですの。だから、今は堪えて下さいですの」

美琴は分かってしまった。今の自分にできることはない。自分の出る幕ではないのだと。

「っ、なんで、なんで見ていることしかできないの。私は超能力者《レベル5》なのに。なんでこんなに無力なの？ こんなときに使えない能力じゃ意味ないじゃない・・・」

「お姉さま・・・」

白井は美琴の言葉を否定することも美琴を励ますこともできずに、ただ言葉をかけたい相手の名前を呟くことしかできなかった。

犯人の様子と子供の親の様子・そして何もできないことに苦しんでいる少女たちの姿をひろばとは道を挟んで反対側にいた2人の少年が見ていた。一人は170cmくらいの身長に黒髪をツンツンと立たせた少年。もう一人は170cmくらいの身長にオレンジみがかった茶髪を少し長めにしたような少年だった。そのうちの茶髪の少年が黒髪の少年に問いかける。

「なあ、当麻。俺はあの子供たちを助けようと思うんだけどさ、お前は どうする？」

聞いて少年は聞く必要は無かったなと思った。なぜなら、黒髪の少年の目にはすでに火が点いていたからだ。

（やる気満々だな、といつても俺も人のことは言えないか）

「どうするも何も助けるに決まってるんだろ」

「言つと思つたぜ、じゃあ銃口が次に子供の頭とは違う方向を向いたら俺が一番手前の男と左奥の男をブツ飛ばす。当麻は右奥の男を頼む」

「ああ、まかせろ」

そうして二人の段取りは決まりそのときを待つばかりになった。

「おい、さつさと金を用意しねーか！」

あれから10分ほどが経ち犯人たちはしびれを切らせていた。たった10分と思うかもしれないが、犯罪を現在行っている人間の10分は1時間に匹敵するほど長く感じられる。周りからの視線やここから攻撃されやしないかという不安、今自分たちの行っていることへの恐怖からとても長く感じられるのだ。そんなとき、犯人の一人は自分たちが決めたラインのすぐ近くに白井のすがたを見つけた。正確には、ジャツジメント風紀委員の腕章を付けた白井の姿を発見したのだった。

ジャツジメント風紀委員は、自ら志願して学園の治安を維持する学生だ。この学園都市での治安維持はジャツジメント風紀委員の学生とアンチスキル警備員の教師で成り立っている。そのうちの片方が現場にいたのだ。犯人にしたらこれ以上の恐怖は無い。しかも、アンチスキル警備員は武装はしていても普通の大人、しかしジャツジメント風紀委員で前線に出てくるものは基本的にかんりの高レベルの能力者、単独なら注意しなければいけないのは完全に後者だ。

「おい、そこのお前ジャツジメント風紀委員だな！ 一番前に出てこい！」

白井は自分のことを呼ばれたのだと気が付くと犯人の方へ顔を向ける。そんな白井に美琴は声をかける。

「黒子！」

「大丈夫ですわ、お姉さま、黒子はちゃんと仕事を終わらせて帰ってきますの」

そういつて白井は犯人の定めたラインの一番前に立ち、宣言する。

「ジャツジメント風紀委員ですの、おとなしく子供たちを解放してくださいですの。そうすれば罪も軽くて済みますわよ」

「馬鹿がそんなこと言われたからって引きさがれるかよ、先に言っとくぞ変な動きを少しでもしたらガキの命はねえからな。おとな

しくしてるならガキには手を出さない、だが、お前は厄介そうだ、お前は先に片付ける」

そういつて男は銃口を白井にむける。銃口を向けられても白井はただ余裕があった。

（大丈夫ですよ、銃弾をレポートでかわして、犯人の銃を金属矢ダーツによって近距離から正確に撃ち抜く銃さえなくなれば子供たちを助けられますの）

さっきまで、金属矢ダーツで銃を撃ち抜かなかったのは予想以上に犯人が銃を同じ位置に固定しないからだ。誤って子供に金属矢ダーツが刺さるのだけは避けたかったのでいままで攻撃しなかったが、近距離まで近づけば確実に当てられる。だが、そこでレポートしようとしていた白井は違和感を感じ、その違和感はずぐに確信へと変わる。

（わたくしがレポートしたら銃弾はわたくしの後ろの方々に当たる!? まさか彼らはこれも見越して!? これでは避けられないじゃありませんの! まずいですわ、このままでは殺やられるしかないじゃありませんの）

黒子の今の状態に気が付いた美琴は大声を上げる。

「黒子　!」

美琴の声が白井に届いた。そして、銃をもつ男の顔が泣き笑いのような歪んだ顔になり銃弾が発射された。白井の目には銃弾が自分に向かつて飛んでくるのが見える。

（ああこれが死ぬ間際のスローな世界ってやつですね。ああ、もつとお姉さまと一緒にいたかった。まあ、お姉さまたちも盾になって死ねたのなら本望ですわ）

白井があきらめかけたときその声は響いた。

「なーにあきらめたような顔してんだよ! こんなことくらいで人生投げ出してんじゃないやねえ!」

白井の目の前にオレンジみがかった茶髪の少年が勢いよく横から飛んできた。

そんな銃弾こていくらいどうにでもなると、だから安心して後ろにいろと

言うように、その少年はまさに英雄ヒーローのように現れた。

白井は気が付いた、銃弾が遅く見えていたのは死ぬ間際だったからじゃない。世界の動くスピードが極端に遅くなっていることに。犯人も美琴も白井自身もほとんど動くことができない。そんなスローの世界の中をただ一人の少年だけが普通の速度で動く。銃弾すら1秒に5mmも動かないような世界を。その遅くなった銃弾を少年は素手でつかみ取り地面に叩きつける。そして、犯人たちにだけ聞こえるように呟いた。

「なあ、知ってるか？ 時間っていうのはな必ず一定じゃないんだぜ。強力な重力の前では時間すら歪んで遅くなる。そんなにのろろしてたら100年たって俺には追いつけねえ。少しはまともに動いてみるよ」

そう言った次の瞬間世界の時間の進み具合が元に戻り、遅い時間の流れの中で思いつきり前に出ようとしていた白井は盛大に前につんのめる。白井の方を既に見ていなかった茶髪の少年はそのことに全く気が付かず次の行動に移っていた。少年は時速200kmぐらいの速度で一番手前の犯人の右上方まで移動すると側頭部にとび蹴りを喰らわせていた。ドゴツという鈍い音が響き蹴りを喰らった犯人は10m近く蹴り飛ばされ動かなくなる。

「まずは、一人め」

そして、続けざまに左奥の犯人の腹に手を触れる、するとその男の体はフツと浮き上がり近くのビルの壁まで吹き飛びめり込む。その衝撃で壁にクモの巣状の亀裂が走った。

「二人目」

その間わずか0.3秒。だが、右奥の男はまだ残っている。

「何なんだテメエは！ 俺たちの邪魔をすんなー！」

その男は発火能力者ハイロキネシストだったらしく右手から炎を上げて茶髪の少年を燃やそうとする。しかし、その男の思惑はすぐに打ち破られる。茶髪の少年と犯人の間に割って入った黒髪のツンツン頭の少年がいて、彼の右手が犯人の炎に触れると、まるで蠟燭の火を消すがごとく簡

単に炎は消し飛ばされてしまった。犯人は驚きのうちに黒髪の少年の拳に顎を撃ち抜かれその場で崩れ落ちた。

「サンキューとうま、ナイスなタイミングだった」

「神無月もさすが新第三位だな」

そういつて二人はハイタッチした。

その様子を車の中から眺めていた男がいた。車は青のスポーツカーで改造によって時速500kmまで出せるようになっていた。この車の中に乗っていた男も犯人グループの一人だった。金が届いたら仲間を拾って急いで車で逃亡する予定だったのだ。それなのに、たった2人の学生に仲間3人があつという間にのされてしまい、金も手に入らなかつたのだ。

「クソ、こんなはずじゃなかつたのに。 今回の計画にどれだけ時間をかけたと思ってるんだ！」

彼らはこの計画を実行するに当たり、銃器の入手から、車の改造、逃走経路とつそくけいろの確認、潜伏先せんぷくさきの確保、とかなりの時間を使っていた。大体1年以上の時間をかけて計画していたのだった。それがものの数秒の間で見事なまでに粉碎されたのだ。

「こつなつたら全員まとめて・・・」
そつつぶやくと男は車のエンジンをかけた。

神無月と上条は捕まっていた子供たちの手を引いて親のいるところまで連れていった。子供たちは今になって恐怖がよみがえったのか親のところところに泣きながら走って行く。

「ママ　　、　　パパ　　」

「おとーさーん、　　おかあさーん　　」

子供とその子の両親が固く抱き合う。なんとも感動的なシーンだ。少しすると子供と親がこちらに歩いてきた。

「息子をありがとうございました。本当になんと御礼を言っているのか。ほら、雄哉もお兄ちゃんたちにありがとうって」

「おにいちゃんたちたすけてくれてありがとう、ぼくもおおきくなったらおにいちゃんたちみたいにつよいひとになってこんどはぼくがおにいちゃんたちをたすけるからね」

神無月は頬を緩めるとその子の頭に手を乗せてなでながら言う。

「おう、楽しみにしてる。」

子供たちの親とバスのガイドさんから御礼を言われた神無月と上条は一息ついた。そこに美琴と白井がやってくる。そして白井が先に切り出した。

「さっきは助けてくださいありがとうございます」

「ん？ いや、気にすんなって、こつちも好きでやったことだし」

「ところでお名前をうかがっても？」

先に応えたのは上条だった。

「俺は上条当麻よろしく」

「上条さんですの、わたくしは白井黒子こちらこそよろしくお願ひしますわ」

白井と当麻は握手した。

「次はあなたの名前をうかがっても？」

「ああいいいぜ、俺は神」

と神無月が名前を名乗る前にバカでかいエンジン音が響き渡った。そちら側を見ると青いスポーツカーがこちらめがけて一直線に突っ込んでくるのが見える。運転席にはさっきの身代金要求事件の犯人と似たような服装の男が乗っていた。

「まだ、他にも仲間がいたのか。はー、懲りないなー。まったくしょうがない奴らだ」

「待って、私もやる」

最後のおかたづけに向かう神無月に美琴は言う。

「ん、別に俺一人でも大丈夫だぞ？」

「私は、あいつらのことを許せない。子供を人質にしてお金を要求したこともそうだけど、私の後輩を傷つけようとした。だから、これは私の喧嘩けんかでもある」

そういうと美琴はこっちに向かって走ってくる車の方を向きゲームセンターでよく見かけるコインを上に弾きあげる。同時に神無月の手に黒い粒子が収束し、長さ4m近い黒い剣を形作る。神無月はその作りだした剣を後ろに振りかぶった。次の瞬間、美琴の指先に落ちてきたコインが閃光を噴き、神無月の振りかぶっていた黒い剣が投擲された。

黒い剣は回転しながら美琴の超電磁砲レールガンより早く車の正面と真ん中にぶつかる。いや、ぶつかるという表現は正確ではない。まるで、豆腐に包丁を入れるように、いやさらにそれより抵抗なく車体を通り抜け真つ二つにした。速すぎる切断の為かすぐには車体は離れずそのまま走る。そこに音速の3倍以上の速度でゲームセンターのコインが飛んできて既に切られていた車体がコインの引き起す爆風にも近い風で半分になり舞い上がる。車に乗っていた男は、風にもまれ車体の切り口から車外に放り出された。男は地面に激突する寸前に神無月のアイアンクローで顔面をキャッチされ大きな怪我はなかったが精神的なショックが大きすぎたのか白目をむいて気絶していた。切られて舞い上がった、割と値の張る青いスポーツカーは神無月や美琴を飛び越え、誰もいない地面に落下し爆発炎上した。高級車は一発で再起不能スクラップへと変貌した。なんとというBefore・After rあつという間に何とということでしょう状態に。二人の一撃は超能力者レベル5が超能力者と呼ばれる所以ゆえんそのものだった。周りで見ていた子供たちとその親達も、また初春と佐天・そして犯人たちも驚きで啞然ぜんとしていた。そのなかで白井だけが「さすがはお姉さま」とキョンキョン喜んでいた。

「で、アンタさっきのは何なのよ」

美琴は神無月に詰め寄っていた。神無月の自己紹介の前に犯人グループの最後の一人が車で突っ込んできたため美琴は神無月という名前すら知らない。能力も彼女にしてみれば未知数。銃弾を受けとめたと思っただら今度は訳の分からない黒い剣で車を両断したのだ、気にならない方がおかしい。

「さっきのっていうと黒い剣か？ それとも銃弾を掴んだ方か？」

「どっちもよ！」

「ん、重力つてあるだろ？ 重力つて強力なものになると光さえ逃がさないほど強力なものもある」

「ブラックホールのことでしょ？」

言っただけ美琴は何か引っかけを感じたが確信が無かったため考えるのをやめた。

「そう。さっきの剣は小さいブラックホールが集まっていたものだ。俺の能力は重力を制御する能力だからブラックホールも作れる。んで、重力の効果範囲をさっきの黒い剣の形にすると黒い剣に触れたものが吸い込まれる。さっきの車なら剣に触れた部分の原子を強制的に剣が吸い込んだから真つ二つになったというわけ。切れない物はないと自負してる。あと、強力な重力は時間の流れを遅くする。だから、能力を発生させている俺以外の物が遅くなつて銃弾すらも掴みとれたつてわけ」

説明を受けて美琴は感じた。

（どう考えてもこの力超能力者クラスもしかするとこいつが・・・）
確信の欲しい美琴は尋ねる。

「アンタは名前は？」

「名前？ 俺は神無月有真、10月を示す神無月に真実が有るつて書いて有真だ。能力は重力制御、通称絶対重力、超能力者だ、よろしく」

「やっぱり、アンタが神無月有真」

「俺のこと知ってるのか？ あれ、俺たちどこかで会ったことあったっけ？」

神無月は記憶を辿ってみるが一向に脳内検索に引っ掛からない。思い出そうと必死になっている神無月を美琴は止める。

「あつたことはないわ、今日が初対面だもの」

「じゃあ、なんで俺のこと知ってたんだ？」

「アンタのせいで私が第4位に格下げになって調べたからに決まってるでしょー！」

いや、そんなことは決まってるじゃない。

「第3位つていうと・・・え、まさか、君が超電磁砲^{レールガン}？」

「そうよ、アンタのせいでこっちは4位に転落したの、って訳で私と勝負しなさい、勝負」

「おいおい、いきなり勝負って何なんだよ・・・それよりそっちの名前は？」

とそこに上条が現れた。

「あれ、どうも見たことがある奴がいるなと思ってたら、お前かビリビリ」

「え、当麻お前の話によく出てきたビリビリってこいつのことだったのか」

「ああ、そうなんだ。 ことあるごとにビリビリビリビリ電撃飛ばしてくるんだ、勘弁してもらいたい」

「お前超能力者^{スキル}にビリビリ電撃飛ばされてよく無事だな、不幸っていうわりに死んでないあたり実はそこまで不幸でもないんじゃないか？」

「いやいや、ビリビリ攻撃されてる時点でかなりの不幸だぞ」

二人にビリビリビリビリ言われて美琴の周りでバチバチ電撃の火花が舞い散っていた。

「アンタら人のことビリビリビリ言ってるんじゃないわよー！」

美琴がそう言い切るのと同時に青白い閃光が上条と神無月の方向に飛んだ。その瞬間二人の方向からズドンという雷の落ちたときと同

じ音がした。普通なら美琴の『雷撃の槍』をまともに喰らえば無事では済まない。だが、2人の少年は無傷で立っていた。上条は右手を上げた状態で。

「こえー、いきなりなんだ？」

雷が間近で落ちる経験などほとんどの人は持ち合わせていない。神無月も同様にいきなりすることに驚いていた。一方、上条はすぐにくるりと向きを変えると美琴とは逆方向を向いて走り出した。美琴は上条を追おうとしたが神無月がまだその場で立っていたので狙いを変えた。

「さーて、さつき言った通り勝負よ」

美琴の目が据わっている。本気とかいてマジと読む人の目だ。

「まあ、待て落ち着けよ、ええとビリビリ？」

ブチツという音と共に再び雷撃の槍が神無月を襲う。

神無月はとっさに右手を突き出して防いだ。右手は黒くなっているが焼け焦げて黒くなったわけではなかった。先ほどの黒い剣を構成していた粒子が右手を覆っていてそれによって雷撃の槍を吸いこんで防いだのだった。

「ア・ン・タはよっぽど死にたいみたいね」

顔が笑っているのに目が笑っていない。怖すぎる。

即座に上条の方にダッシュ。

「ちよっ、神無月こっちに逃げてくるなよ！」

「しょうがないだろ！ 向こうにはなんだか分からないがキレてる超電磁砲レールガンがあるんだぞ。 どうかやって逃げろっていうんだよ」

後ろから『待てやコラー』と美琴が追いかけてくる。

「なんだか分からないがごめんビリビリ」

「俺もごめんビリビリ」

美琴の怒りの理由を分かっている二人はさらに美琴に怒りに火に油を注ぐ、いや火にガソリンを投げ込むことを言う。美琴の怒りが今の一言で5倍くらいに加速する。

「だ・か・ら、ビリビリ言っでんじゃないわよー！」

雷撃の槍が2人に向かって連発する。美琴の攻撃を避けまくって逃げていると神無月はあることに気が付いた。

「なあ、当麻、タイムサービスって何時から何時までなんだ？」

「え、そりゃあ・・・」

時計を見る上条の時間が止まる。美琴の電撃を避けている間にとっくにタイムサービスの時間は過ぎていた。上条の顔が一気にやつれた。それでも美琴は攻撃の手を緩めない。

「アンタたち今日は逃がさないわよ！」

そんな声が聞こえ神無月と上条は再び走り出す。

「これはアレだな」

「当麻の得意なアレだな」

そして二人は同時に叫ぶ。

「不幸だ　　！！！！」

その声は赤くなり始めた夏の空に消えていくのだった。

第01話 ビリビリビリビリ言ってんじゃないわよー！（後書き）

3月16日

地震で本棚がめちゃくちゃ

震源地だったので震度6強、さすがに勘弁してほしい
とりあえず浜岡原発に異常がなくて一安心

東海地震対策で地震対策ができていたようで被害が少なくてよかつ
た

第02話 そりゃもちろん……私が勝つたらよ

「はあ、はあ、はあ、やっと撒いた……か？」

「不幸だ……なんで特売の今日に限ってビリビリに追いかけられるんだ……」

もうすっかり日の暮れた川の土手の上で神無月有真と上条当麻は荒かん なつ き ゆ つ まくなくなっていた息を整えていた。昼間の身代金要求事件直後から御坂み さ か美琴に追いかけ続けられたせいなのだが、美琴に追いかけられたのは神無月と上条が二人して美琴のことをビリビリと呼び続けたせいだった。しかし、二人とも美琴の怒った理由に気が付いていない。

二人から言わせれば美琴がなぜ電撃を放ちながら追いかけてきたのかさっぱり分からないということだった。二人とも鈍さにおいては超鈍感者である。

「なあ当麻、なんであの……ビリビリだっけ？ あの子は俺たちを殺す勢いで電撃をぶっ放しながら追いかけてきたんだ？」

当麻は疲れたように答える。

「俺だつて知るわけないだろ。 いつもああやって追いかけてくるんだよ」

「じゃあ、今回も当麻が自分で気が付かないうちに何かしたんじゃないのか？ 俺はそれに巻き込まれたとか？」

上条は首を振る。

「いや、今までもこういうことはあったけど、近くにいただけで追いかけまわされた奴はいなかったはずだ」

「じゃあ、俺たちがあの子の気に触るようなことをしたってことか？」

「何をしたかまでは分からないが多分……」

どこまでも鈍感な二人だった。

「そういえば、当麻ならあの子の電撃打ち消せるだろ。逃げる必要なかったんじゃないか？」

「そう上条当麻の右手には、幻想殺しという『異能の力』ならそれが何であれ問答無用で打ち消せる能力がある。例えばそれが2億ボルトの電撃だとしてもはたまた3000度の炎球でも、それが『異能の力』なら例外なく打ち消してしまう。しかし、その力のおかげで上条の能力は万年無能力者だ。測る対象である能力を打ち消す能力のため上条の幻想殺しは測れないのだった。」

「おまつ、人ごとだと思つて！一回打ち消すのにどんだけ寿命が縮む思いをしてると思つてるんだよ。あんなの何度も打ち消してたら寿命が無くなっちゃう」

「上条の幻想殺しは能力に対して絶対的な力を誇るがその恩恵を受けているのは右手首より先だけ。つまりそれ以外の場所に能力をぶつけられようものなら防ぐことなど出来ない。また、上条の能力は『異能の力』そのものには作用しない。例えば3000度の炎の球を防げても炎の球に砕かれたコンクリート片は防げない。なので、上条は『異能の力』を一回防ぐたびに神経をすり減らしているのだ。」

「それより、神無月こそビリビリの電撃を防ぐくらいできるんじゃないのか？」

「神無月有真は絶対重力と呼ばれる超能力者の重力制御能力者だ。自分の指定した物体・現象にかかる重力を操ることや、何も無い空間に重力を発生させることができる。神無月の重力は時空間を歪めるほどの大きなものからただの空気が入った風船を浮かせる程度のささやかなものまであり、用途に応じて力の制御を行うことができる。そのうちの大きな力に類するものが黒い剣であり、銃弾の動きすらもほとんど止めてしまうような時間への干渉である。黒い剣は巨大な重力である絶対重力を剣の形に生成したもので、剣の表面に触れたものだけに絶対重力の影響を与え、触れたものを吸い込む。この剣は触れたものには影響を与えないため物体にこの黒い剣が接触した場合、接触した部分の原子を吸い込むことにより物体を切断す

ることになる。また原子単位での吸引のため斬られた物体の切り口はすさまじく鋭くなる。また、重力は強力になると時空間を歪めるため時間すら遅くすることが可能。その結果が銃弾すらほとんど止まった状態にするのである。

「そりゃ、確かに防げるか防げないかで問われれば防げるかもしれないって答えるけど、俺はあの子の能力の全部を知っているわけじゃないからそんな命を賭けた勝負なんてできるわけないだろ！その点、当麻はどんな能力でも防げるじゃん。それにあんな怒りのあふれた形相で追いかけられたら・・・逃げるしかないだろ」

「防げるかもしれないんだったら上条さん一人のせいによしようとするのはおかしくありません？ 神無月は超能力者なんだから少しはやる気を見せてくれてもいいじゃん！」

「そもそも当麻は俺を置き去り（生贄とも言う）にして逃げたじゃんあれはひどくないか？」

二人はだんだん喧嘩腰になる。

「しょうがないだろ。ビリビリは 危険なんだから」

現役女子中学生を危険と言うこともどうなのかと言ったところだが、彼女は元学園都市第三位にして現学園都市第四位、武装した軍隊の一個小隊（三十人〜四十人）どころか一個中隊（約二百人）を相手にしても勝ってしまうほどの実力の持ち主だ。テロどころか小規模な戦争が起こせるレベルの戦闘能力をもっているとやはり危険と言われてもしょうがないという気もする。そんな力を持っているあたり流石は超能力者と言ったところか。

「危険だって分かっているところに友達を置き去りにするなよ」

「しょうがないじだろ！ 特売に行きたかったんだから！」

「当麻は俺の命より特売を選んだのか！？・・・まあ、いいや。」

これ以上言い争っても疲れるだけだ。せつかくビリビリを撒いたことだしまた見つかる前に帰るか・・・」

「そうだな・・・特売のお肉が買えなかったし、これ以上無駄なエネルギーは使うのは止めよう・・・」

急にばからしくなった二人は寮への道をとぼとぼ歩いて行くのだ
た。

「・・・ただいま」

「あら、お姉さま今日の追いかけてこはずいぶんと速く終わりましたのね」

神無月と上条が家路いえじにつく頃、美琴は二人を完全に見失ったため常盤台中学女子寮に帰ってきていた。そこにはすでに風紀委員ジャッジメントの仕事を終わらせて先に帰ってきていた白井がいた。

「うっさいわね〜しようがないでしょ見失っちゃったんだから・・・あいつら今度会ったら真つ黒焦げにしてやるんだから」

そういつて美琴はベッドに倒れこむ。美琴にとつて能力を使いながらの追いかけてこは非常に体力の消耗が激しいらしく、疲れていた美琴はベッドに倒れこむなりすぐに深い眠りに落ちていった。疲れて帰ってきた割に美琴の顔は随分と嬉しそうな表情だった。白井は最後の方は独り言となった美琴の言葉を聞いていて思う。

（やっぱり、たのしそうですね。ご自身では気付いていらつしやらないのでしょうけど追いかけてこの後のお姉さまはなんだかいきいきしていますわ）

一方で白井は少し悔しくもある。美琴にこんな顔をさせることのできるのが自分ではないことに。

（今日のお姉さまの追いかけてこ相手は確か、今日で会った神無月有真と言う名前の超能力者レベル5と上条当麻という二人、このどちらかがお姉さまにあんな表情をさせられるのでしょうか・・・はっ！まさか恋！？お姉さまに限ってそんなこと・・・いえ、敵の過小評価はいけませんわ。あの二人について行動を調べなければ！お姉さまは絶対に渡しませんわ！！！！）

神無月と上条は自分たちの知らないところで一人敵を作ってしまった

たようだった。

「OK 寮入口までの進路クリア、ビリビリはいない。当麻、後方は大丈夫か？」

「こっちもOK、大丈夫みたいだ。後ろからビリビリがくる様子はない」

神無月と上条はビリビリに姿を見つけれないようにこっそりと第七学区にある自分たちの寮まで来ていた。そう神無月と上条は同じ寮に住んでいる。同じ寮の同じ階だ。同じ学校に通う学生たちは同じ寮に住むことが少なくない。学校からの距離や交通の便を考えても同じもしくは近い寮になることが多いのだ。ちなみに上条と神無月のクラスメイト土御門元春つちみかともはる（義妹を愛してやまない金髪グラサン男）も同じ階に住んでいる。というより上条の部屋の隣の部屋が土御門の部屋である。

「ふう、やっと着いた」

「ホントにな。俺はてつきり当麻の事だから不幸の一環とかでビリビリに見つかる、なんてことをやらかすかと思ってたんだがそうならず済んで助かった」

「人をどれだけ不幸だと思ってんだ」

「ん、食費の入った財布を丸ごと無くすレベル」

「.....」

この件に関しては何も言い返せない上条だった。上条は不幸体質なのだ。どのくらいの不幸体質かと言えば、目覚まし時計が朝鳴らなくて遅刻しそうになるのは当たり前、道端で何の理由もなくケンカは売られるし、折角2時間も並んで買った特売品の卵を帰宅途中に落として割るし、クラスで大勢が宿題を忘れても怒られるのは上条だけだし、色々な事件に巻き込まれること多々ある。上条の日常には、すでに不幸は組み込まれているといっても過言ではないほどに

毎日何らかの不幸が上条を襲う。今日の不幸はビリビリに追いかけてまわされて特売品を買えなかったことだった。

「いやホントに上条の不幸っぷりはギネスブックに乗せられるレベルだからな。登録内容は連続して不幸の起こった日数」

神無月の口調や表情が悪意のあるものだったら上条も怒れるのだが、神無月の表情にはただ事実からの感想を述べただけというものであったため言い返せない上条は うわーと泣きながら7階にある自分の部屋に飛び込んで行った。ときに真実は悪意ある言葉より人を傷つけられることを知った上条だった。

身代金要求事件から一夜明けた日の放課後、神無月は近くのコンビニ二に来ていた。

「今日発売の『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシューロール』は売り切れてないだろうな」

神無月はかなりの甘党である。こうしてコンビニで新しいスイーツが発売される情報を聞きつけると即座に買い求めに来る。普段なら朝一で買いに来るのだが今日は寝坊したため、起きて、着替えて、即登校となったためこの時間である。神無月は学校への遅刻はあまり気にしないタイプなのだが今日の1時限目は小萌先生の化学の授業だったため急いで登校する羽目になった。小萌先生とは神無月の通う高校の女化学教師であり、神無月の担任でもある。名字は月詠名前は小萌で月詠小萌だ。なぜ神無月がこの先生の授業に遅刻しないようにしているのかというと、それはこの先生は遅刻したらものすごく怒るとか、ものすごい量の課題を出してくるとかそういうことではない。小萌先生は身長135cmでどこからどう見ても小学生にしか見えない、教卓の前に立つと首から上しか見えなくなる、とんでも幼女先生だ。もちろん小学生ではなく年齢は少なくとも20を超えている。この先生は神無月が授業に遅刻すると涙目で『神

無月ちゃんは先生の授業きらいなんですか？」と聞いてくる。するとどうなるだろう。クラスメイト全員から『泣かした』『小萌先生を泣かした』と非難の視線が降り注ぐ。神無月は一度その失敗をってしまった。からは小萌先生の化学の授業だけは遅刻しなようになったのだ。そんなこんなでこの時間だったが、甘味コーナーには、まだ『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシューロール』は残っていた。コンビニの商品の入荷を知り尽くしている人間は多くはなく、ここまで甘そうな名前の菓子を即座に買おうという者もあまりいなかったためである。

（さて、家に帰ってこいつをおいしくいただ　　）
と考えているとコンビニの入り口から誰かが入ってきた。

「……あつ……」
「……あつ……」

コンビニの入り口から入ってきた誰かと目があつた。うっん、目が疲れているんだな。じゃなければこんなところで常盤台中学の制服を着た昨日あたりに電気をビリビリ飛ばしてきたお嬢様らしき人物がいるはずが無い。

「ってアンタ、私の存在はそんなに目をゴシゴシ擦ったって消えないわよ！ 『アレーおかしいな』って顔をするな、何気に失礼じゃない」

いくら目を擦っても目の前のビリビリは消えなかった。

「これじゃあ、当麻のことを不幸だとは言えないな……はあ」

「人を不幸の権化みたいに言っただけ溜息ついてんじゃないわよ。それに昨日はよくも人のことビリビリビリ言っただけ逃げたわね。今から真つ黒焦げになるまで電撃浴びせさせてあげるから遺産分配考えとけやコアラ」

これがお嬢様の実態なのかと思うと物悲しくなる神無月だった。

「だって……実際にビリビリしてんじゃない」

「そう、そんなに黒焦げになりたいのなら今すぐ黒焦げになりなさい！」

その瞬間美琴の髪が電極のようにバチンと火花を散らし、そこから青白い光が槍のように発射された。美琴と神無月の距離は2mもない。こんな近距離で、いや近距離じゃなくともとんでくる雷を避けるのは人間業じゃない。普通の人間にはそんなことできない、しかし神無月は無傷で立っていた。火傷どころかかすり傷一つない。美琴の『雷撃の槍』は神無月の突き出された右手によって防がれていた。神無月の能力は重力制御だ、ある特定のものだけに重力を作用させられる。今は、電撃のみに作用する重力で絶対重力を形成しそれを右手に纏うことで美琴の『雷撃の槍』を吸い込んだのだった。絶対重力と言っても神無月はその形を自由に変えられるため必ずしも球体とは限らない。今発生させた絶対重力にしても手の表面を覆うように形成されており、見た目には黒いペンキに突っ込んでしまった右手という具合だった。少し見ただけの人なら黒い手袋を付けているだけのように見えるかもしれない。その黒い右手の重力に引かれ美琴の雷撃の槍は他に被害を出さずに済んだのだった。

「あ、あぶねえな、コンビ二の中で雷なんて発生させんな、他の人達に迷惑だろ。ほら見る、レジの店員さん警備員を呼ぼうかどうかどうしようか迷ってんじゃねえか」

「うっさいわね、アンタがムカつくから悪いのよ」

「い、意味の分からないキレ方してんじゃねえよ」

と二人が言い争っているときコンビ二に来ていた若い女の客が「あ、アンチスキルですか？ コンビ二内で茶髪の女学生とオレンジみがかった茶髪の男子学生が能力を使ってケンカしています。至急来てください」と携帯電話に向かって話していた。

「……………」

「……………」

コンビ二の店員が微妙な視線を向けてくる。少しの間時間が止まったような沈黙が続いてその後、

「うわー、ビリビリの馬鹿野郎　　！……！」

「アンタが私のことビリビリ言うのが悪いんでしょうが……！」

と叫びながら神無月と美琴はコンビニから猛ダッシュで逃げだした。

その頃の上条は、スーパーの特売品をかごに入れてホクホクしていた。

「いやー、今日の上条さんはついてますなー。今日はまだ一度も不幸なことが起きてない」

7月17日になってから上条には不幸なことが起こっていないかった。朝はしつかり目覚まし時計が鳴ったし、不意にどこからかボールが飛んできたりもしなかったし、ペンキが上から降ってくることもなかったし、特売品が上条のちょうど前の人で無くなることもなかった。不幸が毎日起きていると、不幸の起きていないことが幸運と思えてくる上条だった。普通の人と比較すると確実に幸運の基準が下がっている。不幸が起きていないおかげでハイテンションになっている上条は独り言を連発していて、周りから変な目で見られていたが今の上条はそんなことすら気が付かないようだ。

「さて、この卵で今日の買い物は終わりだ、ヒヤッホー」
今にもスキップでもしそうな上条を周りの人は遠巻き《とおまき》にしている。そして、買う物がかごに揃った上条はレジに向かって歩いて行くのだった。

コンビニから逃げ出した神無月は、昨日美琴に追いかけてらたどりに着いた川の土手まで来ていた。

「なんで、俺は昨日から逃げてばかりいるんだろ」
不意に虚しくなつて神無月は独り言を漏らす。その独り言に神無月と一緒に逃げてきた美琴が応える。

「アンタが悪いんですよ。とりあえず、勝負しなさい、勝負」

「・・・はあ」

「そこっ！！、大きなため息をつかないっ！！」

コンビニから逃げ出さなきゃならないうえに勝負しろときたもんだ、溜息ためいきだつて出る。

「なんで、俺が勝負とやらをしなきゃならないんだよ」

「アンタが私のことをビリビリ変な風に呼ぶからでしょ！」

そこでようやく昨日追いかけられた理由が分かった神無月だった。

「あーそれか、でもしょうがないだろ。お前には名前教えてもらつてないんだから」

「へ・・・」

美琴は神無月が自分のことを超電磁砲レールガンと呼んでいたから名前も知っているものだと思つていたのであった。

「あれ、・・・昨日名前教えなかつたっけ？」

「俺が名乗つたら、すぐに『勝負しなさい』だとか言つて結局名乗らなかつたんじゃないか」

「・・・」

(あれ、これじゃあ怒つてた私が馬鹿みたいじゃない・・・どうしよう謝るべき？ いやいや、あそこまで電撃でんげきを飛ばして今さら謝あやまれない)

と美琴が考えていると、沈黙ちんもくに耐えかねた神無月が切り出す。

「で、名前は？」

「・・・へ・・・」

考え事に集中してた美琴は何を言われたのか聞いてなかった。

「だから、名前を教えてくださいよ。じゃなきゃビリビリか超電磁砲レールガン

の二択だぞ」

「あ、うん。私は御坂美琴みさかみことよ。ビリビリじゃないんだからね、しっかり覚えなさいよ」

「ああ、分かった美琴だな」

「ぶーっ！？」

「どうした？ あれ、俺名前言い間違えたか？」

(なんで、名前の方で呼ぶのよ。いきなり名前を呼び捨てって、あーもう)

美琴は俯いて赤くなった顔を冷やそうと頑張っていた。

「ま、間違っていないけど・・・そ、そうよ、勝負しなさい、勝負！」
美琴の口からとっさに出た言葉は勝負だった。

「はっ？　なんで？　名前間違っていないんだろ、なんで勝負するんだよ」

「え、・・・そ、そう、そうよ、アンタが学園都市第三位がくえんとしに本当に相応しいか私が確かめてあげるのよ」

(そう、そうよ、名前の事が無くてもコイツとは一度は勝負しなきゃならないのよ)

「なんだよ、そのいかにも今思いつきましたみたいな言い訳は・・・」

「い、言い訳じゃないわよ、と、とにかく勝負するの！」

「はあ、分かったよ。それで気が済むのなら相手になってやるよ。で、勝負の終了条件は？」

「そ…そりゃもちろん…私が勝ったらよ」

「はあ(溜息)…そうじゃなくて、勝ち負けの決め方だよ。

どっちかが死ぬまで戦うなんて言わないだろ？」

「あたりまえでしょ、戦えなくなるか、どっちかが『まいりました』っていうまでね」

「なあ、開始直後に『まいりました』っていったら」

神無月が『どうなる』といい終わる前に美琴が逃げ道をふさいだ。

「ははは、はあ(溜息)、了解」

そして美琴と神無月の戦いが始まるのだった。

すっかり日も暮れて暗くなった外を白井黒子は眺めていた。美琴が

いつになっても帰ってこないからである。

「もう、門限もとつくに過ぎていますのに……お姉さまってば、どこで何をしていたらっしゃるのでしょうか」

美琴のいない二人部屋に寂しげな白井の声が響く。

（お姉さまに限って誰かに誘拐されると言うこともないでしょうけど……はっ、まさか昨日の神無月と上条とかいう高校生と一緒に夜の戯れを!? いけませんわお姉さま、そんなこと黒子は絶対に許しませんわ……いえいえ、まさか、まさか、お姉さまに限ってそんなことは、きつといつももの追いかけてここに決まっていますわ……ん、追いかけてこ?)

白井の頭の中で美琴と神無月が夕暮れのビーチで『待てよー』『つかまえてみなさいよー』とじゃれ合っている姿が浮かぶ。

「イヤー、お姉さま、それをやるのはそんな野郎とじゃなくてわたくしとですわー」

と白井が美琴の枕に顔を擦りつけながら叫んでいると

「静かにせんか白井!」

と常盤台中学女子寮名物超恐ろしい鬼寮監が扉を開いた。妄想の悲劇に悲しんでいる白井はそんなことには気が付かない。

「そんな男とじゃれ合わないでくださいお姉さまー! 夜のデートは私だけのもので、ズー」

『ですの』と言おうとしたところで白井は怒った寮監に首をねじられ気を失った。

神無月と美琴は川の土手から河原に降りて、6〜7mの間隔を開けて立っていた。

「なあ、美琴ホントにやるのか?」

「や、やるにきまつてんでしょ」

美琴の声が裏返った。

(どうしてこいつは、私の調子を狂わせるのかな、やりにくいっただらないわね)

「分かった。いつでもいい、かかってこいよ」

「言われなくても、こつちだつてこの時を待つてたんだから！」

美琴の声と同時に美琴の手から『雷撃の槍』が打ち出される。『雷撃の槍』は轟音を周囲に撒き散らしながら一瞬のうちに6.7mの間合いを詰め神無月に襲いかかる。しかし、神無月の前に突き出された黒い右手に阻まれ電撃は微塵も神無月にダメージを与えない。それを見て美琴は呟く。

「やっぱ、電撃は効かないか」

神無月が強大な重力で覆った黒い右手を使い始めたのは今年、つまり高校に入学してからだ。この黒い右手は、上条の右手の能力である幻想殺しを真似して使い始めたのだ。神無月は上条と出会うまで、能力者の攻撃を防御する際に自身を自身の絶対重力で覆う方法を取っていた。しかし、神無月の絶対重力は、重力制御能力の中でもかなり消耗の激しい技でもあるため、長時間は使用できないのだ。神無月が絶対重力で体を覆い続けることそれは御坂美琴ならば超電磁砲を常時打ち続けているようなものなのだ。そのため、どうすれば如何に消耗せずに能力を防ぐかを考えていた。そんなとき上条が町の不良(異能力者)の能力を右手で防ぐのを見て真似したのである。神無月も上条と同じく右利きだったこともあり、右手のみを絶対重力で覆うことで防御するようになったのだ。その結果全身を絶対重力で覆っていた時の10分の1以下の力で攻撃を防げるようになった。

(この防御方法は消耗が少ない分、防御面積が狭くて怖いんだよね)と神無月が考えていると、

「3発同時ならどうよ」

と言う美琴の声と共に今度は3方向から『雷撃の槍』が飛んできた。「ちよつ、少しは加減をしろー！」

神無月は直撃の瞬間だけ元の防御方法、つまり全身を絶対重力で覆

う。

ズドン！という音と共に砂ボコリが舞い上がる。たった一瞬の全身防御でも飛んできた『雷撃の槍』はそのすべてが神無月の絶対重力ブラックホールに飲み込まれる。一瞬だけの全身ガードだったことと舞い上がった砂ボコリのために美琴には神無月がどのように『雷撃の槍』を防いだかは確認できなかつたがこれで飛ばすタイプの電撃は神無月に防御されることの分かつた美琴だった。

「同時に3発でも駄目か、なら」

そう言つた美琴の手に今度は砂が集まり始める。いや、あれは砂ではない。ただの砂なら美琴の電気では操れない。

「砂鉄か？」

「よく分かつたじゃない、それが分かるって事はこのあとどう使うかも分かるわよね？」

嫌な予感しかしない。とりあえず、殺されはしないだろうから砂鉄を操つて口から肺に突っ込まれることはないと思う、いや、そう思いたい神無月だった。砂鉄は美琴の手に集まるとそこから剣の形状に形成される。

「砂鉄が振動してチェーンソーみたいになつてるから当たるとちよつと血が出るかもね」

確実に当たつたらちよつと血が出るでは済まないことは容易に分かる。あんなのがまともに当たれば腕の一本や二本簡単に切れてしまふ。

「そつちがエモノを使うならこつちもいくぜ」

と言つて神無月が手から出現させたのはブラックホールから形成された黒い剣だった。

美琴が走つてきて剣をふるう、その剣に合わせて神無月も剣をふるう。互いに持っているエモノが真剣だったならば、ぶつかつて火花の一つも出るだろうが二人とも持っている剣は能力で作つた剣だ。

ぶつかつても火花など散らない。散らないと言ふより、美琴の剣は神無月の黒剣と触れた部分が消滅、いや吸い込まれてしまつたため剣

の形を維持しても砂鉄の密度が薄くなっていく。不意に神無月の剣が美琴の剣の日本刀で言えば鍔のあたりを斬り飛ばした。すると、砂鉄の量が剣を形作るのに最低限必要な量を下回ったため美琴の剣は形を保てなくなり崩れた。

「勝負ありだな、もういいだろ？」

「まだ、負けてないわよ！」

そういうと美琴はゲームセンターでよく見かけるコインをポケットから取り出した。そう、美琴の必殺技超電磁砲レールガンに使うためのコインだ。美琴の超電磁砲は、ゲームセンターのコインに電磁加速を加えて音速の3倍程度の速さで飛ばす技だ。普通、人間に向けての発射は向けられた人間の死を意味する。

「ちよつと待て、俺を殺す気か？」

「アンタなら死なないわよ！」

「キレながら訳分かんねえことを叫ぶな！ んなもん食らったら俺でも死ぬわ！」

「うっさい、私は自分より強い人間がいるのが許せないの！」

そう、叫ぶと美琴は神無月に向かって超電磁砲をぶつ放した。その瞬間、轟音と共に余波の風が辺りの草を薙ぎ払い、超電磁砲が通過した下の地面はコインの起こす空気摩擦の熱で焼けていた。そして着弾した瞬間にもすごい砂煙が上がった。砂煙がはれた後の着弾地点の神無月は跡形もなかった。煙がはれた瞬間に美琴は戸惑いは焦りに変わった。なぜなら、いつものように攻撃が防がれた感覚が無かったのだ。そのうえ、神無月が避けたという感覚もなかった。美琴は体から電磁波を出して人や物を察知できる。それなのに美琴の電磁波には神無月が避けて動いた感覚が無かったのだ。

「え、嘘・・・まさか、本当に？」

神無月の立っていた地点には、何も残っていない。超電磁砲の作ったクレーターが残されているだけだった。

「ねえ、冗談・・・でしょ」

美琴が神無月のいたところに声をかけるが、その場所から反応が返

つてくることは二度となかった。美琴の手が震える。あんなにも美琴の攻撃を簡単に消してしまっていたので、超電磁砲レールガンもふせげないはずはないと美琴は思っていたのだった。冗談のような現実を前に美琴は思い出す。超電磁砲レールガンを放つ前に神無月は確かに『そんなもの防げない』と言っていた。美琴が熱くなっている、聞く耳を持たなかっただけで確かにそう言っていたのだった。美琴は地面にへたり込んで自分の手を見る。美琴は自分の手が真っ赤に血で染まっているように見えた。人を殺してしまった、その思いが美琴に重くのかかる。美琴は2度と立ち上がれないような気がした。たしかに、ビリビリ言われて苛立ちもした。でも、本当に死んでほしいなんて、ましてや殺したいなんて思ってもいなかった。それに、神無月は美琴の大事な後輩である白井を助けてくれた。それなのに……。美琴の目から涙がポロポロこぼれ落ちる。そのとき美琴の超電磁砲レールガンの着弾地点ではないところから声が聞こえてきた。

「どうした？ 大丈夫か？」

泣いていた美琴の後ろから神無月の声がかかった。美琴が後ろを振り向くと神無月が無傷で立っていた。

「ア……は……？」

美琴は開いた口がふさがらない。そりゃそうだ。今の今まで、自分が殺してしまったと思っていた人物がいきなり現れたのだ。少し落ち着いてくると美琴は今の自分の状況を思い出し、涙を急いで拭くと神無月を問い詰める。

「あ、アンター一体どこにいたの！」

泣いていたかと思っただけ、いきなり怒り始めた美琴に若干たじろぐ神無月。

「あ、ああ、お前が超電磁砲レールガンを放つのと同時に俺の絶対重力ブラックホールの応用で空間を捻じ曲げて移動した。一般的に言われるワープって奴だな。でも本当は美琴のすぐ後ろに移動する予定だったんだが、今初めて使ったから勝手が良く分からなくて移動する座標を間違えた。

美琴のすぐ後ろの移動するつもりが美琴の後ろ側5kmの位置にワープしちゃって今ようやく走ってここに帰ってきたんだ」

確かにワープなら超電磁砲レールガンはそもそも当たっていないのだから防がれた感覚はするはずがないし、空間を捻じ曲げて移動したのであれば美琴の電磁波には超電磁砲レールガンの直後に避けて動いた感覚が無いのも当たり前だった。

（そもそもこいつは時間を遅くできる能力があったじゃない、銃弾を余裕で掴んじゃう奴が超電磁砲レールガンを撃たれたからって防げないわけじゃないじゃない）

銃弾の標準的な速度はほぼ音速と同じ、ライフルだと秒速950mくらいで音速の3倍にはまだ届かないという速度である。神無月は銃弾が体感時間で1秒に5mも進まないほど時間を歪められるのだ。たとえ超電磁砲レールガンを撃たれたとしても神無月に時間を遅くされたら体感時間1秒に15mも進めないのだ。しかも神無月はその歪んだ時間の中を平気で行動できる。そんな神無月が消えた理由を説明し終わると美琴が肩をプルプル震わせていた。

「・・・ね・・・」

美琴が何かをつぶやいた。

「へっ?」

「死ぬーーーー!!!」

美琴の体中から『雷撃の槍』が神無月に向かって連射される。

「あぶねえな、殺す気か!」

「アンタなんて死んじゃえ! 私がどれだけ心配したと思っているのよ!」

「は、何のことだよ」

「アンタがいきなり消えるから超電磁砲レールガンで殺しちゃったかと思っただかと思っただじゃない」

「あ? ああ、だからさつき泣いてたのか。でも、避けなきゃ本当に死んでたんだから、むしろ避けた俺に感謝してほしいところだぜ。

まあ、でも泣いてた美琴も可愛かったぜ」

特に深い意味はないのだが、基本的に思ったことをそのまま口にしてしまう神無月だった。

「・・・あ・・・あ・・・」

美琴は面と向かって可愛いと言われて再び思考がフリーズする。

（か、か、可愛いって、か、可愛っていわ、いわ、いわれた）

「おい、バチバチいつてどうした？」

「し、死ねー！ー！ー！！！」

そう言っつて美琴は電撃を放つ。照れ隠しに出てきた言葉が『勝負しなさい』か『死ねー！ー！ー！！』の美琴だった。

そのころ上条は買い物を終えて例の土手のを歩いていた。今日の特売で肉も卵もジャガイモも玉ねぎも安く買うことができた上条はホクホク顔だった。そんな上条の耳に割と近くから『死ねー！ー！！』という女の子の声が聞こえてきた。日本語はほとんどひどくなつていくなとしみじみ上条が考えていると声だけでなく電撃までもが飛んできた。上条を狙ったものではなく、たまたま飛んできたものだった。しかし、そのたまたま飛んできて電撃は上条の左手に下げたスーパ一の袋に吸い込まれるようにぶつかり、上条がやっこの思いで手に入れた特売品の全てを一瞬で炭に変えたのだった。ついに、今日一日分の不幸が上条を襲った瞬間だった。『終わりよければすべてよし』というが、これはつまり終わりが良くなければ全て良くないと同義である。そして上条は今日一日をこう締めくくった。

「不幸だーっ！」

それから約1時間後、神無月は常盤台中学女子寮に向かって歩みを進めていた。なぜ、神無月が常盤台中学女子寮に向けて歩いている

のかと言えば、その答えは神無月の背中が物語っていた。いや、正確には神無月の背中に乗っている人物を見れば分かる。つまり御坂美琴を背負っているからだ。神無月に可愛いと言われた美琴は恥ずかしさのあまり絶え間なく『照れ隠し電撃』を放ち続けた。そのせいで、美琴は気が付いた時には電池切れ、動くこともままならなくなっていた。さすがに、神無月も攻撃されなくなったからといってこれ幸いと、動けない女子中学生を夜の河原に放置して帰るほど非情ではない。そこで、神無月は歩けなくなった美琴を背負って常盤台中学の女子寮を目指すことになったというわけである。

「……………」

「ん、どうしたんだよ美琴。さっきから借りてきた猫みたいに静かになっちゃって」

神無月の背中にいる美琴の動揺はかなり激しいものだった。

（『どうしただよ』じゃないわよ。私がごんだけ恥ずかしいと思ってるの）

神無月に背負われた美琴はすぐに色々なことが気になりだし頭がパンクしてしまいそうになっていた。背負われると急に自分の体重が気になり、誰かに見られていないか気になり、背負われている関係で掴まっている足のことになり、赤くなっている顔を見られていないか気になってしまふのだった。人間は恥ずかしさで死ぬんじゃないかと美琴は思う。

（うあ、恥ずか死ぬ）

美琴が心の中でまだ得苦しんでいると、反応の返ってこないことを不審に思った神無月が美琴を振り返ろうとする。

「本当にどうしちゃったんだ？寝ちゃっダ……力」

振り返ろうとした神無月の首を美琴が無理やり前に向かせる。

「振り返っちゃ駄目だから、絶対に振り向かないでいい？」

美琴の言葉は『いい』と問いかけているのに対しその言葉は念押しをしているかの響きがあった。美琴は自身の顔が真っ赤になっているのを見られたくないので神無月の首を無理前に向かせるようにね

じつたのだが、神無月は首の骨を変な感じに回されて顔が蒼くなっていた。それから少し歩くと常盤台中学女子寮が見えてきた。そこで、神無月は気になったことを尋ねる。

「美琴、寮って門限とかあるのか？」

「・・・あるわね。私がないことは黒子が隠してくれているとは思うけど、玄関から入るのはちよつと・・・」

美琴がそれだけは勘弁してほしいと言う顔をしているので神無月は先を促す。

「ちよつと・・・どうなるんだ」

「・・・死ぬかも」

「死ぬのか！？」

「うちの寮監は規則に厳しくてね、門限とか規則を破るとね・・・はははと美琴が遠い目をしている。前に何かやらかしたんだなと察する神無月だった。

「じゃあ、部屋まで送る、どの部屋なのか教えてくれ」

美琴は“えーと”と言って自分の部屋を端から数えていく。いつも自分が暮らしている部屋でも外から探すと意外にも分かりにくかったりするものである。

（あれ？ 明かりがまだついてる。 珍しいわね黒子がこんな遅くまで起きているなんて）

「208号室だから、あの明かりのついている部屋、だけどどうやっていくの」

「さっきの空間歪めるやつ」

「アンタそれでさっき失敗して5km先まで移動しちゃったじゃない」

「大丈夫さっきの一回でコツは掴んだから変なとこにワープしたりしないって。 あ、それとアンタじゃない俺の名前は有真だこんどからちゃんと呼べよ俺だつてビリビリから直したんだから」

「あ、うん。・・・ゆ・・・う・・・ま」

最後の美琴の小さなつばやきは神無月には聞こえていなかった。移

動手段が若干心配な美琴だったが今の不意打ちと背負われている状況の2点から文句は言えなかった。

「さて、行くぞ」

神無月の声と共に二人の前の空間が絶対重力により黒く染まる。ワンピースと言っよりワームホールに近い技だった。黒い空間はすぐに安定し神無月はそこに入るのだった。

白井黒子は眠れぬ夜を過ごしていた。寮監に首をねじられ気絶させられたことを白井は知らなかった。白井にしてみれば気が付いたら眠っていたという認識なのだ。少し前まで気を失っていたので目覚めたら眠気がすっかりなくなっていた。そのため、眠くなるまで美琴を待つていようとしていることにした白井だった。白井は美琴のベッドでゴロゴロしながら美琴の事を心配していた。

（お姉さま、昨日は速く帰ってきましたのに今日は随分と遅いんですの。お姉さま速く帰ってきてくださいまし）

と白井が思っていると思透かしたかのようなタイミングいきなり、

「失礼しまーす」

と昨日出会った超能力者神無月有真が現れた。

「な・・・なんなんですか・・・」

白井の能力は空間移動だ。そのため、3次元から1次元までの把握が必要になる。その白井の空間把握で把握できる次元の全てに干渉する力がいきなり部屋の中に出現したと思つたらそこから神無月が出てきたのだ。驚き以外の何物でもない。白井は寝るためにパジャマだったので、とっさに自分の机の上に置いておいた金属矢を取るために空間移動して机の前に移動してしまつたほどの驚きだった。そんな白井の驚きをたいして気にせず神無月は要件を告げる。

「悪いな夜遅くに、はい、オンナノコのお届け物です」

とても女子中学生に向けて発する言葉ではない。白井の驚きは続く。

いきなり『オンナノコのお届け物です』と言いだした神無月の背中から美琴がひよこつと顔をだしたのだ。

「・・・ただいま、黒子」

「?????・・・お、お姉さま?」

白井は今日の前で起きている自体についていけない。そんな白井の様子に気が付いた神無月は美琴を運んできた理由を告げる。

「ああ、美琴が（バトルで力を使い過ぎて）動けなくなっちゃって一緒に（戦って）いた俺がここまで運んできたんだよ」

しかし、混乱している白井にはこつ聞こえた。

『ああ、美琴が（エツチなことをし終わって疲れて）動けなくなっちゃって一緒に（ホテルに）いた俺がここまで運んできたんだよ』
と言う風に。

「こ、殺す、よくもお姉さまの操をみせめ　　!」

と白井は神無月に殺しにかかるうとするが、

「美琴、じゃあ俺かえるわ。　またな」

「うん、また・・・『ゆうま（小声）』」

神無月はすっかりおとなしくなっている美琴をベッドに下ろして別れのあいさつをしていた。その言葉で白井の動きが止まる。

（美琴に有真!?　そ、そんな、もう名前で呼び合う仲だなんて）

白井は目の前の出来事に魂を持って行かれたかのように真っ白に燃え尽きていた。そんな白井に神無月はいう。

「ええと、白井黒子だったよな。　夜遅くに悪かったなじゃ、おやすみ黒子」

そんな不意打ちだけ残して神無月は部屋から忽然と消えた。

（・・・とのがた殿方から呼び捨てにされた・・・?）

「えつとお姉さま、どういう・・・ことですか?」

「私に聞かれたって分かるわけないでしょ」

この夜、常盤台中学女子寮の208号室の住人二人は悶々とした夜を過ごすことになったのだった。

神無月は常盤台中学女子寮から道路に移動した。一発で自分の寮まで帰るほどのワームホールを開く自信はなく、またこの能力も消耗が激しいため歩いて帰ることにしたのだった。

すこし歩いて美琴と戦った河原の土手の上を歩いていると神無月は道端にうずくまっている人を見つけた。遠くから見たら誰なのか分からなかったが近づくとそれは美琴の電撃で特売品の全てを失い意気消沈して体育座りしている上条だった。なんとなく話しかけづらい雰囲気若干押される神無月。

「どうした当麻……」

「うう不幸だった……」

「新しい『不幸だーっ！』のバリエーションだな、どうしたんだよ」
上条は左手にぶら下げている特売品だったものを神無月に見せる。

「あ、ああ」

全て食べ物だったものから作られた炭をみて神無月は上条にいう。

「あー俺の『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシューロール』いくつかやろうか」

神無月はコンビニで『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシューロール（一個280円）』を30個ほど買っていた。上条は『うん』と頷くが流石にシヨックが大きすぎたのか落ち込んだままだった。そんな上条を支えながら神無月は寮を目指して帰るのだった。

第02話 そ…そりゃもちろん…私が勝つたらよ（後書き）

不定期更新ですが今後ともよろしく願います。
地震がこれ以上こないことを切に願います。

第03話 (何か視線を感じる気がする・・・)

普段となにも変わらない午後の昼下がり、学園都市のとあるコンビニでは平穏な日常から突然外れた。

「風紀委員です。この場から早急に避難してください!!」

GREEN MARTという名の緑と白をイメージカラーにしたコンビニに突然大声が響きわたった。大声の持ち主は航空素材の盾を持った女の風紀委員で急いだようにコンビニの中に入ってきてそう叫んだ。彼女の後ろには、男の風紀委員が続いてコンビニに入ってきた。二人とも右腕に腕章をしている。それが風紀委員を表す記号にもなっていた。風紀委員といえば、何らかの事件や事故などに駆けつけることが仕事の学生だ。そんな彼らがとても焦ったように店内に飛びこんできて避難命令を出したのだ、店内の客も職員も驚く。突然の避難命令に店内にいた客たち驚いたのちに戸惑う。そんな中コンビニの店員が風紀委員に駆け寄った。

「あ・・・あのウチの店で何か・・・?」

「この付近で重力子の爆発的な加速が観測されました」

店員の質問に対応したのは、女の風紀委員だった。一方の男の風紀委員は店員の対応を彼女に任せて店の中で何かを探し始めた。

「ゲラ・・・なんですか?」

店員は風紀委員の言っていることが分からずに聞き返す。

「簡単に言うと爆弾が爆発する前兆があったという事です。この店に爆弾が仕掛けられたと思われます」

そう言われるとようやく分かったのか店内の客たちも避難を開始する。店長と女の風紀委員が話している間も男の風紀委員は、店内のどこに爆弾が仕掛けられたのかを探し続ける。

「クソ 一体どこに・・・」

探しても、探してもそれらしいものが見つからないで焦りだけが募った男の風紀委員ジャッジメントの口から苛立ちが零れる。

「きやつ」

そんなとき男の風紀委員ジャッジメントの後ろから女の声が聞こえた。振り返ると女学生が床に座り込んでいた。男の風紀委員ジャッジメントはすぐに女学生に駆け寄る。

「どうした？」

「すみません足を・・・」

どうやらその女学生は避難の際に滑ったようで足を捻ってしまったのだった。

「肩を貸すから早く非難を・・・」

そういつて男の風紀委員ジャッジメントが足を捻った女生徒に肩を貸した時だった。ブンという古い機械の電源を入れたような鈍い音、自然に発生するとは思えない音が足元から男の風紀委員ジャッジメントの耳に響いた。その瞬間、

彼は嫌な悪寒を感じすぐに音源の方を向く。男の風紀委員ジャッジメントの足元、正確には彼のすぐ近くにある商品の陳列棚の下、そこに置かれたデフォルメされたファンシーなウサギの人形、そこが音源だった。ウサギの人形は音を放った数秒後にメキメキと音がするのではないかというほどに歪み、人形の胴体の中央部分に発生した誰が見ても明らかに何かの能力だと思ふ球状のエネルギーに吸い込まれるように縮んでいく。男の風紀委員ジャッジメントの顔が焦りに歪む。

「何！？これが爆弾！！」

次の瞬間、人形を歪め縮ませたエネルギーが、今度は内側に向かうのではなく外側に向かうかのように放たれた。それは無理やり縮めていたバネを抑えていた手が無くなったような放出だった。抑えるものの無くなったバネは元に戻ろうとする力ではねる。今回はそれが爆発という形で表れるかのようだった。ドッゴオオンという音と共に爆風と熱風がコンビニの窓ガラスを叩きガラスが砕け散る。爆弾の置いてあった場所は床の塗装が吹き飛び、コンクリートがむき出しになり、砕けている。爆発は一瞬で起こり、一瞬のうちに収ま

る。ただ、ゴオオオオオという空気の動く音が店内に響く。風の流れが店内の爆風による煙を少しずつ店の外に追いやり中の様子が徐々に見えるようになってくる。コンビニの店員は、床にうずくまって身を縮めていた。それは、女の風紀委員が彼を守り易いようにとつさに屈かがませたからでもあった。そして、彼と話していた女性の風紀委員は彼の前に片膝立ちのような体勢で航空素材の盾を爆発源の方へ向け、自分の体と店員の体を守っていた。そのため、二人には怪我はなかった。そして、爆発による飛来物が収まると女の風紀委員は逃げ遅れた女生徒と男の風紀委員の方へ駆け寄った。

「大丈夫！？ 怪我は？」

「わ・・・私はこの人が庇ってくれたから・・・で、でも・・・」
女生徒はほとんど怪我もしていなかった。しかし、彼女をかばったことで男の風紀委員は、かなりのひどい怪我を負って地面に倒れていた。女生徒を抱きかかえるようにかばったのだろう。彼のワイシヤツは背中部分が吹き飛び、背中に大きく火傷を負っていた。背中の皮膚や腕の皮膚は爆発で焼かれ黒く炭化しているところもある。火傷は危険だ。皮膚の20%が火傷になれば死ぬとまで言われているほど命にかかわる。なにより、皮膚を失った部分からの感染症が最も危険だ。皮膚のない部分は恐ろしく菌類に対する抵抗力を失ってしまう。彼はそんな危険な状態になっていた。

「ぐ・・・ツ・・・」
男の風紀委員は唸るだけで精一杯なほどの怪我だった。

「とまあ以上が昨日の夕方起こった事件ですの」
児童公園の一角にあるジューズの自動販売機の前で、白井黒子は尊敬すべき先輩であり、よく行動を共にして、全幅の信頼を寄せられている、お姉さま、御坂美琴に昨日起こった事件のあらましを説明していた。対して、美琴は自販機に蹴りを入れてジューズを叩き（

蹴り)出すという蛮行の真つ最中だった。そして、ガシャンという音と共に自販機からジュースが落ちてくる。ここの自販機は、ジュースを止める器具が緩くなっているため衝撃を加えるとジュースが落ちてくるのだ。ジュースは選べないが金を入れることなくジュースが出てくる。明らかに窃盗のような現場だが一概にそうとも言えない。なぜなら、この自販機は金を飲み込むのだ。お金を入れてもおつりは出ない。返却ボタンを押しても金は返ってこないと言うそれはもう鬼のような自販機だった。もちろんそのことを知らない人達は知らずにお金を入れて泣きを見る羽目になる。そして、この御坂美琴もそんな人間の一人だった。一年ほど前、入学して間もなかった美琴はこの自販機の事を知らずお金を入れてしまったのだ。

万札を。もちろんその万札が帰ってきたかと言えば、答えるまでもない結果だった。それ以来美琴はこの自販機からジュースを蹴り出すようになったのだ。最初に蹴ってジュースが出てきたのは万札をこの自販機に飲まれた腹いせに本気で蹴りを入れた時だった。今の行いはそのことに起因している。しかし、この二人は常盤台中学と呼ばれる名門女子中学校の生徒である。こんな光景を他の学校の学生が見たら驚くこと間違いなしだった。

「聞いてます？ お姉さま」

自販機に蹴りを入れながら自分の話を聞いているのか怪しく思った白井は、美琴に問いかける。

「聞いてるわよ。連続爆破事件とかいうやつでしょ」

美琴は自販機から蹴り出したジュースの缶を見て、う・・・ハズレだ、と言いながら白井の問いに答える。

「ええ、正確には連続虚空爆破事件です」

白井は美琴の手にあるジュースのアルミ缶をコンと人差し指でつつきながら話を続ける。

「アルミを起点として重力子の数ではなく速度を急激に増加させてそれを一気に周囲に撒き散らす。 ようは『アルミを爆弾に変える』能力ですの」

そう言われて美琴はアルミの缶をムムツと言った表情で見る。

「ぬいぐるみの中にスプーンを隠して破裂させたり、ゴミ箱のアルミ缶を爆破するといった手を使ってきましたの。爆発の前に前兆があるので死亡者こそ出ていませんがまだ犯人の特定ができていませんの」

美琴は白井の話を聞くと、さっき買ったばかりのジューズを開けなようにとする。ジューズはパキユツといった音を立ててプルタブが開いた。

「能力者の犯行なんでしょ？（ゴクツ）だったら学園都市の『書庫』がくえんとしにある全ての学生の能力データをあたって該当する能力を検索すれば（ゴクツ）容疑者を割り出せるんじゃないの？」

美琴はジューズを飲みながら白井に問いかける。『書庫』バンクとは、学園都市における全学生の能力の種類からレベル、能力による事件、一部ではDNA情報までもが保管されているサーバーだ。そこには全学生の『能力測定』システムスキャンの結果が載っているのだからそこを探せば能力者の割り出しは基本的に難しい作業ではないのだ。

「ええ、その結果学園都市には今回の事件を起こせるほどの能力者は二人しかいないことが分かりましたわ」

「じゃあ、その二人のアライを調べるなりすれば分かるんじゃないの？」

白井は難しい顔で一度黙った後に言葉を続ける。

「・・・今回の事件の容疑者候補の一人目は、能力『量子変速』シンクロトロンを持つ大能力者、鋤路帷子^{レベル4}という学生です。しかし、今回の一連の事件の始まりは一週間前なのですけれど、彼女は八日前から謎の昏睡状態に陥っていますの。病院からの外出はおるか一度も意識を取り戻しておりませんし、医療機器にも記録が残っていますので彼女に犯行は不可能ですの」

「容疑者候補って二人いるんだったわよね？ だったら、もう一人が犯人ってことじゃないの？」

白井は美琴の言葉にさらに難しい顔をして話を続けた。

「二人めの容疑者候補の名前は、……神無月有真、かんなつきゆうま昨日お姉さまと一緒にいらした殿方ですの……」

「うーいはるーん おっはよ

ん!!」

その言葉と同時に、バサツ、という音が発生し登校中の初春飾利のスカートは重力に逆行する動きを見せた。初春の通う柵川中学女子の制服は一般的にセーラー服と呼ばれるものである。ブレザーやワイシャツ、サマーセーターなどの制服が増えてきた近頃では徐々にその数を減らしているこの服をそのまま残している柵川中学は、なかなか伝統ある中学といえるのかもしれない。そして柵川中学では規則によりスカートの長さも決められており少なくとも膝が隠れるくらいの長さがなければいけない。そんな、一般的にみると長めに設定されている初春のスカートが空中に跳ね上がった。普段はスカートの中に隠れているへそが見える程度には。そして、へそが見えるということは、へそより下方向に存在しているものはすべて見えると言うことだ。

パンティー【panties】

女性用の下半身用の短い下着。ショーツ。

縞模様の付いたものを縞パン、サイドを紐で留めるものを紐パン、はいていないものをノーパンと言う。

若者のための学園都市特殊国語辞典参照

「!?!? ……ツ!!」 ぎゃわ

ツ!!」

初春は、スカートを同じ学校の同じ教室に通う佐天涙子さてんなみこの手によって後ろからまくられ、悲鳴を上げた。佐天と言えは、朝の挨拶とばかりに初春のスカートをめくることにためらいが無かった。

「おっ 今日淡いピンクの水玉か」

「だっ・・・男子もいる往来でこの暴挙ッ!? 何すんですか佐天さんっ!!」

実際、今の佐天によるスカートめくりで初春の今日の下着の色・柄は登校中の男子数名の知ることとなっていた。後方を歩いていた男子も、

「みた？」

「一瞬だけ・・・」

などと言う会話を小声でしているのだった。そんなことに初春も佐天も気が付かない。初春は自分のスカートの中身が公衆の面前で公開されたことでパニックに陥っており、佐天は佐天で、初春をいじることの方が優先されているからだ。

「クラスメートなのに敬語とは他人行儀だねえ。 どれ、距離を縮めるためにも親睦を深めてみようかね」

「わ　　く　　く　　ッ!!」

再び、佐天の手により初春のスカートが浮遊させる。今度は、前からだったため初春も対応することができ、スカートの前を押さえることに成功はした。しかし、現実には初春に厳しく、登校中の男子に優しくかった。実際、スカートの全面を押さえはしたものの初春の下着は衆目に晒されることになっていた。

「めくらないでくださいっ!! 連続でめくらないで?????っ!!」

登校中の男子には、わざわざ後ろを振り返って二人の様子（初春のスカートの中身）を見る者も多くいた。初春のスカートがまくりあがるたびに周りからおおくと声も聞こえた。

「ごめん、ごめん。 ちよっと調子にのっちゃった」

再び学校に向かって歩きながら佐天は軽い調子で初春に謝った。初春は赤い顔をぶうと膨らませている。

「ヒドイですよ・・・」

「お詫びにあたしのパンツ見せよっか？」

「結構です」

佐天の『あたしのパンツ見せよっか』発現を初春は軽く流す。その一言で、あの後もこの二人なら何か良いものを見せてくれるのでは？と二人の行動を気にしながら登校中の男子生徒たちの希望が奪われたは言うまでもなかった。そんなことには気が付かず二人は歩いて行く。

「あ、そーだ。初春が聞きたがってた新曲ゲットしたからこれで機嫌直して」

そういつて佐天は音楽プレイヤーにつながっているイヤホンの片側を渡す。

「あ、これ今流行のプレイヤーですよ。ダウンロード中心の」

「まーねー、今も新曲引つ張ってきてんだけどP.V.について一曲百円よ。CD買った頃なら信じられない値段よね」

そういつて歩く初春と佐天の横をメガネの男が逆方向へ歩いて行った。

「初春つてこういうの疎いよね 遊びが足りないって言うか」

「うう・・・余計なお世話です」

メガネをかけた男の横を二人の女子中学生が楽しそうに歩いて行った。そんな様子を気に留めもせず、メガネの男は歩いて行く。メガネの男は中学生、いや高校生ぐらいの年齢で、学校の制服を着てカバンを持って歩いているところから登校している最中なのだろう。音楽プレイヤーから延びるイヤホンを耳につけ暗い雰囲気で行く。そんな彼の前から二人のいかにも不良といった風情の男たちが歩いてきた。すれ違う時にメガネの男は不良の一人と偶然肩がぶつかってしまった。もちろん、メガネの男は偶然だからと気にも留

めなかつたが、不良の方はそうはいかなかつた。歩いていこうとするメガネの男の髪の毛を後ろから掴み引つ張る。気弱そうなメガネの男は『ひッ?』と声を上げて驚いた。肩がぶつかった方の不良はメガネの男の髪を引つ張りながらにらみを利かせる。

「人にブツかつといて謝罪もなしかよ?」

「え? だつてそつちがぶつかつて・・・」

メガネの男が反論しようとする顔面を殴られた。殴られた部分を抑えながらメガネの男は地面に四つん這いで這いつくばつた。その様子を不良は立つたまま上から見下ろす。その顔は不愉快そうな表情を浮かべていて、こいつを蹴飛ばしてやろうかとも考えているかのような顔だつた。それを見た風紀委員が急いで駆け付ける。駆けつけてきた風紀委員は大柄で体格の良い高校生くらいの男だつた。

「こらそこつ何してる!」

さすがに不良たちも風紀委員と揉めるのは嫌だつたらしく、

「っせーな。何でもねえよ」

といて歩いて行つてしまつた。その不良たちの様子を風紀委員は仕方なさそうに見送る。

「まったく・・・君は大丈夫か?」

メガネの男は風紀委員に聞こえない程度の小声でつぶやく。

「もつと早く来いよ」

なにかを小声で言つたような雰囲気があつたため風紀委員の男は聞き返す。

「? 何か言つたかい?」

「別に・・・」

そう言つてメガネの男はその場を後にした。

「なん...だと!?!」

美琴と白井が神無月の容疑について深刻に話し合っていた頃より少

し後、当の張本人は寮にある自分の部屋でノートパソコンの画面を凝視して戦慄わななしていた。そう、神無月は自分で自分に一虚空爆破事件の容疑が掛かっていることに気がついた。なんて事はなかった。神無月が戦慄わななした理由、それはネットサーフィンしていて偶然ある情報を見つけてしまったことであつた。

「・・・まさか、二日連続で新スイーツが発売するなんて！」

そう、神無月有真かなつぎゆうまは大の甘党だ。甘味の新しい情報があると自分の琴線に触れるかどうかを確かめに九割近い確率で販売開始する当日中に現れる。特に今はコンビニデザートにハマっていて新スイーツが店頭に並ぶという情報を聞きつけると朝から買い求めに来るほどだつた。昨日も新しいコンビニスイーツの情報を聞きつけ買いに行つたのだつた。しかし、昨日販売されたということが、神無月の「今日は新しく出ないだろう」という油断を招いた。そのため、土曜日だつたということもあり爆睡、そして朝飯をすつ飛ばして太陽が真上に上がるくらいの時間までこの情報に気が付かなかつたのだつた。

「God damnガッデム《こんちくしょう》！ 何やってんの俺！？ クッソー油断していた　　！！！！ いや、今からでもまだ間に合う！ まってるよ、ムーンノエル（コンビニスイーツの名前）　　！！！！」

甘いものことになるかと我を忘れる神無月かみづきだつた。

「黒子、アイツが容疑者候補ってホント！？」

「ええ・・・、お姉さまも彼の力はご覧になりましたわよね。彼は重力を操る能力者で、その力の根源は重力子を操作する能力によるものです。つい先日の能力測定システムスキャンで超能力者認定レベル5をされ、その際に分かつたことらしいですけど。その力は、重力子の数グラビトンを増やすことも、速度を急激に増加させることも可能ですの・・・」

「・・・」

微妙な沈黙が二人の間に降りる。美琴も白井も神無月には少なからず恩があり、それなりに信用はしているのだった。そんな暗い雰囲気吹き飛ばすように白井は言う。

「しかしですの、彼が犯人だと決めつけるにはいくつかがおかしな点がありますの」

「どうということ？」

「彼が犯人なら被害が小さすぎると思いません？ それにアルミ製の物だけが爆弾として使われていることもおかしいですし、何より昨日の事件当時お姉さまと彼は一緒にいたはずですよ」

「ちよつと待つて、きちんと説明して」

「はいですの。 まず一つ目ですけど、彼が本気を出せば建物くらい簡単に無くなるレベルの爆発が起こせますの。 にもかかわらず今回の一連の事件、怪我人こそいますが死者は出ていませんの。」

「加減したのでは？」と言われればそれまでですが、一連の事件の爆発力は徐々に大きくなっていますの。 威力が大きくなればそれだけのレベルが要求される、それでは犯人候補が少なくなってしまうですからわざわざ自分の身を危険にさらすようなことはしないと
思うんですの。」

能力者は無能力者レベル0、超能力者レベル5の6段階に分けられる。学園都市には230万人もの学生がいるが、その全員がこの6段階に振り分けられる。単純計算で1つのレベルに数十万人がいると言うことだ。もちろんレベルが高くなるほど人数は少なくなり超能力者レベル5においては学園都市の中でも8人しかいない。つまり、レベルを1段階上げるだけでもかなり難しいということだ。能力の向上は、一朝一夕の努力で出来るものではなく、長い時間をかけて少しずつ上げることができるかもしれないといった具合だ。もちろん努力だけでなく、先天的な資質によっても能力は異なる。つまり、使う力が大きければ大きいほど能力の特定が簡単になってしまうのだ。そのため、今回の事件が高レベル能力者の仕業しわざならばわざわざ大きい力を使い自ら

捕まるような危険は冒さないと白井は考えた。能力の威力を小さくしても建物の構造上どうしても弱くなってしまう部分を狙えば、甚大な被害が出せるからだ。それを応用したのが、建物の爆破解体だ。爆破解体は、建造物を支えている柱の一部を破壊することによって建物全体を壊す。わざわざ、建物全体にダイナマイトを仕掛け爆破することで吹き飛ばす必要はないのだ。

「二つ目ですが、彼の能力ならアルミ以外でも爆弾に変えられますの。例えば、店を支える鉄骨、金属の棚、硬貨など、もつと被害を大きくできますし偽装することもできますの。しかし、毎回アルミ製品を人形に隠して爆発させる。これは本当の犯人はアルミしか爆発させることができず、大きなものになると爆弾として使うことができないからではないでしょうか？」

そう、二つ目の疑問。なぜ、毎回アルミ製品が爆弾として使われるか。アルミだけを爆破することは犯人にとってあまり大きなメリットにはならない。なぜならアルミも含めて色々な金属を爆発させられる能力者とアルミしか爆発させられない能力者、この二人が同時に犯人候補に挙がったとするならアルミだけが爆発している今回の事件においてはアルミしか爆発させられない能力者の方が怪しまれはするが、決定的な証拠が出ない限りは両方とも犯人候補として怪しまれるからだ。仮にアルミを含めて色々な金属を爆発させられる能力者がアルミしか爆発させられない能力者に罪をかぶせようとしても自分自身が犯人候補から外されるわけではないので大きなメリットにはならないのだ。ならば、今回の事件もアルミしか爆発させられない能力者の犯行とみるべきだろう。また、アルミ缶やアルミのスプーンなどが爆発していることから見ても大きな物体は爆発させられないようだ。被害を大きくするならアルミの合金であるジュラルミンを主な材料とする旅客機などを爆発させた方がよっぽど被害が大きい。にもかかわらず、小型の持ち運べる程度のアルミ製品に限られているためこの犯人は超能力者^{レベル5}には達していないと白井は考えた。

「そして、最後に昨日の事件です。昨夜、お姉さまに昨日のことを聞きましたよね。お姉さまの話が本当なら事件当時、お姉さまは彼と一緒にいたことになる。つまり、アリバイがあるんですの。」

「そう、昨夜名前を呼び捨てにされた二人は悶々とした夜を過ごしたが、白井が美琴と神無月の関係を訝しみ美琴に午後の出来事を聞いていたのだ。」

「穴だらけの推理で、絶対の保証はありませんがわたくしは彼が犯人だとは思っていませんわ」

ニコツと白井は美琴に笑いかけますが、美琴はうぐんという難しい顔をしている。

「お姉さま？ どうしたんですの？」

「・・・有真は昨日の午後ほとんど私と一緒にいたけど、実は一瞬だけ消えたのよ。まあ、それは私の超電磁砲レールガンを避けるためだったんだけど。それを考えると完全なアリバイにはならないなと思って」

「・・・そういう大事なことは早めに言っただけですわ」

「ごめんなさい・・・」

「では、彼のアリバイはないってことになりますわね。彼の嫌疑を晴らす一番の決め手になりそうでしたのに」

どうしたら彼の無実が晴らせるのかと二人は考え込む。彼女たちの中で神無月が犯人であると言う考えはなかったのだった。少しの間、考え込むと美琴がハツとした顔をする。

「あ・・・」

「どうしたんですの？」

「そうよ、アリバイが無いんなら私たちがアリバイになればいいのよ」

「？」

美琴はニヤリと笑いその内容を白井に耳打ちする。

『キーンコーンカーンコーン』と学校の授業を終了する鐘の音が校舎に響き終わった。

「ん　　っ、終わったあ」

柵川中学では、半日授業の終了と共に多くの学生が校門から溢れてきた。その中には初春と佐天の姿もあった。佐天は授業で凝りきった体をほぐすように、うぐんと伸びをする。そして、二人は話しながら自分たちの寮への帰路に就いた。

「これで明日の終業式が終われば、ついに夏休みだねっ！」

「そうですねえ……え？」

佐天の喜びに初春が共感しようとしたが、視界に入った人達のせいきちんと答えられなかった。

「ん、どしたの初春？」

「佐天さん、あれって……」

初春の視線の先にいたのは、コンビニの入り口近くにある電柱の陰からそっとコンビニの中をこっそり覗いている美琴と白井だった。

コンビニを見張っているのか、コンビニの中にいる人を見張っているのかは知らないが、あからさまに目立っている。道を通り過ぎる人達も『この子たちは何をしているんだろっ？』という奇異の目で二人を見ながら避けていく。しかも、二人とも電柱の陰に隠れているつもりなのかもしれないが全く隠れることができているのだ。

きつと、コンビニの入り口の方から見ても二人の服や頭が見えているのであることが容易に分かる。そして、二人は常盤台中学ときわだいちゅうがくの制服を着ていることも目立つ要因の一つだった。常盤台中学は学園都市がくえんとしでも名門のお嬢様学校で、その行いは淑女として正しいものではなくてはならないとされている。そのため、土曜日などの休日でも基本的な服装は制服と言うことになっているのだ。名門と言うだけあって当然通っている生徒も頭がいい。にもかかわらず、漫画に出てくるいわゆるアホ探偵のごとき隠れ方を行っているのだ。常盤台中

学の名門という名が泣きそうな光景だった。

「……………」

「……………」

初春と佐天はと言うと、二人のアホっぽい行動にたつぷり60秒も固まってしまった。二人とも言葉が出ない。美琴と白井の珍妙な行動はそれほど驚きに値するものだった。

「……佐天さん、話しかけた方がいいですかね？」

初春が苦笑い気味に佐天に尋ねる。

「うん、まあ、初春の好きにしていっていいと思うよ」

「じゃあ、いきましようか」

「うん……………」

初春と佐天は、電柱の陰からコンビニを覗いている美琴と白井に近づき、肩に触れる。

「あの……………」

その瞬間、美琴と白井はビクツと体を震わせ飛び上がり、二人はすかさず後ろを振り返る。二人の驚き方にびっくりした初春は「あの、何してるんですか？」と続けるタイミングをずらされた。

「なんだ、初春さんと佐天さんじゃない、驚かせないですよ」

美琴は振り返って後ろにいたのが、初春と佐天だったことにとても安堵しているようだった。そんな態度をされるといったい誰に見つかからないように行動しているのか少し気になってしまった佐天は二人に問いかける。

「えっと、御坂さんも白井さんもこんなところで、何してるんですか？」

一瞬、『うつ』と言葉を詰まらせたが、美琴は答える。

「んー、簡単に言えば尾行…………かな」

答える際に美琴は目配らせのように白井の目を見た。尾行とは、相手の行動を探ったり監視したりするため、気付かれないように後について行くことである。と言うことは、やはり追いかける相手がいると言う事だ。美琴と白井が追いかける必要がある相手とは誰なの

か、二人で追いかけているのだから気になつていて彼を追いかけているなどと言うおとめチックな展開ではないだろう、と佐天は考えをめぐらす。

「もしかして、事件ですか？」

「ん、まあ、そんなところですよ」

白井が答えると初春が少し驚いたように携帯端末を確認する。

「そうなんですか？ 風紀委員^{シヤッジメント}のへ要請は来てないと思うんですけど」

「まあ、事件の予防と言いますか、アリバイ調査と言いますか、例の虚空爆破事件^{ケフブトク}の容疑者候補を見張っているんですよ」

「というと神無月さんですか？」

「そういうことですわ」

とりあえず、大まかに説明はしたものの容疑を晴らすためにわざわざ尾行しているとは恥ずかしくて言えない美琴と白井だった。二人の恩人でもある神無月の容疑を晴らすこととは一般的に見れば変なことではないが、少し気になつてしまつと何をしても変に勘ぐられそうな気がしてしょうがない多感なお年頃の二人だった。

「なぐんだ、御坂さんと白井さんが気になる男の人の私生活が気になつてスト キングしてたらおもしろいなぐつて思つたんですけど、やっぱり違いましたか」

「ゴブツ、ゴホゴホ」

同時にむせる二人、そんなつもりはなくても、やっぱり気にしていることを突かれると激しく反応してしまふ。

「だ、大丈夫ですか、御坂さん、白井さん」

「大丈夫、ありがと初春さん、さ、佐天さんもい、いきなり変なこと言わないでよ」

「あはは、ごめんなさい、で、今あのコンビニの中に神無月さんがいるんですか？」

「うん、さつき入ったばかりよ」

じつと、コンビニを見張る四人、神無月を追跡する人数はさらに倍

に増え、もうどうやって電柱の陰に隠れることなどできない。美琴と白井を見つけた時に驚いて固まっていた初春と佐天も話しかけたときは『注目されていますよ』と注意を促すつもりだったのだが今では注目される側の人間になってしまっている。ミイラ取りがなんとやらのよい見本になってしまった。こういう場合、客観的に見ているときは見られていることに気がついていても、実際に自分も見られる側の人間になるとあまり見られているということに気がつかないものだ。そして、新しい尾行仲間をパーティーに加えた美琴たち一行は神無月の監視を続ける。そこで佐天が美琴に問いかける。

「ところで、なんでいきなり尾行を始めようと思ったんですか」

美琴が神無月の尾行を行おうと考えついたときに戻る。

「ねえ黒子、有真のアリバイが無いんなら、私たちがアリバイを作ればいいのよ」

「……えっと、それはつまり彼を尾行すると言っ事ですか？」

「そのつもりだけど？」

あまりにも美琴が当たり前のように言うので白井はつつこむ。

「お姉さま、それはいわゆるスト キングというものでは？」

「ち、違いわよ、ただ私たちはアイツの後を付けて歩くだけよ」

「……お姉さま、それを一般的にスト キングと言うのだと思いますわよ」

「なっ、……そ、そうよ、私たちには虚空爆破事件クワックロウバクパツジケンの容疑者候補を調べるといふ目的があるからこれはスト キングじゃなくて、探偵とかが行う監視よ」

「ところでお姉さま、彼の家を知っていますの？」

「あ……」

神無月の家も知らずに尾行を行おうとしていたことが発覚した瞬間だった。しかし、白井はこの問いにもう一つの意味を持たせての質

問だった。

（良かったですわ。 これでもしお姉さまが彼の家を知っていたら逆に問題でしたの。 出会って二日で家まで知っていたら、お姉さまが彼の家に連れ込まれて、あんなことやこんなことを行ったのではと疑わなければいけないところでしたの）

白井は大好きなお姉さまの事となると色々と考えが暴走するのが玉に傷だった。 そして、美琴が神無月の家を知らないことに安堵するのだった。

「それで、お姉さまどうやって彼を尾行するんですの？ 先に言っておきますが、彼はあくまで容疑者候補で容疑者というわけではないので風紀委員としては動けませんわよ。」

「じゃあ、私が」「駄目ですの」

美琴が携帯端末を取り出すと、白井は即座にそれを止める。美琴は電撃使いの超能力者だ。その能力は攻撃だけに特化した物だけでなく、電気を操ることでネットワークを介したハッキングを行うことも可能なのだ。学園都市では情報にランク付けがなされていて、機密性の高い情報ほど高ランクとされる。低ランクに格付けされる情報は低ランク閲覧用の端末と高ランク閲覧用の端末の両方から見る事ができるが、高ランクのデータは高ランク閲覧用の端末からでしかアクセスできない。学生は学生用の情報しか見ることができないが、教師なら学生用の情報と教師用の情報の両方を見ることができるといふことだ。しかし、美琴がハッキングをすれば通常学生が閲覧することのできない高ランクの情報を低ランク端末からでも閲覧することすら可能になる。もちろん、違法な行いで風紀委員の取り締まり対象になる。風紀委員である白井が止めるのも当然だ。しかし、今度は美琴に手立てが無くなってしまふ。何かいい案はないかと美琴は頭を振り絞る。

（あれ、そう言えば昨日有真は、すっごい甘そうなお菓子を大量に買い込んでいたっけ。ん、そう言えば学園都市の都市伝説に甘いものを発売当日に必ず買い占める男、通称甘男の都市伝説があった

気がするわね。あれって確か、昨日言ったコンビニが舞台だったよな。まさか、あの都市伝説って有真？ 決めつけられないけど、ネットを探せば何か手掛かりがあるかも）
急いで、美琴は携帯端末を操作する。

「だから、お姉さまハッキングは違法行為ですってば」

「違うわよ、ちょっと都市伝説をネットで調べるのよ」

「？」

白井からすれば、神無月の尾行の話から都市伝説についての話への飛躍の意味が分からない。疑問符を頭の上に抱えるのは当然だった。そんな白井の疑問には気付かず美琴は高速で端末を操作する。

「あつた！」

「？ 何がありましたのお姉さま？」

「これを見て」

美琴が白井に見せたネットのページは、都市伝説の特集ページ、ちょうど甘男（あまお）についての関連記事と写真が掲載されており、写真には「この人物が甘男なのか？」という文字がデカデカと斜めに書かれている。そして、その姿はまぎれもなく美琴が昨日戦った人物、そして一昨日（おとこ）白井を凶弾から救った人物のものだった。

「これは彼ですね。でも、ここから何が分かるんですの？」

「そして、これがもう一つのページ」

今度は昨日美琴の行ったコンビニの新作スイーツ販売日予告なるページが開かれていた。そこには、7月17日（金）『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシューロール』、7月18日（土）『ムーンノエル』、7月19日（日）『ボルドーの栗』と書かれている。

「つまり、甘男（あまお）である有真は今日このコンビニに高い確率で来るってこと、もし今日すでに有真がコンビニに来た後だったら、明日張り込んでいれば見つけられる」

「そして、彼の後ろについて行けば住んでいる場所も分かりアリバイを作り易くなる、わたくしたちが見張っている間に虚空爆破事件（クラッシュ）

が発生すればその場でアリバイが作れるという事ですね」

「今日コンビニに有真が来たかどうかは今日発売のムーンノエルってお菓子を大量買いた男子学生がいたかを店員に聞けばわかると思うし、さっそく行くわよ黒子」

「ハイですの」

そして、二人はコンビニの店員にまだ神無月らしき人物が来ていないことを確認すると電柱の陰からコンビニを監視し始めたのである。そして、初春と佐天が美琴と白井を見つける前に神無月はコンビニ入って行ったのだった。

「じゃあ、甘男の都市伝説ってホントだったんですね！」

これまでの経緯を美琴が初春と佐天に話すと佐天がものすごい食いつきを見せた。

「しかも、その正体は学園都市第三位の能力者絶対重力こと神無月さんだったなんて！」

佐天はかなり驚いているが、白井は少し冷静に言う。

「しかし、甘男といつても発売日当日に一つのコンビニの新商品を買い占めるだけの男がよく都市伝説になりましたわね」

「違いますよ白井さん！ 甘男の伝説はそんなものじゃないんです！」

すごく興奮した様子で佐天は白井の方にズイと顔を近づける。そのあまりの興奮具合に白井は少し後ろに下がった。初春はその様子をアハハハと生温かい視線で見守っている。そして、佐天は甘男の伝説について語る。

「白井さん、甘男はただ甘いものを買い占めるだけじゃありません！ 伝説の一つにこんなのがあります。甘男は買ったデザートを持っていつものようにコンビニから帰っていたそうです。ですが、その道中数十台の改造バイクが甘男の横を通り過ぎ、せっかく買っ

たデザートのを地面に落としたそうです。そのバイクの集団はスキルアウトで総勢一万人近くいたそうですが、その日そのスキルアウトは解散したそうです。なんでも、怒り狂った甘男あまおがスキルアウトの根城に突撃して全員を病院送りにしたそうです。それ以来、そのスキルアウトのメンバーはバイクに乗ることはなくなり、学校でまじめに勉強するようになったそうです」

「・・・彼は何をしているんです・・・、それにそこまで人物を特定できそうなことが分かっていたら都市伝説じゃないじゃありませんの、まあ行動が伝説なのはわかりますけど」

「まだ、ありますよ！ 例えば会社ひとつを倒産に」

「もう十分に凄さは分かったので、結構ですわ」

「そうですか？ じゃあ、甘男あまおと並び立つ都市伝説脱ぎ女ぬきおんなについて

「黒子、佐天さん、有真が出て来たわよ！」

佐天さあまが甘男あまおだけでなく別の都市伝説について話を始めようとした時、美琴が白井と佐天に有真がコンビニから出てきたことを知らせた。

美琴と初春は都市伝説の話にはほとんど入らずにコンビニを見張っていたのだった。見張られていることなど気が付かずに神無月は同じスイーツで満たされたコンビニ袋を両手に提げて自分の寮への帰路に就くのだった。

（何か視線を感じる気がする・・・）

神無月はコンビニで買った『ムーンノエル（コンビニデザートの名前）』の大量に詰まったビニール袋を両手に提げながら寮に帰ろうとしているところだった。あたりは既に学生寮に囲まれた住宅地である。そのため、物陰も多く存在していて死角も多い。住宅地ゆえに別段危険度の高い場所ではないが、背後に気配を感じるとさすがに色々な場所が危なく見えてくる神無月だった。

(コンビニ帰りに後を付けられる覚えはないんだけどな。俺が超能力者^{ベル5}になったことを嗅ぎつけた連中が学園都市第三位の座を狙って襲いに来たか?)

とりあえず、尾行されていることを気付いていないと思わせる方が危険度は少ない。もし、襲われたとしても尾行者にとっての不意打ちにもなるからだ。そういうわけで、歩く速度を不自然に変えず、カーブミラーなどを使って後ろをさりげなく確認するが誰もいない。(さすがに手慣れているな、こんな程度じゃ尻尾をつかませないか。じゃあしようがない、少し探りを入れるか)

神無月は重力を操る超能力者^{レベル5}だ。その力は、美琴同様に攻撃にのみ特化したものではない。この世のあらゆる物体は、それがどれほど小さい物体であっても、どれほど小さな質量であったとしても、質量を持つ限り重力を発生させる。そして、重力が発生しているなら神無月はそれを完全に感知できる。普段はほとんど感じないようにしているが、その気になれば半径5 km程度の円内に存在する物体の重力を感知することが可能なのだ。そして、重力を解析すると発生させている物体の質量や大きさまで分かるため、神無月は後ろを向くことなく尾行している人数、身長、体重、持ち物などを把握することができるのだ。なぜ神無月が常に重力感知を行わないかと言えば、ありとあらゆる物体が重力を発生させているため、脳に入ってくる情報量が多すぎて能力を含めてあらゆる行動に制限が付くのだ。例えば、能力ならば重力感知中はすでに存在している重力を大きくすることが限界で絶対重力^{ブラックホール}を作り出すことができず、日常生活では考え事を行うことに使う余裕がないほど頭が働かない。だから神無月は常に重力感知を使わない、使うときも範囲を極力絞り込んで使うようにしている。そして、普段使わない重力感知を使うと神無月の頭の中に重力値のデータが流れ込んでくる。

(ええと、俺の後ろについてきているのは四人か、背は四人とも俺より低いな、ん? この身長、体重、体つきから察するに女か? そうだ、四人とも女だ。しかも、一人は体の周りから電子による

重力が感知されるな、これは)

「黒子どう？ ばれてなさそう？」

「そうですね、尾行に気が付いたような素振りそぶりはありませんし、見つかつてもないと思いますわ」

「流石風紀委員ですね、白井さん。 初春にも見習ってほしいな」
「わ、私は後方支援が担当だからいいんです！」

四人は、常に神無月の死角になる位置を移動していた。時には、白井の空間移動テレポートを駆使し、時には美琴が壁の中の鉄骨に磁力を通して張り付き、残り全員を引つ張り上げるなどということもあつた。そして移動を繰り返すうちに神無月が一つの寮に入った。

「神無月さんあの寮に入りましたよ」

「ええ、ですが今度はこちらの死角に入られてしまいましたわね。」

これ以上近づくのはさすがに尾行がばれる恐れが出てきますがどうしますの？」

初春の言葉に続いて白井は三人に尋ねる。

「ここまで来たらアイツがどこの部屋に住んでいるかは確かめないと」

「そうですね、仮にばれても部屋さえ分かっちゃえばいいわけですし」

どうするか決まると四人は学生寮の一階に足を踏み入れた。しかし、すでに一階には人の姿はなかった。そして、美琴たちの前には誰もいない廊下とエレベーター、上に続いていく階段があった。ここで考えられる神無月の行動パターンは三つ、一階に神無月の部屋がありすでにその部屋に入ってしまったパターン、一階より上に神無月の部屋がありエレベーターで昇ったパターン、最後に上の階に部屋があり階段で上に登ったパターンだ。そして、運のいいことにエレベーターは一階で止まっていた。つまり、階段で昇ったか一

階に住んでいるのかどちらかとなった。ど知らがそうか決めかねて少し話していると、

「・・・ん、ちょっと静かに」

美琴が全員に声をかける。するとコツコツとコンクリートでできた階段を上がっていく音が聞こえた。神無月は階段を使っていたのだ。幸いなことに土曜日の昼ごろということもあり、学生寮は静かだった。今日出かける予定だった者は大体が午前中に出払い、いまだに眠っている学生もいるので物音がほとんどせず、足音も聞こえてきたのだ。そして、四人は階段を上がっていった。

「今何階ですか？」

「・・・たぶん、六階ですわ」

「なんで神無月さんこんな上の階なのにエレベーター使わないんですか？」

佐天の嘆きももつともだ。いかに元気な中学生であっても六階まで階段を上がり続けたら疲れる。しかも、尾行の最中ということでも段以上に精神的にも肉体的にも疲れやすくなっているのだ。しかも、神無月はまだ上がっているのだ。四人は神無月の死角にはいるものかなり近くまで接近していた。階段は蛇腹状の上に伸びている。そのため、上にいる人間は蛇腹の折り返し地点である踊り場を過ぎると下をのぞきこまない限りは踊り場より下にいる人間を確認することはできない。それを利用して四人は隠れているので実質的な距離は5mと離れていない。そして、階段を上る音が七階でやっと途切れた。続いて七階の部屋の扉を開閉する音が聞こえて四人は七階へ足を踏み入れた。

「この階のどれかが彼の部屋ですわね」

「私こんなにドキドキしたのは久しぶりですよ」

初春も少しテンションが高い。そして、これからどうするかが問題

だ。七階に住んでいるということは突き止めた。しかし、そこから先がつかまらない。七階の部屋の扉には部屋番こそついているが、防犯のためか名字すら書かれていない。かなり行き当たりばったりの尾行だったため、色々なことに気が回っていなかったのだ。通常、探偵が捜査するなら、かなりの長期間をかけて調べるため潜伏場所を近くに用意したりすることもできるがそんな用意はしていないし、時間もそこまで多いわけではないのだ。次の一手を四人は考える。

「で、お前ら何してんの？」

いきなり後ろから声をかけられ、美琴、白井、初春、佐天は飛び上がった。とつさに後ろを振り返るとジト目で四人を見る神無月の姿がそこにはあった。

「な、ア、アンタ、どこからいきなりあらわれたのよ!？」

「いや、美琴は俺の能力知ってるだろ。昨日部屋まで運んだばかりでもう忘れたのか？」

神無月は強力な重力によってワームホールを作り空間を移動できるその力で昨日力の使い過ぎで動けなくなった美琴を寮の部屋まで運んだのだった。

「じゃ、じゃあいつからわたしたちが尾行してるのに気付いてたの!？」

「コンビニ出て少ししたときくらい？」

「ほとんど一番はじめからじゃない!？」

「って言っても、誰かが付いて来てるなっつてくらいで、美琴達四人だつて気が付いたのはこの近くになつてからだけだな」

「じゃあなんで」

「まあ待とうぜ。立ち話もなんだし、俺の部屋で話さないか？」

第03話 (何か視線を感じる気がする・・・) (後書き)

遅くなりました。

就職試験や学校の中間試験で忙しくあまり書く時間がありませんでした。

まあ、完全になかったかと聞かれればそうではないのですが・・・就職試験、一社目は残念ながら落ちてしまいました。

また、今月中に二社目を受ける予定です。

また、次話をあげるまで時間がかかってしまいかもしれませんが、まだ頑張っていくのでよろしく願います。

応援メッセージや質問も常時受け付けています。

これからの展開に関することは話せませんが、それ以外ならば基本的にあとがきなどでこたえていくつもりです。

今後ともよろしく願います。

第04話 あ 『幻想御手』があつたらな―

「・・・・・・・・」

「ふえ〜〜ここが神無月さんのお部屋ですか」

「意外と綺麗に片付いているんですね」

神無月は四人を自分の部屋に招き入れていた。神無月の部屋の中は、確かに一般的な男子高校生の一人部屋にしてはかなり片付いているほうだ。洗濯物が山積みになっていたり、脱いだ靴下が床に転がっていたり、ほこりが溜まっていたりもしない。しかし、確かに人を呼ぶことができる部屋だといつてもつい数日前に出会ったばかりに女子中学生を四人も自分の部屋に招き入れるのは男子高校生としてどうなのだろうか。

「超能力者^{レベル5}の人のお部屋つてもっとこう訳のわからないものでいっばいって感じがしてたんですけど、あたしたちの部屋とそんなに変わらないんですね」

「まあ、それなりに人を呼べる程度には掃除してるしな、それに超能力者^{レベル5}つていつても能力以外は普通の人間だからな、部屋だつてたいてい変わらないさ、な、美琴？」

「・・・・・・・・」

「ん、どうした美琴？ そんな借りてきた猫みたいに静かになっちゃって」

神無月が話しかけると美琴はビクリと体を跳ねさせた。

「ベツ（声が裏返った）、別に男の人の部屋に入るのは初めてだなとか、すごく緊張するなとか思っただけだから！！」

「・・・そうか、ま、まあ、とりあえず立ってんのも疲れるだろうし、その辺で好きに寛いでいてくれ」

神無月は部屋の中央にあるテーブルの周り、主にソファや座布団を

指さしながら四人を座るように促す。招かれた四人はお互い顔を見合わせると皆揃って座布団の上に座る。誰もソファの上には座らないあたり、なんだかんだ言っても皆それなりに緊張しているようだった。

「そういえば、今さらだが二人は何て名前なんだ？ 美琴と黒子は知っているんだけど。」

「昨日の身代金要求事件の時は美琴に追いかけて聞きそびれちゃったからな」

「そういつて神無月が美琴の顔を見ると美琴は顔を赤くしていう。」

「それはアンタが私のことビリビリいうから悪いんでしょうが！」

「いや、名前教えられてないのに名前をきちんと呼べと言われても無理だろ。教えてくれたんならともかく教えられてないのに怒られるのは理不尽だろー」

「う、そ、そりやそうだけど・・・」

言葉に詰まってしまう美琴。 いじめすぎるのは趣味ではないので神無月は話題を戻す。

「まあ、いいや。二人の名前は？」

「あ、はい。 柵川中学一年の初春飾利です」

「あたしは初春と同じクラスの佐天涙子です」

「飾利と涙子な。 分かった、神無月有真だ。」

「よし、よろしくお願いします」

やはり、いきなり名前を呼ばれることに驚いた二人だったが、いきなり名前を呼び捨てにしてはならないなどと決まりがあるわけではないので何も言わなかった。しかし、心中ではかなり動揺していた。二人の神無月に対する評価は、人間関係における距離を詰めるのが凄まじく早い人だな」というものだった。とりあえず、全員の名前がわかったところで神無月はお茶を出すことに決め、台所の方へ赴く。そして、キッチンの方から神無月が顔を出して、

「みんな、麦茶でいいか？」

「お願いします」「お願いしますわ」「大丈夫です」「・・・お

願い」

四人とも少しずつ違った反応に神無月は微笑ましく感じる。

「あいよ」

コトツと言つ音を立てて氷と麦茶の入ったグラスを神無月は四人の前に置く。

「さてと、でだ、今日俺の後をこっそりついて来てたのは遊びつてわけじゃないんだろ？」

と本題にいきなり突入する。すると、それに答えたのは白井だった。「回りくどいことは好きではありませんので、率直に聞きますわ。

有真さん、あなた虚空爆破事件グラビトンの犯人ですの？」

率直すぎる。例え犯人でなかったとしても思わず聞き返してしまいそうになるほどの率直な問いかけ。これにはいと答える人間は存在するのだろうか、疑問である。問いかけに神無月は少しの間目をパチクリさせていたが、唐突に笑う。

「ぶつははは、いやまさか率直に聞くとは言っても、まさか本当にそこまで率直に聞かれるとは思わなかった。」

そこで神無月の表情が真剣なものになる。

「で、虚空爆破事件グラビトンと言つと重力子の加速による爆弾事件だろ？」

まあ、当然ながら俺は犯人じゃないぞ。まあ、犯人に聞いても

『自分は犯人じゃない』つて言うだろうけどな。俺もこのごろち

よくちよく感じてたんだ、俺と近い能力が街中でやたらと振るわれているのをさ。それで、容疑者を絞っていくうえで俺に行きついたら、そんなところか？」

「ご推察の通りですわ。容疑者候補はあなたともうひとりの生徒、しかしその女生徒は一週間ほど前から意識不明。現状で一番疑われているのはあなたですわ」

「まあ、確かにその状況なら俺が疑われて当然か」

神無月はまいったなあと頭をかく。

「違う」

と不意に美琴がつばやいた。

「確かに今ある証拠から推測したらアンタが一番犯人だと疑われる。でも、私たちはアンタを疑ってない、アンタが犯人じゃないって信じてる！」

「そうですね、わたくしもあなたがそんなことをする人じゃないと思っっていますわ」

「あたしもです。まだ、最初にあつたときから本の数日しか経ってないですけど、人質になつてた子供たちを助けた神無月さんが犯人だとは思いません」

「わ、わたしもです。わたしたち神無月さんが犯人じゃないって証明するために尾行してたんです」

出合つて数日でも自分のために行動してくれる人たちがいる。それは神無月の心を揺さぶる。

「俺なんかを信じてくれてありがとう。　と、もう昼か、じゃあ昼食作んなくちゃな」

そう言つて神無月はキッチンに逃げ込む。照れて赤くなつた顔を誤魔化すために。

（『信じてる』か、ホントに嬉しいこと言つてくれるな。　面と向かつて信じるなんて言つたの上条以来じゃないか？）

入学して間もないころ神無月はある事件に巻き込まれたのだが、そのときは上条が信じると言つてくれたことを思い出したのだった。

思い返せば、上条と仲良くなつたきっかけもそこから始まつた気がする神無月だった。しかし、それはまた別のお話。

料理を始める前に手と一緒に赤くなつた顔を冷やす意味も兼ねて神無月は顔を洗う。

「四人とも昼飯まだだよな？　うちで食べてくか？」
時刻は正午を過ぎたあたり、昼食には丁度いいぐらいの時間だ。

「別に私たちはお腹すいてないからいいわよ」
美琴がそう答えると、

『くうくうくきゆるるるくくくくうくく』と盛大にお腹が鳴つた、本人以外の全員が音源の方を向く。音源は期待を裏切らず美

琴だった。とつさに美琴がおなかを押さえて顔を赤くする。

「ぷっ、くくく」

「佐天さん笑っちゃ可哀想、ぷ、ですよ」

「ぷっ、ははは。ごめ、あまりにも、ぷっ、丁度いいタイミングだったから」

皆笑いを抑えようとしますがどうしても出してしまう。美琴は佐天、初春、神無月に笑われて顔が火をつけたように真っ赤になった。そんな美琴の肩にポンと白井の手が乗った。白井は「分かっていますわ」と言わんばかりの顔で慰めに入っているが、逆に美琴は居た堪れない気持ちになるのだった。そんな時だった。

「くうくうくうきゆるるるくくくくくくくくくくく」

また、お腹の鳴る音が響いた。

「くくくくくくくくくくく」

しかも、その音源は全てリビングの方からだった。

「ぷ、あははははははは、みんな昼食はうちで食べてくって事でいいみたいだな」

リビングにいる女子中学生四人は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にして、俯きつつ首をコクンと頷くしかなかった。神無月は冷蔵庫の中、棚の中などを確認し何が作れるかを考える。

「まあ、無難にたらこスパゲッティにするか」

まあ、食べられない人がいてもまた困る話なのでとりあえず確認を取る。

「なあ、昼飯たらこスパゲッティでいいか？」

リビングにいる四人に確認を取ると、皆まだ俯いたままで、しかしコクコクと頭を縦に振るのが見えた。若干、とりあえず首を振っているだけなんではないかと思ってしまうほど反応が薄い。どうやら先ほど腹が鳴ったことを相当気にしているようだった。

（本当に聞いてんのかな俺の話。腹が鳴るくらい人間なら当たり前だし、別にそんなに恥ずかしがる必要もねえと思うんだけどな）彼女たちが恥ずかしがっているのは、明らかに神無月に笑われたこ

とが原因であるのに当の神無月はそのあたりを全く理解していない。『類は友を呼ぶ』というが神無月も上条に負けず劣らず鈍感なのだった。その頃、首をコクコク振っていた美琴たち四人は、心の中で悶えていた。

（美坂さん、お腹が鳴ったの笑ってすみませんでした。あたしも人のこと言えませんでした。ううう、恥ずかしすぎる）

（恥ずかしいです。佐天さんと一緒に美坂さんのお腹の音を笑ってしまった罰が当たったんですね。うう、ごめんなさい美坂さん、そして忘れてください神無月さん）

（お姉さまを辱めるだけでなく、このわたくしも辱めるとは中々やりますわね。ああ、でも本当にお腹が鳴るのを殿方に聞かれるなんて黒子一生の不覚ですわ〜！）

（ああ、なんでこんな時ばかりおなかが鳴るのよ。今まで鳴ったことなんて殆どなかったのに。しかも二回って、私だけ二回って、恥ずか死ぬ〜）

それぞれ四人は思い思いに心の中で苦しんでいた。そんな四人の心の中の葛藤を露ほども知らず神無月はたらこスパゲッティ作りに勤しんでいた。

（生たらこ（125g）と牛乳（100g）とだししょうゆ（小さじ2杯半）を混ぜてっと）

たらこスパゲッティのソースを作る神無月の横では鍋で五人分のスパゲッティが茹でられている。神無月も『学園都市』に入ってから長くたつ。今の学生寮に入ったのは今年だが、親元を離れて『学園都市』に来たのは中学生になった時だ。つまり、一人暮らし歴も四年目に突入したのだ。学園都市に来たばかりのときは料理もまともに出来なかった為かなり外食やコンビニ弁当に頼っていた。しかし四年も一人暮らしを続けていると料理の腕も上がり、並列作業も今では楽々行えるようになっていた。

（っとそろそろ茹で上がり時間か）

鍋の火を消して麺の水切りを行う。そんな神無月の様子をリビング

にいた四人は見ていた。そんな時、初春はあることに気が付く。

（あれ、わたしたちいきなり神無月さんの家に押しかけてきて、昼食しょくを作ってもらって、しかも見てるだけで何もしてない！これってすごく失礼なことをしてるんじゃない？ 少なくとも昼食作りのお手伝いくらいはしないといけないのでは！？ しかも男の神無月さんに作らせて、女の私たちは見てるだけ、これは良くない、なんて言うか女の子としての立場的に！）

焦りを感じる初春は、美琴、佐天、白井に自分の考えたことを急いで伝える。

「あ、あの美坂さん、白井さん、佐天さんも、わたしたちいきなりここに押し掛けてきて、昼食まで作ってもらっちゃって、それを待ってるだけって女の子として不味くないですか!?!」

「……!!!!!!」

バツと四人はキッチンの神無月の方へ顔を向ける。なんだか、割と楽しそうに料理をしているが、それを待っているだけと言うのはやはりどうなのだろう。むしろ、『いきなり押し掛けてきたのだから私が作る(ります)』、くらいの事は言うべきだったんじゃないかという考えが四人の頭の中を駆け巡る。

「……料理を作って美味しければ、お腹の音の件少しは頭から薄れるかな」

美琴がポツリと呟いたその一言は初春の一言同様に三人に衝撃を与える。漫画だったらズガンという効果音と共に背景に雷が落ちるくらいの衝撃だった。そして、四人の腹が据わる。

「有真、料理手伝おうか？」

「神無月さん、わたしもお手伝いしますよ」

「あたしも手伝いますよ」

「わたくしも手伝わせていただきますわ」

と四人が神無月に申し出る。神無月は四人を上から下まで眺めると、

「……ああ、大丈夫。もうすぐ出来上がるから」

「ちょっと、今の沈黙は何!?! 私たちに料理ができないとでもい

「いたいわけ」

神無月は少し目を背けて言う。

「いやー、なんかベツタベタな爆発落ちが見えた気がしたから」

「アンタ、ちよつと失礼じゃない!？」

美琴が食いつくと他の三人も不満気にブーブーいう。

「そうですよ、いくらなんでもひどいですよ」

「そうです。あんまりです」

「いくらなんでも、失礼ですわ」

それを見て、神無月はプツと笑う。

「嘘、冗談だよ。手伝わって言っても残ってる仕事なんて海苔を細く刻むくらいしかないからもう少しだけ待っててくれよ。四人の料理はまた今度ご相伴に預らせてもらうから。期待してるんですよ」

神無月はニヤツとちよつと意地悪げに微笑む。「期待している」なんてプレッシャー以外の何でもない。しかも、「失礼だ」と文句を言った手前四人は断れない、自らハードルをかなり高くしてしまったことに今更ながら後悔し始める美琴・白井・初春・佐天だった。神無月は四人が神無月を手伝おうかと話しているときにはすでに、水を切ったパスタをフライパンでソースとオリーブオイルを絡めて火を通して皿に盛り付けまでし終わっていて、あとは本当に海苔を刻んで上に乗せるだけという状態まで作り上げていた。神無月は味見に一本麺を引っ張り食べる。

（うん、大丈夫だな。とりあえず、人に出せるレベルにはなっているはず・・・）

神無月は四人を困らせはしたものの、なんだかんだで不味いと言われないか心配だったのだった。

（海苔を刻んで、よし完成つと）

お盆に五人分のたらこスパゲッティを乗せるとテーブルまで運んで置く。

「うわ、お、おいしそうね」

「本当にそうですわね」

「お店に出ている可笑しくないレベルですよ」

「ホントにあたしたち手伝う必要ありませんでしたね」

四人は出てきたスパゲッティに驚く。しかし、そのスパゲッティの素晴らしさは同時に今度、神無月にご飯を作ると言う条件のハードルを上げる。

(これに勝つ料理を作るってかなりハードルが高くない?)
そんな美琴の心境など知らずに神無月は料理を勧める。

「冷めないうちに食べちゃってくれ」

「うん、じゃあ」
「いただきます」

口に入れた瞬間に四人の口から言葉が漏れる。

「おいしい」

「気に入っていただけで何よりだよ」

その後は談笑を交えつつ昼食は進んだ。スパゲッティもおよそ半分くらいになったころ佐天が周りを見回す。

「今さらですけど、この部屋って学園都市に八人しかいない超能力者が二人もいるんですよ。あゝあ、あたしも超能力者とはいかないまでも少しは能力が使えたらよかつただけだな」

「佐天さん・・・」

初春は何か言おうとしたが、言葉が続かず、この件に関しては超能力者である神無月も美琴もどうしようもないため、お互いあいまいな表情を作ることしかできない。

「あ、ごめんなさい。あたし空気悪くしちゃいましたよね。で

も、あ 『幻想御手』があったらなー」

「え? なんですかそれ?」

幻想御手という聞きなれない単語に初春が反応する。

「いやー、あくまでも噂であたしも詳しいことは知らないんだけど、あたしたちの能力の強さを簡単に引き上げてくれる道具があるんだって。それが幻想御手・・・ま、ネット上の都市伝説みたいなものなだけだよ」

学園都市には学園都市内だけの都市伝説が掃いて捨てるほどゴロゴロ転がっている。信憑性の全くないものから本当にあるんじゃないかと思ってしまうような物まであり、そのカテゴリも様々だ。お化けやら妖怪やらのオカルトチックな話から今回の幻想御手のような実際にあるんじゃないかと思われるようなアイテムの噂まである。「実際にあつたらすごいですけど、そんな便利なものがあるならわたしたちがこんなに苦労してるわけじゃないじゃないですか」

「うん、そうだね。でもさ本当にあるならあたしでも・・・」

「？ 佐天さん？」

「アハハ、なんでもないよ」

二人の会話を聞いていた美琴と白井の頭の中では同じことが考えられていた。

（大能力者量子変速の釧路帷子でも超能力者）絶対重力の神無月有真うまでもなかったら書庫バンクに乗っていない能力者の犯行。そして今の噂、幻想御手・・・関係がある？ そんなものが実際にある？ まさか・・・ね）

朝、初春たちとすれ違ったメガネの少年も下校時刻となり教室を出るためにカバンを持ち上げ肩にかけた時だった。

「ようっ」

後ろから聞きたくない声が投げかけられる。振り返るとそこにはクラスメイトの男三人がいた。そのうちの細身の男が見下したような不快な笑みを浮かべている。

「また、ちつと金貸してくんね？」

この『金を貸してくれないか？』と言う言葉を聞き始めてもうどのくらいになるだろう。『金を貸してくれないか？』何度、その言葉を聞いただろうか。そして貸した金が返ってきたことなど一度もなかった。最初の一回はただ金を貸してほしただけだと思えば

らの言う額を貸し出した。しかし、そこから毎日金を貸してくれ
と言うようになった。

「え・・・でも、こ、こないだ貸した分も・・・返してもらってな
い、よね」

そういうと三人のクラスメイトは無表情になり互いに顔を見合わせ
る。

ゴツ、ガスつという音で体育館裏に響き渡る。

「やつ、やめ、うぐ」

メガネの男は体育館裏に連れてこられ暴力を受ける。殴られ、蹴ら
れ、足で顔を踏みつけられる。

「ちゃんと返すって言ってるんだろ？ 出世払いでさ だいたい
無期限無利息無制限がお前の売りだろ？」

そんなこと言った覚えもそうであるつもりもなかった。暴力で地面
に転がされその拳句財布も盗られ中身を奴らが数える。

「ちっ、これっぽっちか」

「小銭は残しといてやんよ」

そう言っただけから同然になった財布を投げ返される。

「よす」

そう言っでもう一人の奴が返ってきた。

「そっちはどうだった？」

「楽勝楽勝、廊下水浸しに^{ジャッジメント}ただけで風紀委員の奴ら総出で片づけ
だしてさ」

「アーハッハハ」

暴力をふるうのが細身の男、体育館裏に誰も来ないか見張っている
のがデブの奴、そしてもう一人はこれだ。

「見回り後回しにしてお掃除か。あいつらホント頭力テ^{ジャッジメント}ーよなあ」

「頭力テ^{ジャッジメント}ーから風紀委員なんてやってんだろ」

「あ、そつか」

笑いながら三人は遠ざかっていく。こちらの事を振り返ったりなどしない。金さえ手に入ればこつちのことなんか全く興味がない。

（クソがつー！！ 風紀委員も何やってんだよ！！ 掃除するところ

が違うだろうが！！ 無能力者がこの僕に暴力を振ってるんだぞ！

何が風紀委員だ。お前らが無能だから僕がこんな目に遭うんだ。

気付けよツ・・・！！！！）

こうしてメガネの男の怒りの矛先はあらぬ方へと向いて行く。

「やっぱり俺が犯人じゃないって言ったところで証拠にはならないよな」

全員が昼食のたらしこスパゲッティを食べ終わったところに神無月が再び話題を戻した。美琴、白井、初春、佐天は別に昼食を食べるために神無月を尾行していたわけではない。あくまで、神無月の虚空爆破事件における無実を証明するためにここまで来たのだ。しかし、四人が神無月の部屋を訪れてした事といえば神無月に『あなたは犯人じゃないよね』と聞いたということだけだった。つまり何の解決もできていない。

「そうですね。本人の証言で無実の証明ができるなら犯罪者なんて現行犯以外は全員いなくなってしまうますものね」

「じゃあどうするのよ、黒子」

そう美琴が白井に尋ねたところで神無月はおもむろに立ち上がりキツチンの方へ向かうと冷蔵庫から人数分の食後のデザート（今日コンビニで買ったムーンノエルという洋菓子）とスプーンを持ってきて全員に配る。

「そのことなだけどさ、休日にアリバイを保証するために一緒に行動してもらえるか？ ここのところ虚空爆破事件の頻度も上がってきているから一・二週間の休みだけでアリバイは作れると思うん

だ。あ、けど迷惑だったら断つてくれてもいい。皆だつてやることくらいあるだろうし」

四人は顔を見合わせると溜息を吐く。

「何言ってるんですか？あたしたちが何のためにここまで来たのか忘れちゃったんですか？」

「神無月さんのアリバイを確かなものにする為に来たんですからいに決まってるじゃないですか」

「そうですね。それに風紀委員ジャッジメントとしても早めに解決したい事件ですから気にしないでくださいです」

「と言うわけで全員一致で休日は有真の疑いを晴らすつてことに決まったんだから、有真こそ、このことを忘れて一人で出かけたりしないでよ」

「じゃあ、あらためてよろしく」

こうして神無月の潔白を示すための行動が開始されたのだった。

そのころの風紀委員活動第177支部では、白井や初春の風紀委員ジャッジメントとしての先輩である固法美偉このりみいは虚空爆破事件グラビトンの犯人に繋がるものがないか過去の事件を洗っていた。

「やっぱり時間も場所も関連性なしか」

ずっと画面とにらめっこしていたため目が非常に疲れた。眼鏡を外し、目頭を指で押す。目頭には目の疲れに効果のあるツボがあるらしいため少しは効果があるのかもしれない。椅子にもたれ掛り背中を反らして伸びをする。普段、後輩たちの前ではほとんどやらないような格好だが疲れて行き詰った現状を打破するためには少しくらい力を抜いて見直したほうが逆に何かいい考えが浮かんだりするかもしれない。

「現状一番怪しいのはやっぱり神無月有真か。でも、白井さんはきつと犯人じゃないと言っていたし。そうすると完全に手詰ま

りね。 もう少し何か手がかりがあれば容疑者の絞り込みもできるのに」

もう一度事件のデータに目を通すが、特に犯人に繋がるであろう共通点はない。

「遺留品を^{サイコメトリー}読心能力で調べても何も出ていないし、同僚が九人も負傷しているのに何も」

そこで固法は何か引っかけを感じた。

「・・・九人？ いくらなんでも多過ぎない!？」

「ホントにおいしかったですね。 コンビニのデザートと思って甘く見てましたよ」

「だろ、だから近頃のコンビニデザートも馬鹿に出来ないんだよ。

まあ、たまにハズレもあるんだけどな」

「今度、当たりのデザートを教えてくださいよ」

「いいぜ、結構あるから覚悟しなきゃならないけどいいんだな」

「もちろんですよ」

食後のデザートを食べ終わり、佐天と神無月がコンビニデザートの話で盛り上がりその話が丁度終わった。そこで神無月が、

「じゃあ、さっそく悪いけど買い物行かないか？」

「? まあ、私は別にかまわないけど。 アンタさっきコンビニで買い物してたでしょ？」

「ん、ああ、あれは全部デザート」

「全部!？」

神無月がコンビニから出てきたときに持っていたビニール袋は、通常の学生が一周間は買い物に行かずに生活できる程度の食材が収まるほどの大きさだった。誰だってそれだけの量が全てデザートだとは思わない。

「アンタ、昨日も大量に甘いもの買ってたでしょ？ 昨日買ったや

つは？」

「ああ、全部食った」

「!?!」

「? そんなに驚くことか？」

美琴は驚きで目が点になる。白井、初春、佐天は昨日の神無月の買
い物を見ていない。どの程度買ったかを知らないため美琴の驚きが
伝わらない。

「神無月さん、昨日どのくらい甘いものを買ったんですか？」

「昨日は『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシュー
ロール』を30個くらい買ったんだけど、そんなに多いか？」

「多いですよ！ ケーキバイキングの店でだってそんなに食べる人
いませんよ」

「そうだったのか・・・」

若干自分の中の常識が否定されて神無月は少ししょんぼりする。

「ところで、アンタは何を買いに行くの？」

「まあ、基本的には食料品かな。 さつき冷蔵庫とか棚を見た時だ
いぶ食えるものが減ってたから。 そういう美琴たちは何か買っ
ものあるのか？」

今日もあんなに大量の甘味を買い込んで食べるのに、まだ食べるの
かと美琴は思いつつ応える。

「そうね。 まあ、少し服とか買いたいかも」

「じゃあ、出かけるって事でいいな、さっそくいくか」

「うん」

「どうしたんだ？ 迷子なのか？」

美琴達四人と買い物に来た神無月だったが、小学校低学年ぐらいの
女の子が歩道の真ん中でおろおろしていたので声をかけた（もちろ
ん、変な意味ではない）。 こういう場合、ジャッジメント風紀委員である白井や初

春が対応するのが一般的ではある。しかし、一緒に買い物に出かけたはずなのに神無月の周りには四人が四人とも居ない。なぜなら先ほど、

「うあ、これ夏の新作ですよ。可愛い〜」

と行って洋服屋が見えた時、佐天がショーウィンドウめがけて突っ走って行ってしまったのだ。そのとき美琴や白井、初春は引きずられるように連れて行かれてしまい。神無月だけ置いてけぼりを食ったのだった。

（おいおい、俺のアリバイを保証するために一緒に行動するんじゃないのか？）

と神無月は思ってしまう。しかし、問題は目の前の女の子だ。とりあえず、迷子なのか聞いたのだが、首を『ウンウン』と横に振られてしまった。

「じゃあ、どうしたんだ？ 何か探してるものがあるとか？」

その小さな少女は今度は首を縦に振った。

「うん。 お洋服買いに来ただけのお店が分かんない」

「そうか、じゃあ一緒に行くか」

ちょうど美琴たちが佐天に連れていかれたほうに『セVENTH セブンスミスト m i s t』という洋服店がある。もしかしたら、美琴たちもその店の中かもしれないし、合流するためにもちようどいい。そのため神無月は小さな女の子と一緒に『セVENTH セブンスミスト m i s t』に向かう。

神無月が小学生くらいの女の子と出会う少し前だった。ウィーンという音とともにクレーンが動きぬいぐるみを捕まえた。ゲームセンターの一角であるUFOキャッチャーでメガネの男は慣れた手つきでぬいぐるみを捕まえる。そのUFOキャッチャーの景品はどれを見てもおかしなものだ。中に入っている景品は全て熊やうさぎなど

の動物の形のぬいぐるみなのだが全てのぬいぐるみが禪ふんたしをつけているのだ。たつた今、メガネの男がクレーンで挟んだカエルのぬいぐるみにしても禪ふんたしをつけているし、両目は焦点が合っていないかのようであらぬ方向を向いている。これが本当に売れるのかと疑問に思わざるを得ないものだ。メガネの男は捕まえたカエルのぬいぐるみを持ち上げ、商品をきちんと穴に落とす。そして、わざわざ手袋を手にはめて商品を取り出す。

(新しい世界が来る。 僕が僕を救う。 僕を救わなかった風紀委員ジャッジメンはいらない)

そんなメガネの男の隣を女子中学生四人の集団が通り過ぎていく。メガネの男の目が細くなり、顔を醜く歪めて笑う。女子中学生の集団には風紀委員ジャッジメントの腕章をつけた女子が二人いた。一人はツインテール、ひとりは頭に大量の花飾りを乗せた少女だった。メガネの男はカエルのぬいぐるみを抱えつつ、彼女たちの行先を見届ける。『— Seventh mist』セブンズミストという洋服屋に彼女たちが入っていたのを確認するとメガネの男は鞆の中に大量に入っているスプーンを一つ取り出したのだった。そして、そのスプーンはアルミで作られたものだった。

「初春、こんなヒモパンなんてどう?」

「はい!? 無理無理絶対無理です。 そんなの穿けるわけないじゃないですか!」

『— Seventh mist』セブンズミストの中では、初春が佐天に勧められたパンツを見て赤面していた。

「え〜、でもこれならあたしにスカートめくられても堂々と周りに見せつけられるんじゃない?」

「見せないしめくらないでくださいッ!」

そんな二人の様子を美琴は「……………」という様子で見っていた。

(初春さんて、普段こういう風に佐天さんに弄られてるんだ・・・というか、今の話の流れだと初春さんて他の人のいる前でスカートめくられてるんだ・・・)

美琴は初春の様に公衆の面前でスカートをめくられることはなくとも、白井に下着を奪われたり、シャワー中に突撃テレポートされたりするため、初春に変な親近感が浮かんでくる。そんな時、

「お姉さまは何をお求めになりますの？」

と言いながら白井がかなりの防御能力の低そうな下着を持ってやってきた。それはRPGを始めたばかりの主人公張りの防御力の低さで下着を通して向こう側の風景が見えるレベルだった。

「私はパジャマとか見に来たけど・・・アンタのその下着もうちよつとどうにかならない？」

「わたくしとしてはお姉さまの下着の子供っぽさの方こそどうにかしてほしいですわ」

ムムムと二人の間で火花が散る。美琴と白井にしては珍しい意見の食い違い箇所だった。どうしても二人は下着においては分かりあえないようだ。ちなみに美琴は白井と逆で防御能力高めのパステル調下着を好む傾向にある。二人の下着の中間くらいを選べば年相応な下着になりそうなものだが、二人ともそれぞれこだわりがありどちらも妥協はできなかつた。

「はあ、まあこのお話はまたにしましょう。お姉さまの探しているのはパジャマでしたわね。それでしたら確かこつちの方にありましたわ」

白井が「こつちですわ」と言って先導すると、下着を見終わったのか初春と佐天も美琴達と一緒に寝具を見るために近くに来た。

「うーん。今までも色々回って探したんだけど、あんまいのが置いてないのよねー」

きよろきよろと周りを見渡していると美琴の視線がある一カ所で固定される。そう、それはパステル調の色合いで所々にデフォルメされた花柄があしらわれていたパジャマだった。端的に言って美琴の

好みど直球のパジャマだったのだ。そのパジャマを見つけた瞬間美琴な顔がほわんと緩む。

「ね ね これカワ」

美琴が自分の探し求めていたものを見つけた喜びから隣の佐天や初春に同意を求めようとし、振り返ると二人はパジャマを見て笑っていた。

「アハハ 見てよ初春このパジャマ！ すっごいセンス。今どきこんな子供っぽい着る人いないっしょ」

「そうですね。小学生の時までは、こういうの着てましたけどね」

美琴はカワイイと言おうとした言葉が途中で途切れ、「これ」と言っ

て示そうとした指が下に下がってしまう。

「そ・・・そうよね！ 中学生になってこれはないわよね」
自分の意見に恥ずかしくなった美琴は二人にパジャマを可愛いと言っていたことを気付かれなかったものの顔を赤くして慌てて二人の意見に便乗した。

「あ、御坂さんあたし水着も見ておこうと思うんですけどいいですか？」

「ええと・・・水着コーナーはあっちですね」

そういうと佐天と初春は水着コーナーの方へ向かった。白井は美琴の趣味を知っているため、美琴が二人の前で試着できないことに気が付き空気を読んで初春と佐天の方へ向かった。三人が十分に離れたことを見届けた美琴は、初春と佐天に子供っぽいと評価されたパジャマを手取る。

（いいんだモン。 どうせパジャマなんだから他人に見せる訳じゃないし！ 黒子はいいとして）

若干、理解してもらえないことにいじけてしまいそうになる美琴だったが、それでもやっとな好み合うパジャマを見つけた美琴はそのパジャマをあきらめきれない。手にしたパジャマを抱え、初春や佐天の様子をもう一度見る。

(初春さん達は向こうにいるし、一瞬姿見であわせるだけなら
ない)

そろりそろりと気付かれないように鏡の前まで移動してパジャマを
急いで体に合わせる。

(それっ)

急いで自分の体に合わせたパジャマの丈の具合とかを見ようとして
美琴は気付いた。鏡には自分以外にも人が映っていて自分の姿を見
ていることに。

「美琴、何でそんなに挙動不審なんだよ」

神無月だった。

「

ッ?

ッ

!??」

美琴は驚きで声も出ない。

まさか、見られた!?　なんで、嘘、ここに?　え、どういうこと
?

「な、なんで、アンタがここにいるの!??」

そう言いながら、美琴はパジャマを急いで元の場所に戻す。

「何でって・・・完全に忘れてるよ　　おいおい、俺の監視はど
うしたんだよ」

一番最初の理由、美琴達が買い物に来たのは神無月のアリバイの証
人になるために神無月の買い物についてきた・・・はずだったのだ
がいつの間にか四人ともすっかり忘れていたのだった。

「おに　　ちゃ　　ん。　　このお洋服どうかな　　」

美琴の知らない小さな女の子が神無月に向かってトテトテと走って
きた。

「えっ、お兄ちゃんってアンタ妹がいたの?」

「ちがう。　　美琴達に置き去りにされた後、その子は洋服屋がどこ
にあるか分からないって困ってたからここに連れてきただけだ。

(まあ、実際の妹は・・・)」

美琴は、神無月の言葉の最後の方がボソツとした小声だったため聞

き取れなかった。しかし、神無月は困ったような、あきらめたような顔をしていてあきらかに目が泳いでいるため繰り返し聞くことはできなかった。すると小さな女の子が美琴に話しかける。

「あのね。オシャレな人はここに来るってテレビで言ってたの。」

わたしもおしゃれするんだモン」

「そうなんだ。オシャレな服を買って可愛くしないとね」

「うんっ」

小さな女の子が嬉しそうに頷くと美琴も自然と笑みが浮かんでしまふ。

「なあ、流石にここ女性用の服しか置いてないから俺はなんか居心地悪いんだけどその子のこと任せちゃっていいか？俺は入口の所にいるから」

「え、行っちゃうのにおにーちゃん」

「ん？ここは女の子の服しか売ってないからな、俺は入口のところで待つてるよ。分からないことがあったらお姉ちゃんに聞いてみな教えてくれるから」

「じゃあ、またあとでね」

「おう、またあとでな」

そう言つて神無月は美琴と小さな女の子から離れて行った。女の子の事も気になるが美琴はさらに気になることがあった。

(・・・見られたかな？有真からは私の背中しか見えていなかったはず・・・でも、あいつが鏡に映った私を見てたらパジャマも見られた可能性も・・・)

一人心中の中で悩む美琴の後ろから白井達三人が戻ってきた。

「あれ、御坂さんその子どうしたんですか？」

「あ、初春さん。この子は洋服を探してたんだけど、どこにあるか分からなくて探してたところを有真と合つてここまで連れてきてもらったんだって。で、有真はここ女性用の洋服店だから居心地悪くて入り口付近にいるって」

「そうだったんですか」

初春は小さな女の子の視線までしゃがむと優しく話しかける。

「探してたお洋服は見つかりましたか？」

「うん！ これ、でももつとオシャレなものもあるかもしれないからもうちよつと探すの」

小さな女の子に優しく話しかける初春を見ていたら、パジャマを神無月に見られたかもしれないことを気にしていた自分が情けなくなってしまう美琴だった。

「・・・私 ちよつとはずすわね」

美琴は少し気分を変えるために化粧室へ向かう。そして、洗面台の前で自分の姿を見ながら思う。

（はぁー、情けないな。パジャマを見られたかもしれないくらいで）

そんなことを考えながら美琴は化粧室を出て、廊下を歩いていると横から美琴の大好きなカエルのキャラクター『ゲコ太』の気配を感じ思わず振り返る。

（！！ ゲコ太！？）

そう思っで良く見ると階段の近くに禪を穿いたカエルのぬいぐるみを抱えた男子学生がいた。しかし、もちろんゲコ太は禪など穿いていない。ゲコ太は上半身にスーツを着こなす紳士的ジェントルなカエルだ。禪一丁の露出ガエルなんかではない。

（なんだ、ゲコ太じゃないのか・・・っ！か全然似てないわ。でも、あの人あんなところで何やってるんだろ）

そこここは神無月が出て行ったように女性用の洋服（下着や水着等を含む）を売っている店だ。ほとんど男子学生は来ないし、来るとしても彼女へのプレゼントくらいだろう。しかも、プレゼントにしたって階段付近でぬいぐるみを抱えているのはおかしかった。しかし、美琴は『まあ個人趣味嗜好や考え方は違うし、まいつか』と考えるのを止めて、白井やさっきの小さな女の子が待っている場所に向かう。しかし、元の場所に戻ったはいいいが小さな女の子がい

ない。

「あれ？ あの子は？」

「あ、御坂さんあの子ならお手洗いにいくつて言っていましたけど、すれ違いませんでした？」

「ううん、ぜんぜん」

「あれおつかしいな、すれ違いにでもなったのかもしれないね」

そんな時、初春の携帯が鳴った。

「はい、もしもし」

『初春さんッ！！ 今どこにいるの！？』

「ふえ？ 固法先輩？」

いきなり大声に初春は驚く。特にいつもは冷静な固法先輩が大声を上げたのだ驚きも当然だった。

『虚空爆破事件の続報よ！』

「えッ！？」

『衛星が重力子の爆発的な加速を観測したの』

「か、観測地点は？」

『今、現場に風紀委員達を急行させているから。あなたもできるだけ速く現場に向かって！』

「で、ですから観測地点はどこですか？」

『第七学区の洋服店『セブンスミスト』よ』

「ラッキーです！ わたしと白井さんは今ちょうどそこにいますっ
！！！」

『ッ！？ ホントなの』

急いでいた初春は固法の言葉に気が付かずに電話を切ってしまった。
「美坂さん！ 白井さん！ 固法先輩からの知らせがありました。」

今、この店の中で一虚空爆破（重力子の爆発的な加速が観測されたそうです！）

「！！？」

「今度はこの店が標的だと言っ事ですか？」

「どうも、そうらしいです。ですから避難誘導を始めましょう。」

御坂さんも手伝ってもらって良いですか？」

「もちろんいいわ」

しかし、ここで美琴は心の中で焦りを感じていた。

（また、虚空爆破事件。^{ケラヒトン} しかも今回、有真はこの店にいる。罪を晴らすどころか疑いが濃くなる一方。ここで、真犯人を捕まえないとたとえ無実でも有真は捕まるかも　　）

だが、爆弾は待つてくれない。今は、民間人の非難が最優先だった。初春は佐天も外に避難するように言う。

「佐天さんも早く非難を」

「う、うん。初春も気をつけてよ」

その間に白井は店の従業員に爆弾のことを告げ、客を避難させるように指示を出させる。美琴も、急いで店内から逃げ出す客を誘導し安全に且つ速やかに被害の届かないところまで送り出す。そして、彼女たちの頑張りのおかげで五分と掛からずに店内に残る人影は一つもなくなった。店内をざっと見まわし美琴は何とかなったと息をつく。

「よしっ、とりあえず、これで全員　　」

「おいっ！ 美琴！」

そんな時、神無月が血相を変えて走ってきた。

「アンタ何でまた戻って来てんの！ 民間人は外に退避しろって言われたでしょ！ それにアンタがこんなところにいたら今度こそ捕まるかもしれない！」

「分かってる。でも、それどころじゃない！ あの小さな女の子この店から出てきてないんだ！」

「！？ 見落としたとかじゃないの？」

「見落としはたぶんない、入口のところまで全員確認してたがそれらしい子は出てこなかった」

神無月と美琴が話しているときに初春の近くに白井がやってきた。

「初春、避難状況はどうですの」

「はい、たぶん全員の避難が終わったと思いますけど、今から確認

を
」

そんなとき初春の携帯電話が再び固法からの着信で鳴った。

『初春さん！ 初春さん！』

『はい。 今、全員避難したかを確認して
」

『白井さんと共に今すぐそこを離れて！ 過去の事件のすべてで風紀委員が負傷していることが分かったわ！ 犯人の真の狙いは観測地点周辺の風紀委員だったの！』

初春は時間が止まったかのように言葉をなくす。初春の脳が停止する、固法のいうことが分かってても理解が追いつかない、呆然としてしまう。そんな初春の状況を察したのか固法は的確に今の状況を叫ぶ。

『今回のターゲットはあなたと白井さんだということなの！！！！』
その時、初春の後ろからパタパタという子供独特の軽い足音が響いてきた。

「おねーちゃん」

まだ、あの女の子は店内に残っていたのだ。初春が女の子を振り返ると禰を付けたカエルのぬいぐるみを差し出すように持ってこちらに走ってきていた。

「メガネをかけたおにーちゃんが風紀委員のおねーちゃんに渡して
つて」

そのようすに神無月と美琴も女の子に気が付く。とりあえず怪我をしていない様子からとりあえず、ホツとした二人だった。しかし、二人はすぐに表情が変わる。美琴は怪訝な顔になった。なぜなら、そのぬいぐるみに見覚えがあったのだ。そう先ほど階段で見かけたメガネの男が持っていたぬいぐるみと全く同じものだというところに、そして神無月は驚愕した顔になる。神無月は重力を操る能力者だ、その根源は重力子を操ることにある。そして、重力子が爆発的な加速を始めたことにも自分で気が付いた。目視すればどこが中心に起こっているかもわかる。そして、小さな女の子の抱えたぬいぐるみ
がその中心にあることに気が付いたのだった。そして、神無月が叫

ぶ。

「そのぬいぐるみから離れる！！ そいつが爆弾だ！！」

神無月が叫んだ直後、ぬいぐるみの胴体の中心あたりからブンという鈍い音が響き、音源と同じところにエネルギー球体のようなものが現れた。それを見ると初春はとつさにぬいぐるみを突き飛ばし、女の子を守るように抱きかかえて蹲る。

地面を転がったぬいぐるみはメキメキと音を立てそうに潰れながら球体の中心に吸い込まれていく。そして、周りの空気すらも吸い寄せるようにしながら圧縮されていく。神無月はそれを見て即座にどのような原理なのかが見て取れた。虚空爆破事件の犯行に使われた爆弾はアルミを起点に重力子の速度を加速させ、それを周囲にまき散らすと聞いていたが、細かいことは今見て理解できた。重力子の加速によって強力な重力を生み、その力で周りの空間を歪ませ空気を起点となったアルミを含めた周りのものを吸い込む。そして使用した能力の強さのところまで重力子を加速させるが、それが終わると空間が元に戻ろうとする力で吸い込んだものを一気に吐き出しまき散らす。重力子の加速度が分かる神無月は心の中で舌打ちする。(クソツ、この重力子の加速の仕方はまずい！ 今まで死人が出なかったのが奇跡のレベルだぞ)

神無月にとっては使えるレベルの力だが、どう見積もっても大能力者⁴クラスの出力でようやくなせる技だった。すでに爆弾は急激な重力で空間をゆがませているためぬいぐるみですでに原型をとどめていない。その収縮の度合いから限界が近いことが誰にも見てとれる。あと数秒もせずに大爆発を引き起こすだろう。白井の能力は空間移動だ。もちろん、人間だって運ぶことができる。しかし、どんなに頑張っても一度に運べる人数は白井を含めて三人。人間をテレポトさせる時には万に一つも変な場所、例えば壁の中などの間違った場所へ空間移動させる訳にはいかないので必ず白井も一緒に飛ぶ。そして、今この場にいる人間は神無月、美琴、初春、女の子、白井の五人どう頑張っても人数オーバーだった。白井は空間移動で自分

だけ逃げる訳にはいかないので爆弾が爆発するのを指をくわえて見ていることしかできない。(何か、何でもいいですよ！ 何を空間^{テレ}移動^{ポート}させれば全員が無事に助かりますの！)

そのとき、美琴はスカートのポケットに手をつ突っ込むと中を探りコインを探り当てていた。すでに美琴はどうするか決めていた。

(超電磁砲^{レールガン}で爆弾ごと吹き飛ばす！)

そう思いコインをポケットからだす。『ポロツ』美琴は時間が止まったかと思うほど驚き焦る。コインが超電磁砲^{レールガン}のコインが手から滑り落ちたのだ。

(！！！！ マズツた！！ 間に合わない)

ドゴオオオオオオオンと言う爆発音と共に大量の煙が店内から噴出した。店の外ではすぐにパニックになった。

「キヤー …！！」

「何だ、爆発!?!」

逃げ惑う人たちと野次馬のように集まってくる人がさらに騒ぎを大きくしていく。

「例の連続爆破テロだつて!」

「逃げ遅れた人がまだ中にいたらしいぞ」

「あやし、風紀委員^{ジャッジメント}が中にいたのを見た!」

その様子を佐天は店から少し離れた避難誘導された人たちの集まっている場所から見ている。

(初春、御坂さん、白井さん、神無月さん、みんな無事で戻ってきて)

そんな爆破事件の起こった未だに騒然となっているこの場所からゆつくりとメガネの男が歩き去っていく。男はすぐに細い裏路地に入つて出来るだけ人に姿を見られないようにする。そんなことには誰も気が付かず、事件現場は大騒ぎが続く。風紀委員^{ジャッジメント}だけでなく警備^{アンチスキル}

員さえもこの場の收拾が付けられずに困っていた。

「危険です！ 危ないから下がっていて！！」

そんな様子を見て、裏路地に入った男の口からは声が漏れた。

「ククク・・・」

思わず出てしまった声だったが、その声は暗い負の感情そのものから来る笑い声だった。

(いいぞ、今度こそ逝っただろう)

「スゴイツ！ スバラシイぞ僕の力！！ 徐々に強い力を使いこなせるようになってきたッ！！」

メガネの男は自分の能力に酔って、有頂天になり空を仰ぎ見上げる。そして浮かれてたがために後ろから近づいてきているに人影に全く気が付いていなかった。

「もう少しだ！ あと少し数をこなせば無能な風紀委員もアイツラもみんなまとめて吹き飛ばッ…！？」

メガネの男は最後まで言い切ることができなかった。なぜなら、後ろから近づいてきた美琴に背中を中心を、神無月の放った上段回し蹴りを後頭部に同時にくらい路地裏に溜められたゴミの山にバウンドしながら蹴りこまれたからだだった。

「ゲフツ。 ?? な！？ いったい何が？」

メガネの男が顔を上げると二人の男女がにこやかにほほえみながら立っていた。

ほほえみ【微笑み】

? 顔の表情が笑顔を形作っていること。

? 怒りを通り越したときに浮かんできってしまう表情のこと。

? 哀れな人間に向けられる蔑みと怒りが形作る表情のこと。

例、二人のほほえみからは「テメエの幻想をぶち殺す」50%「スクラップの時間だ」25%「ぶち殺し確定ね」25%を感じざるを負えなかった。

若者のための学園都市特殊国語辞典参照

「は？い？ 要件は言わなくても分かってるわよね
爆弾魔さん」

メガネの男が凍りつく。地面に座りながらメガネの男は少しずつ後退していく。

「な、何のことだか僕にはさっぱり・・・」

「まあ、威力は大したもんだよ。大能力者^{レベル4}つてところか？ ま、
実戦向きじゃないけどな」

「でも、残念。死傷者どころか誰一人カスリ傷ひとつ負ってないわよ」

「なっ！？ そんな馬鹿なっ！！ 僕の最大出力だぞ！！」

「ほう」

誰もかすり傷ひとつ追ってないと言われ、プライドに傷を付けられたメガネの男はついつつ口にしてしまった。それを聞いた美琴の目が細くなる。

「はっ」

たったふた文字の言葉がメガネの男に極限のプレッシャーを与える。「い・・・いや、外から見てもすごい爆発だったんで中の人とはとても助からないんじゃないかと・・・」

そう言いながらメガネの男は後ろのあるバグの中からアルミ製のスプーンを美琴や神無月の目から見えないように取り出した。そして、それを爆弾として使おうと前に出した。しかし、重力子^{グラビトン}が加速する気配がない。

「悪いな、お前の重力子^{グラビトン}の加速はさっきの爆弾で見させてもらったからな、俺の近くでその能力で重力子^{グラビトン}を加速させようとしても即座に加速を止められる」

「超能力者絶対重力^{レベル5}！」

そして次の瞬間、メガネ男の頭の横を音速の三倍の速度で何かを通り抜けスプーンは持ち手を彼の手の手の中に残して消えさった。美琴の指先からパチパチと超電磁砲^{レベルガン}の余韻の電気がはじける。

「と、常盤台の『超電磁砲』」

言った瞬間メガネの男は、美琴に腕を取られ地面に組み伏せられた。「暴れてもいいけど、今の私に手加減できる保証はないわよ」

メガネの男は怒りの表情で叫ぶ。

「ハッ！ 今度は常盤台のEス様か！ いつもこうだ、何をやっても僕は地面にねじ伏せられる。殺してやるッ！ お前みたいなのが悪いんだよ！ 風紀委員だつてッ！ 力のあるヤツなんてのは皆そうなんだろうが！！」

そう叫んだ時、ガツとメガネ男の襟を神無月が掴み上げる。美琴が腕を抑えていたためメガネ男の肩の関節が限界まで後ろに逸らされ軋んだ。

「ふざけんなよ、風紀委員が一体お前に何したつていうんだよ！ 風紀委員だけじゃない巻き込まれる人間はお構いなしか？ あ？

お前、小さな女の子にぬいぐるみ渡せつつたんだろ、子供だぞ！ 爆発すりゃあの子だつて死ぬかもしれないって分からなかったわけじゃねえだろうが！ そんなことをしておいて力のある奴が悪いだあ？ 甘えてんじゃねえ！ それだけの力を持っていて大勢の人を苦しめてきたお前がそんなこと言つて通るわけがねえだろうが！ 関係ないやつを巻き込んだ時点でお前の行動はただの憂さ晴らし、八つ当たりなんだよ！」

神無月の心からの怒りにメガネの男は竦み上がる。そして、美琴は掴んでいた腕を放すとメガネ男の正面に立ち顔を見据えて話す。

「アンタやつていいことと悪いことがあるのよ。それに私は最初から超能力者じゃなかった。最初はただの低能力者だった。頑張って、頑張って今ここにいるのよ。でもねっ、たとえ低能力者のままだったとしても私はアンタの前に立ちふさがったわよ。アンタのやつたことは許せないしそれ以上に力に依存するアンタの弱さに腹が立つ」

美琴は一度息を吸い込むとこぶしを固め、

「アンタにはアンタの事情があるんでしょうけど。

相談に乗る前

に一発殴らせてもらうわよっ！」

そして、裏路地にゴンという鈍い音が響き渡り、メガネの男の頭にはかなりの大きさのたんこぶができたのであった。

そのころの事件現場では、白井が事件現場の見直し、初春が事件に巻き込まれた女の子の世話をしていた。白井は事件現場を見て、爆発跡を真剣な顔で眺めていた。そのとき、事件対応の応援に駆け付けてくれていた風紀委員ジャッジメントの一人が白井に声をかける。

「あの・・・容疑者の少年を確保した模様です」

「・・・了解ですの」

受け答えはするが、白井は事件の爆発痕を眺めるのをやめない。白井が見ている爆発痕それは普通の爆発痕ではなかった。通常爆弾が爆発すれば、その爆発は爆弾を中心に全ての方向にばらまかれる。つまり、爆発痕も中心からあらゆる方向に放射状に広がり円を描くはずだ。しかし、今回の爆発痕はそうではない。美琴や白井・初春たちがいた方向だけ床がそこに壁があつたかのように完全に無傷。もちろん、爆発時には床だけでなく人がいたところの空間も直接的には何も起こらなかった。まあ、爆発後の粉塵やら煙・爆発音は少し白井たちを咽させたりはしたものの、爆発による熱量や瓦礫・衝撃などは一切来なかった。

「これが、今のわたくしとあの方の力の差ですか・・・」

爆弾が爆発する直前に白井は何もできなかったことを後悔していた。もちろん、白井の避難誘導により大勢の人々が助かりはしたが、爆発時には何もできなかったことが悔しくてたまらなかった。爆発痕は自分の無力と見せつけられた力の差を浮き彫りにする。爆発前に何もできなかった自分と爆弾に向かって飛び出した神無月との差を。そんな風に少しの間悩んでいた白井だったが、急に頭を左右にぶんぶん振り回すと目に力を取り戻して前を向いた。

（反省タイムは終了ですわ！ 今はまだ追いつけません、それでもこれから追いつけないと決まったわけではありませんの。お姉さまやあの殿方の隣に立っていても恥ずかしくないようになりませぬ。いつまでも守ってもらってばかりの黒子ではありませんわ！）

新しい目標を定めた白井の目には力強くそれでいて鋭さすら持った炎が踊っていた。

店の入り口にあるエレベーターのところ、美琴は神無月と白井や初春が戻ってくるのを待っていた。現在、神無月は警備員に事情聴取を受けていて、白井と初春は風紀委員の仕事をしているのだ。神無月が事情聴取に行く前までは美琴が事情聴取を受けていたのだが、入れ替わりで神無月の順番になったのだった。美琴はエレベーターの扉に寄りかかりながら白井と同様に爆発時の事を思い出していた。（超電磁砲なんて呼ばれていても、肝心なときに撃てないんじゃないか、何のための超電磁砲なのか分かんないわね・・・）

自虐的な笑みが美琴の顔に浮かぶ。そして同様に真剣な表情も。

（あの時、超電磁砲のコインを落として撃てなかった私と違って、有真はきちんと爆弾の人的被害を最小限にした。私がコインを取り落としたことに驚いている最中にアイツは飛び出して行って私たちも目の前に壁を作って全員を守った。あゝあ、同じ超能力者のはずなのにな）

そう、あのとき神無月は爆弾が爆発する直前に全員の前に走っていき、黒い壁を出現させた。神無月の重力操作によって作り出された黒剣と原理は同じで、絶対重力による壁だ。黒剣と同じく事象の地平面つまりブラックホールの吸収可能領域で黒壁を形作っているため、壁に向かって飛んでくる爆風も爆発によって飛ばされる瓦礫も全て美琴達には届かなかつたのである。ありとあらゆるものを吸収

するその性質は絶対的な防御力を誇る。今のところ、この壁をぬけた攻撃はない。上条の右手ならば破壊できるだろうが、上条と神無月は協力して戦ったことはあってもぶつかりあったことはなかったため未だにこの壁を突破した攻撃を出した者はいなかった。そんな力を見せられた美琴は少なからずショックだった。

（能力がチート過ぎじゃない。なんで私の周りには、絶対重力とイマジンプレイカーか幻想殺しとか私の攻撃すら軽々防げるような奴ばかり集まってくるのよ。確かに今日はその絶対重力のおかげでみんな無事だったわけだけど・・・よし、決めた。借りは絶対返す）

いつか、神無月に自分の力を認めさせてやろうそう思いながら美琴は拳を握りしめた。

自分の力の至らなさを自覚し、それでも前を向いて行ける人間はそんなに多くはいない。高位能力者ならば自分の能力に自信を持ち、それを支えに生きている場合が多いためそれがくじかれた時はもう一度前を向くことすらできない場合が多い。しかし、美琴や白井は高位能力者であつてもくじけない。美琴は自分の努力でここまでたどり着き、白井は自分よりも強い美琴の背中を見てここまで来たのだ。力のなかつたころの自分や自分の目標を見て成長しようとした人間はまた目標を立てられる。だからくじけない。しかし、目標を追い続けても報われない者は立ち止まってしまふ。佐天も自分の無力さを感じて努力をしても報われなかつた人の一人だった。佐天は店の外から現場を眺める。風紀委員や警備員が事件現場を封鎖していて中には入れなかつた。その境界の向こう側にいる神無月や美琴、白井・初春、境界よりこちら側にいる自分。この境界こそが彼らと自分との違いだと言われているような気さえしてくる。

（はあ、なんであたしにはなにも出来ないのかな・・・わたしはいつも守られるばかり。能力さえあればみんなに守られるばかりじ

やなくなるのかな・・・)

今回の事件で佐天以外は現場で戦っていたのに、佐天は避難することしかできなかった。その重みはその立場の人間にしか分からない。例えば、大多数の人達が避難したのだとしても身近な人間が戦っているときに何も出来ない辛さは確かに佐天の心にずしりとしかかるのだった。

『— Seventh mist』の被害のなかった従業員休憩室で事情聴取が終わり神無月が店内を歩く。

「あの警備員のおっさん何回『本当に君は事件に関与してなかったんだね』って聞けば気が済むんだよ。20回以上も聞くか普通？犯人逮捕に協力したのに何か釈然としないぞ」

神無月の独り言だが、独り言にしなければやっていられないこともある。実際、神無月は暑苦しい筋肉質の40代警備員の男に本当に君は事件に関与してなかったんだね』と52回も聞かれている。20回どころの話ではない。美琴の事情聴取にかかった時間が20分だが、神無月の事情聴取時間は2時間である。6倍の時間だ。ふざけている。

そのうえ、その警備員のおっさんは通常警備員が着ている制服を脱いでおりタンクトップでの事情聴取だった。確かに夏休み前で、熱い。それは分かる。しかし、そんな暑苦しいおっさんと部屋の中で二人きり。筋肉質の腕に汗は浮いているし、蒸気すら立っているように見える。さっきの爆弾で電気系統がやられてしまいエアコンもなし。それが6時間。神無月は新手の拷問かと思った。そんなわけで神無月はかなりげんなりしているのだった。

「はあ、不幸だ」

上条の口癖がうつりそうだった。そんなとき、

「どうしたんですの・・・」

店内にいた白井と初春が神無月を見て、言葉を無くす。事件の被害を無くした時の神無月は元気だったのにかなり憔悴しているのだ。誰だって驚く。

「ん、ああ黒子と飾利か・・・今ようやく事情聴取が終わったよ・・・
八八・・・」

「まさか、いままでずっと事情聴取でしたの!？」

「そのまさかだよ」

「それはご苦労様でしたの」

白井と初春は心から神無月に同情する。誰が事情聴取をしていたかは知っていたし、どんな事情聴取風景なのか知っているためこの憔悴が意味するところを理解した。

「神無月さん、ホントに大丈夫ですか」

「大丈夫だ、ただ精神的に異常なほど辛かったただけだから」

「・・・」

言葉や表情からどれだけ辛かったかが容易に想像できてしまう。白井や初春でもあの空間は30分と居たくないのだ。そこで神無月が尋ねる。

「ところで、二人の仕事は終わったのか？」

「あ、はい今ちょうど私たちの仕事は終わったところです」

「そっか、でさ、これからどうする？ 爆弾魔はなんだかんだで捕まっただけで買物とかしてくのか？」

「そうでしたわね、お付き合いいたしますわ。助けていただきましたし、なによりそんなに疲れ切ってしまったている人を放り出していくなんてこと出来ませんわ」

「こなわたしでも荷物運びくらいはできるんで、手伝いますよ」

「ありがとう、助かる」

それは神無月の心からの声に聞こえた。そして、店の入り口のところで美琴が待っていた。

「おかえ・・・り、大丈夫アタ」

神無月を見たたん白井達と同じように言葉を詰まらせた。美琴は

神無月が帰ってきたら『借りができたからいつか返す』的なことを言おうとしていたのだが出鼻をくじかれた。美琴の時事情聴取時間は20分。その程度がああアンチスキルの警備員の事情聴取を普通に受けられるギリギリの時間だ。そのあたりを超える和不快指数Yが時間Xの3乗のグラフのごとく跳ね上がる。何とか平常心で受けられるギリギリのラインだったため美琴はそれほど精神を削られなかったのだ。それほどまでに精神を削られると思っていなかった美琴の問いに神無月は答える。

「なんとか・・・」

「・・・」

とても何とかなっているようには見えないが、とりあえず美琴は納得することにした。そこで、白井と初春が神無月の買い物に付き合う旨を美琴に伝えると美琴も同じように一緒に行くことに賛同した。そして、四人が店を出ると佐天が待っていた。

「四人とも無事で何よりで・・・す？」

やはり、佐天も神無月を見て言葉が止まる。体の方に怪我はなさそうだが、かなりやつれていたので無事なのか分からなくなってしまう。

「えつと無事・・・ですよ？」

そう聞かれ神無月は白井や美琴の時と同じように答える。そして、佐天にも面白い物の続きの件を話すと佐天も二つ返事でOKだった。

そして五人が店を離れようとすると、『セブンスミスト Seventh mist』の店長らしき人が走ってきた。

「ちょっと、ちょっと待ってください」

「はい？　なんですか？」

神無月が聞き返すと、店長は走ってきて途切れがちになっている息を整えると頭を下げた。

「お客様達のおかげで当店では一人の怪我人も出さずに済みました。それに当たってお客様達に当店の品物で気に入った物がありましたら、どうぞ持って行ってください」

「いや、それは悪いですよ。誰も怪我もなかった、それでいいんじゃないですか」

「いえいえ、それではこちらの気が済みません。私の為だと思っ
てどうぞお持ち帰りください」

「そこまで言われてはもらて行かなければ失礼だと思い、

「じゃあ、お言葉に甘えていただきます」

そう言つて、再び店内へ五人は入る。そこで佐天は神無月に問いかける。

「あたし、今回何もしてないんですけどわたしまでもらっちゃっていいんですかね」

「いいんじゃないか。というか女性用の洋服店じゃ、俺が使える物はないし。俺の分つてことで、なんだったら俺からのプレゼントでもいいわけだし。好きな選んできてくれ」

「ありがとうございます」

そう言つて佐天は水着コーナーの方へと走つていった。

「わたくしも見せてもらいにいってきますわ」

「じゃあ、わたしも」

そう言つて、白井と初春も自分の気になっている服を見に行くのだった。そして、その場に残つたのは神無月と美琴だった。

「美琴は見に行かないのか？」

「わ、私!? 私はいいわよ、特に気に入つたのなんてなかったし
！」

完全に強がりだった。美琴は気になつて気になつてしょうがないパジャマがあるが、恥ずかしくて買えないのだった。今まで色々な店を回つても自分の好みに合うパジャマが無く半ば諦めていたのだが、この店でついに発見したのだ。しかし、佐天たちにそのパジャマは子供っぽいと言われていたため買えないのだった。美琴の心中では、そのパジャマが売り切れないか心配ですぐにでも買いたいのだが、行動には移せないのだった。

「本当にいいのか？」

「い、良いに決まってるじゃない！」

しかし、美琴を見ているとはつきりとわかってしまう。さつきから美琴の目はパジャマの方をむいては戻り、向いては戻りを繰り返している。さきほど、神無月は美琴が皆から隠れてパジャマを体に当てていたのを目撃している。パジャマは良く言って可愛らしい、悪く言うと子供っぽいようなものだった。そこから考えられる結論は一つしかなかった。美琴の視線があらゆるさま過ぎて、つつこむ気も起きない。美琴は自分では買えないようなので神無月は苦笑いでパジャマの方に歩く。そして、美琴の買おうとしていたパジャマを手にとると店員に向かって、

「これ下さい。あと、包んでもらえますか？」

「はい、承りました」

そう言っつて、美琴が躊躇いに躊躇いまくっていたパジャマを何事もなく買った。しかも、買ったことを美琴以外の三人に気付かれていないという驚異のさりげなさだった。呆気に取られている美琴のところに神無月は戻ってくると、ほいと美琴にパジャマの入った包みを差し出す。

「え、ええっ！？ く、くれるの？」

「そのつもりだけど、いらないんなら返してくるが？」

「いるー！」

美琴はとっさに叫んでしまったことに赤面し、取り繕う。

「しょ、しょうがないわね。どうしてももらって欲しいっていうならもらってあげるけど」

「そうか、なら返してくるか」

「すみません。とつても欲しいです」

そう言っつて、美琴は神無月からパジャマの包みを受け取ると大事そうに抱えるのだった。

そして結局、美琴は念願のパジャマ、白井はスケスケ下着、初春はふわふわした感じの水着、佐天は白いビキニのセットとパレオを買ったのだった。皆、それぞれ自分の欲しい物を手に入れ満足そうだ

った。また、満足そうな皆を見ているので神無月も満足だった。少し残念だったのは今回の事件に巻き込まれた小さな女の子は、アンチス警備員キルに連れられて自分の家まで送ってもらった後だった為、今回の『もらいもの』をすることはできなかった。可愛いのを選んで送ろうかとも神無月は考えたが住所が分からなかったため諦めたのだった。まあ、無事で帰ったならよしとしようひとりごちた。

『— Seventh mist』での買い物を終えると今度こそ店を離れ、五人は神無月の買い物に向かうのだった。今回の事件は五人の心の中にそれぞれの思いを残した。多少の差異こそあれど、その思いはもつと強くなりたいたいというものだった。そんな誰の心にもある、力・能力への渴望。それを根源とした今回の事件は大きな事件の序章に過ぎなかったのだった。

神無月との買い物を終え、寮に帰った美琴はもらった包みを開けてみた。美琴の目に狂いはなく、美琴の好みでないところが無いと言うほどだった。これから、これを着て寝ようと思っていると美琴は気が付いた。

(あれ、結局これをもたらったって事は、あの時私見られてたって事！？)

神無月からこのパジャマをもたらっておいて、今頃気が付く美琴だった。子供っぽいと思われたらどうしようかと今さらながらに思う美琴の眠れない夜はまだ始まったばかり。しかし、明日寝不足で眠い一日を過ごすことになるということだけは決定していたのだった。

第04話 あ

『幻想御手』があったらなー（後書き）

就職決まりました。

2社目で合格できたのは今時の就職率からいうといいのかな？
とりあえずよかったです。

補足1〜1人称〜

神無月：俺

美琴：私

白井：わたくし

初春：わたし

佐天：あたし

補足2〜神無月〜

性別：男

身長：175cm

年齢：16歳

国籍：日本

出身地：静岡県

家族構成：父・母・妹・祖父・祖母

サイド：科学サイド

所属：学園都市第7学区のとある高校 1年7組

職業：高校生

住居：第7学区 とある高校の男子学生寮

レベル：超能力者（レベル5）

能力：絶対重力
ブラックホール

性格：若干S

好きのもの：甘い物

嫌いなこと：友達や身内など自分にとって大切な人間を傷つけられ

ること

近頃：上条の口癖「不幸だ」が感染うつりそうになっている。

：7月16日の身体検査システムスキャンで超能力者（レベル5）に認定される。

これからも続きます。

今後もよろしくです。

感想も常時受け付けています。

書いていただけるとやる気が上がります。

そのあたりも含めてよろしく願います。

文字の書き間違いも感想などで教えていただけると嬉しいです。

第05話 え

私そんなに子供じゃないよお？

『プンプンプン』

「37度3分か、ま、微熱だけど今日は大事を取って一日寝てた方がいっしょよ」

「すみません、わざわざ」

七月十九日（日）、風邪で寝込んでしまった初春飾利ついはるかみりの看病に佐天さてん涙子なみこは初春の部屋を訪ねていた。どうやら、最近の虚空爆破事件ケラレイトンの疲れが一気に出たようで初春は体調を崩したのだった。とりあえず、犯人の確保という形で虚空爆破事件ケラレイトンは終息したため、気が抜けたのか初春は風邪をひいてしまったのだった。初春は二段ベッドの上の方で横よこになっていて、佐天がベッドについている梯子はしをつかんで初春を覗き込む形のぞくじむで顔を出す。

「いって、友達でしょ。こんな時くらい頼りなつて。昨日も

あたしは何もできなかったんだしさ」

「そんな、それを言うならわたしこそ変な事件に巻き込んで」

・・・

「あほ、初春だって巻き込まれただけでしょ。初春が悪いわけじゃない」

そういうと佐天は二段ベッドの梯子から飛び降りて、いたずらっぽい笑みを浮かべて言う。

「よつと、そろそろあたしは行くけど、通知表初春の分も預かってきてあげよっか」

「後日自分で取りに行きますよ〜〜」

「まあ、明日から夏休みなんだし風邪は今日中に治しちやいなさいよ」

部屋の外ではこれぞ夏と言わんばかりに蝉が『ミンミン』鳴き、ア

スファルトの上では陽炎が揺らいでいる。そんな一日の始まりだった。

夏特有のカツと照らす太陽の日差しの下を大勢の学生たちが歩いている。今日は夏休みに入る一日前ということもあり、たいていの学校では授業という授業はない。学生たちは成績表を渡されその結果に一喜一憂し、終業式を熱の閉じこもったサウナのごとき体育館や講堂で行い、無駄に長い校長の話に辟易するのである。学校によっては教室の掃除を行ったりもするが、よほどの金がない学校でもない限りは掃除ロボットがいるため特にそうだったこともない。しかし、それを含めても学校で行うことは午前中で終了。そのため、学生たちは夏の昼間の太陽の下を下校することになるのである。下校途中での話はやはり自分の成績に関する話題が多い。自分の成績の悪さに悩みながら歩く学生もちらほらいる。そんな自分の成績について悩む学生たちと同じように、

「~~~~~む、~~~~~む・・・」

白井黒子も悩みながら下校していた。しかし、悩む内容は全く異なる。そして、その隣にはそんなずっと悩み続けている白井の姿を見ながら御坂美琴も下校していた。白井は悩みの考え事についての答えが纏まらず、夏の暑さも相まって白井の頭からは『プシュー』とオーバーヒートの煙が上がりそうだった。さすがに見ていられなくなつた美琴は白井に悩んでいるわけを尋ねる。

「さっきからどうしたのよ、そんな難しい顔して。もしかして成績落ちた？」

「そんなことではありませんの・・・というか成績は下がっていませんわ」

いくら考えても全く答えが導けそうにないため、白井は美琴の方を向いて逆に尋ねる。

「お姉さま、昨日の虚空爆破事件グラビトンの犯人、本当にお姉さまが捕まえた男で正しいんですの？」

「そうだけど？」

「『書庫バンク』の登録データでは容疑者の能力は異能力判定となってますの」

「うそっ！？ 明らかに大能力クラスレベル4の破壊力だったわよ」

この事実には美琴も驚きを隠せなかった。虚空爆破事件グラビトンの犯人の攻撃は高性能爆薬に匹敵するほどの破壊力を有していた。異能力者レベル2の力の大きさは、低能力者レベル1と同程度、つまりスプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力なのだ。したがって高性能爆薬に匹敵する破壊力を有する時点でどう見積もっても異能力者レベル2で収まるような能力ではなかった。

「ええ、ですから・・・これは、つまり・・・」

・

・

・

『ミーン、ミーン』

『ジーー、ジーー』

『みーん、みん、みん』

・

・

・ 炎天下えんてんかの中、蝉せみの鳴き声だけが通り過ぎていく。

「どっということなのでしょう？」

「・・・」

美琴も何と言っているのか分からない。

「ま、まあ、煮詰じつまつてるんなら一度休んで頭を切り替えましょ」

そう言っつて、美琴は移動かき氷屋を指さした。かき氷屋は、この炎天下の中では重宝されるため何人か学生たちが並んでいた。その後尾に美琴と白井は並んだ。美琴たちの列の最前部では今小学生く

らの男の子三人がかき氷のできるのを待っている。その後ろでは、女子高生二人が談笑しながら並んでいる。そしてその二人後ろ、つまり美琴と白井のすぐ前にはオレンジみがかった茶髪を少し伸ばした感じの男子高校生が・・・

（あれ、何か見覚えがあるような・・・）

美琴がじつと前を見ると視線を感じたのが、前にいた高校生が振り向く。

「あれ、美琴と黒子？ そっちもここのかき氷食べに来たのか？」

「うん、そうだけど。アンタがここに来てるってことは、もしかしてここの店有名だったりするの？」

「ん？ 知ってて来たんじゃないのか？ ここは学園都市の移動かき氷屋の中でも五本の指に入るといわれている店だぞ。しかも、この店移動経路とか決まってないから偶然会うことは結構珍しいんだ。たいてい俺みたいにこの店が現れた情報を聞きつけて急いでやってくる奴がほとんどだと思うぞ」

「・・・そ、そうなんだ」

美琴は、神無月の執念にも似た甘いものへの執着に顔を引きつらせる。

「にしても、今日は暑いな。明日から夏休みだから暑いのは当然つてのは分かるけど、それにしたって暑い」

「そうですね。これも地球温暖化の影響でしょうか」

「ん、まあ違うだろうけど。そうだったなら、勘弁してほしいなそんな風に神無月たちが談笑している間に、前に並んでいた人たちはいなくなり、順番が回ってきた。

「どうぞ、次のお客様。ご注文は何になさりますか」

「二人は何にする？」

「そうですね、私はイチゴで」

「わたくしはお姉さまと同じものを」

「じゃあ、イチゴ2つに、ミックスベリー1つでお願いします」

「はい、イチゴ2つに、ミックスベリー1つですね、承りました。

少々お待ちください」

そういうと店員はかき氷を削り始めた。

『チリン、チリーン』

店が作る影の中に入ると直射日光を浴びていた時よりはだいぶ涼しくなる。そして、移動型店舗の軒先のきさきについている風鈴ふうりんの音色がより涼しく感じさせる。

「不思議なものですわね。気温は変わりませんが風に風鈴の音色を聴いていると少し涼しく感じますの」

「そうだよな、俺も丁度そんな風に感じたところだった。なんて言つたっけなこういう事。 ええと・・・」

「共感性でしょ？」

答えを告げたのは美琴だった。

「共感性・・・ですか？」

「一つの刺激しげきで複数の感覚を得ることよ。例えば、普通なら色を見たら働くのは人間の視覚だけじゃない？ でも、赤い色を見たら暖かく感じたり、青色を見たら冷たく感じたり、視覚以外にも影響が出るでしょ」

『そのことよ』と美琴はいう。

「『暖色』『寒色』というものですわね」

そんな話をしているとその間にかき氷は完成した。

「はい、どうぞ」

全員分のかき氷を受け取ると、会計を済ませてしまふ。そして、神無月は美琴と白井にかき氷を渡す。

「お、あっちに丁度木陰になってるベンチがあるなあっちで食おうぜ」

「あ、うん。有真、いくらだった？」

「ん？ ああ、別にいいよ。俺のおごりで」

神無月にいろいろと世話になっている美琴は、今回もまた奢ってもらうのはさすがに良心の呵責を感じた。

「でも、この間も昼食食べさせてもらったし悪いわよ」

「じゃあ、今日の分は美琴の料理で奮発してもらおうということだ」「ぐっ……あの話やっぱり、冗談で言ったわけじゃなかったんだ……」

「もちろん、本気だけど？」

美琴はさらに自分へのハードルを上げてしまった己の迂闊さを呪い、心の中で一つの結論に至る。

（有真って良いやつだけど、絶対根はSだ、しかも素で）

そんな風に美琴が考えているとき、神無月はかき氷を見ていて気が付く。

「そういえば、このかき氷も共感性に訴えかけているものひとつだよな。トッピングとして乗っている果物はさておき、シロップの色はイチゴだから赤くしか作れないわけじゃないし、ミックスベリーだからって紫っぽい色にしなくてもいいわけだしな」

「そうですね。シロップの味に色のイメージをプラスしてますのね」

「うーん。そう考えると人間の脳って単純なのかもしれないわね」美琴も料理のことからのダメージから復帰したため、神無月と白井の会話に参加する。

「単純って……お姉さま、ユーモアが分かるってほしいんですの……」

そんなとき、三人に向かって歩いてくる人がいた。

「あれ、佐天さんじゃない」

「美坂さん、白井さん、神無月さん、昨日はお世話になりました。」

ん、それおいしそうですね」

そういうと佐天もかき氷を買う。

そして、四人は木陰のベンチに座った。

向かっていちばん右が白井、その左隣が美琴、その左隣が佐天で一番左端が神無月だった。

「佐天さん、初春さんの容態はどう？」

「熱自体は大したことないです。あたしが買ってきたのも風邪薬

じゃなくて熱さましです。むしろ一番欲しがってたのは暇つぶしの道具かも」

「ならよかった。体調を崩した責任の一端は俺が振り回しちゃったのもあると思うし」

「そんなことないですよ。初春が今まで頑張りすぎてて、気が抜けたからどつと体に来ちゃっただけなんで神無月さんのせいじゃありませんって」

「そうですね。初春はここのことろずっと虚空^{クラヒトン}爆破事件に掛かりきりですわ。寝てもいなくなっただけですし」

「ま、なんにしても捕まえられてよかったよ。それはそうと

「
そうですね。そうとうと神無月は思い出したように、目を光らせた。

「そつちのレモン味とイチゴ味のかき氷味見させてくんない？」

「ん、まあいいわよ」

美琴がそう言った瞬間、美琴がスプーンで掬^{すく}っていたかき氷が神無月に食^くわれていた。

「え……え、ええ　！？」

驚くのは無理もない。美琴が味見をしていいといったのは、あくまで神無月の持つスプーンで美琴のイチゴ味のかき氷を掬^{すく}って食べることが前提になっていたので、美琴が今まさに自分で食べようと掬^{すく}っていたかき氷が食べられるとは思っていなかったのだ。

（これって間接……駄目だ、考えるな！ 有真も気にしてなしのに……ないのに……っていくらなんでも気にしなさすぎじゃないの!?)

そんなことを考えている美琴に神無月からの追い討ちがかかる。

「どうした？ そんなに睨んで、ああ、そつか美琴も違う種類の食べたいのか。なんだ、そう言ってくればいいのに」

そうとうと神無月は美琴のほうに神無月のスプーンで掬^{すく}った神無月のミックスベリー味かき氷を『によっ』と差し出した。差し出した神無月は何も考えてはいないのだが、美琴のほうはそうはいかない。

(これを食べたならばほんとに間接……でも食べないのは失礼……よね。でも、やっぱり……ああ、もうどうにでもなっちゃえ!)
美琴は思い切って神無月の差し出していたかき氷をパクリと食べた。「イチゴも美味しいな。でも、ミックスベリーもなかなかいい味し
てると思わないか?」

「そ、そうね。おいしいと思うわ」

実際のところ、美琴はかき氷の味を気にしていられるほどの余裕がなかったため、味なんかまったくわかっていなかった。しかし、美琴の心の平穩は回ってこない。

「ん、美琴顔真つ赤だぞ。熱中症じゃないよな?」

そういつて、神無月の手が美琴の額ひたいに触れる。あまりの不意打ちで美琴は避けることもできなかつたため神無月の手が美琴のおでこを完全にとらえている。

(これつて、遠目からみたらキ、キスしようとしてる恋人同士に見えるんじゃない!?)

遠くから見ても、近くから見ても完全に熱を測っているようにしか見えないが、神無月からの不意打ちの連続で精神的に追い詰められた美琴にはどんな行いにも過剰に反応してしまう。そのため、美琴の心の暴走は加速する一方だった。

「ん? だんだん熱くなつて……つて、熱つ! 大丈夫かほんとに!?!」

「だ、大丈夫だから。大丈夫だから、手をどけて っ!」

美琴が落ち着きを取り戻してから、白井を悩ませる『能力者の登録レベルと実際のレベルの不一致』の話に戻ってきた。美琴が落ち着きを取り戻すまでにかなり時間がかかったのだが、神無月はちゃっかり佐天とも食べ比べを行うという神をも恐れぬ所業を行っていた。神無月はそういう部分で激しく鈍く、美琴が暴走していた理由もわ

かっついていなかった。

「ねえ、佐天さん。 昨日行つてた『^{レベルアップ}幻想御手』つてのもう一度黒子に詳しく聞かせてやってくれないかしら」

「はい、いいですよ」

そういつて佐天は^{レベルアップ}幻想御手の噂を話し始めた。

「^{レベルアップ}幻想御手つていうのは・・・」

・
・
・
「能力の強さを^{レベル}格段に上げる？ 使うだけで簡単に？」

佐天からの^{レベルアップ}幻想御手についての話を聞くと、白井は『いかにも胡散臭い話ですわ』という顔をした。それもそのはず、学園都市において能力と言うのはそれだけで大きなパラメータとなる。だから、学生たちは自分の能力を出来る限り強くしようとすると、それができない者はやさぐれて不良になってしまつたりするのだ。だから、使うだけで能力が格段に、しかも簡単に上がるものが存在するとは思えないのだ。

「いや、だから噂ですつて！ あたしが言つてるわけじゃないですよ？ 実態も良く分からない物ですし」

慌てて否定する佐天を見ながら、神無月は考える。

（確かにレベルを簡単に引き上げられる道具があるとは考えにくい。だが、能力にしたつて科学的に開発が行われている以上出来ないとも断言できない・・・）

神無月が考えている間も佐天は話を続けていた。

「どこかの学者が残した論文だとか料理のレシピだとか、噂の中身もバラバラで・・・」

「まあ、普通能力の開発つて学校で何年もかけてするもんだし、そんな都合がいいものがあるかつて思つけど？」

「ああ、普通はそう考えるよな・・・でも、俺も学校の奴らが異^{レベル}能力者とか強能力者の^{スキルアウ}武装無能力集団や不良の集団に絡まれたつて

「いう話を近頃よく聞くんだ。基本的にスキルアウトや不良って無能力者が基本の集団だろ？ だから、レベルの高いスキルアウトなら特定できると思って、被害を受けたって奴の話を何件か聞きに行っただが、どうにも絡んできたらしい奴らの外見的特徴が一致しない。俺が聞いただけでも4種類くらいが集団があるっぽい。」

「今まではそんなこともほとんどなかったんだが近頃になって急に増えてきた。もし、幻想御手が実在して、スキルアウトの間で出回っているとするなら、今まで力のなかったスキルアウトや不良たちが幻想御手で上がった力で調子づいてきたっていう風に話が繋がるんだ。」

神無月の話を聞いた白井は思案顔で言葉を紡ぐ。

「・・・実は風紀委員でも、拘留した犯人の登録された能力の強さ被害状況に食い違いがあるケース・・・今回が初めてではありませんの。神無月さんの調べと同様に数件ではありますが、すべてここ最近立て続けに起こっています。書庫のデータミスか確認を急いでたのですが・・・佐天さん！」

「はっはい!？」

「何か他に知ってることない？」

「えっ、え~~~~~とお・・・」

いきなり、真剣な顔で美琴と白井に迫られて、佐天は驚き少し考え込むと思ひ出したように、

「あ、そういえば、自称ですけど幻想御手を使った奴らがネットに書き込みしているみたいですけど。ただし、不良っぽいのはっかどこまで信用できるか・・・」

「どう思う、黒子？」

「信じられませんが、そういったものが実在するなら一連の事柄に説明がつきます。一応当たってみる価値はあるかもしれませんがね」

「ありがとね、佐天さん」

「じゃあ、またな」

そう言うと、白井、美琴、神無月の三人は^{レベルアップ}幻想御手について調べるためにあつという間にいなくなってしまった。ベンチに一人残された佐天はその速さにあつけにとられながらひとりごちる。

「……………え？ ^{レベルアップ}幻想御手ってマジもんなの？」

太陽は完全に落ち、既に空は真つ暗になっている。それでも、^{がくえん}学園都市は街の街灯や店から零れる明かりでまだ明るい。そんな^{がくえん}学園都市の明かりに貢献している店の一つである『Bennys』というレストランで美琴は不良っぽい三人に話しかけていた。かなりガラの悪い部類に入る三人だったが美琴は話しかけるのに躊躇がなかった。

「あん？ ^{レベルアップ}幻想御手について知りたいなあ？」

不良っぽい三人は、特徴的で、一人はスキンヘッドのマツチヨ（細マッチョではない）、一人は革ジャンにツンツンした金髪、最後の一人はバンダナを頭に付けた口髭の男だった。そして、美琴の問いに答えたのは、バンダナをつけた男だった。

「うん！」

美琴はとびっきりの媚び媚びの笑顔を振りまきながら答える。しかし、三人のうちスキンヘッドは酒がまわっていて気にしていないようだ。革ジャンの男とバンダナの男は明らかに警戒している目つきだった。まあ、確かにいきなり知らない人間に^{レベルアップ}「幻想御手について教えて！」と言われれば誰だって警戒もする。明らかに警戒の視線を感じたためか美琴は言葉をつなく。

「ネットで偶然お兄さんたちの書き込みを見てできたら教えて欲しいなーって」

という様子を神無月と白井は不良たち三人のテーブル席から少し離れた位置にある席から気づかれないうちに見ていた。ちなみに美琴には盗聴器を持たせていて、向こうの席での会話は白井の持つ受信

機からはつきりと聞こえるようになっていた。今のところ美琴の演技に問題はない。しかし、それでも白井は美琴のほうを心配そうに見ていた。何故、いきなり美琴こんなこてによる囹捜査シヤツジメントになっているかというのと、佐天の話を聞き終わり、例によって風紀委員第177支部で調べ始めて数時間たった、今からそう2時間前に遡さかのぼる。

「お　あつたあつた」

佐天からの話を聞いた俺たち三人は、風紀委員第177支部シヤツジメントに来ていた。そして、ちょうど例の書き込みとやらを美琴が発見したのだった。

「予想以上に時間が掛かってしまいましたわね。　普段でしたら、初春がぱぱと見つけてくれるんですけど」

佐天と別れたのはちょうど昼ごろ。しかし、外を見るとかなり暗くなってきていた。明日から夏休みという、日もだいぶ落ちにくくなってくるこの季節にも関わらずこの暗さ、どれだけネットの書き込みを探すのに時間を要したのかが分かってしまう。

「飾利つてすごかつたんだな・・・」

「当然ですよ、何せわたくしとコンビを組んでいるんですのよ。」

情報関係なら初春の右にでるものは居ないとすら思っていますもの」

「へえ、かなり信頼してるんだな」

チラツと白井の方を向きながら聞くと、

「あつあたりまえですよ」

白井は、自分の言っていることに少し恥ずかしくなったのか顔を赤くしながら答えた。そして全員画面に顔を戻した。

「いや、それにしても本当に実名で書き込んでいる奴がいるとはな」

「そうね、まさにネット初心者」

俺と美琴が画面を見ながら呟いていると、白井はもう一台のパソコンを操作して書き込みをした奴の実名を打ち込んでいく。

「一応、照会しました。確かに素行のよろしくないグループのメンバーばかりですわね」

さて、どうやってここから調べていくか。他の風紀委員にも協力してもらって監視を付けるか、それとも、彼らのグループにスパイを入れるか、と作戦を考えていると美琴が、

「よし、直接いつて情報を聞き出そう。覆面調査ってヤツね」

「はっ!?!」「はい!?!」

俺と白井が同時に間の抜けた返答をした。確かに、覆面調査は悪くない、俺も確かに考えはした。しかし、美琴のあのやる気に満ちた顔。言葉にこそしていないが、『私が直接聞き出すわ』とっている。すかさず、白井がやんわりと止めに入る。

「えっと、お姉さま。ちなみに、誰が情報を聞き出すんですの」

「そりゃ、もちろん。私よ」

『もちろん』じゃねえー。はつきりいつて美琴にそんな調査が出来るとは思えなかった。今までの経験から言っても美琴の気は長くないと思う。予想としては、『幻想御手について教えて』(美琴)』

『何言っつてんだ嬢ちゃん(不良)』 『私が聞いてんだからとっ』

とと教えるやコラー(美琴)』 『電撃炸裂』 『ギャー(不良)』
あたりは大混乱 作戦失敗 という流れが起こりそうでしょうがな
い。

「有真、あんたなんか、今失礼なことを考えてなかった」

「いえ、滅相ありません」

というか、この時点で既に先行きが不安だ。白井も俺と似たような不安を抱えているのだろう。頑張つて止めようと言葉を重ねる。

「民間人であるお姉さまにそんなことをさせる訳には・・・」

「アンタは風紀委員だから面が割れてるかもしれないでしょ。それに今回の相手グループは全員男だから、男の有真が行くより、女の私が言った方が口を滑らせてくれるかもしれないでしょ」

言っていることだけ見れば間違っていない、確かに間違っていないが。この言いしれぬ不安感はどうしても消えない。

「で・・・でも、途中で相手に腹を立てて能力を使ったり、なぎ倒してはいけませんのよ」

言ったー、黒子がついに確信を突いたー。それに対して美琴は、
「わかってるわよーそれじゃまるで、私が暴れん坊みたいじゃない」
このとき、たしかに俺と黒子の『違うのかっ!？』という心の声がお互いに分かったような気がした。

「まあ、私に任せておきなさいって」

そういって、胸をドンと自信満々に叩く美琴の言葉で作戦は決行されることになり、現在に至る。以上、回想終わり。

隠れつつ、美琴の様子をちらちらと心配そうに白井は見ている。

(黒子はずっともとつても不安ですの。二重の意味で)

そんな、心配など気が付かずに美琴は三人の不良に幻想御手レベルアップについて聞いていた。

「ねっ、いいでしょ」

お願いと言う風に手を合わせて頼み込んでいる。しかし、相手もすぐに良いとは言わない。

「こつちも情報を手に入れるのに苦労したんでね、帰んな」

「そこをなんとか」

美琴が言うもバンダナの男はokをださない。スキンヘッドの男だけだったならば酔いも回っていて何とかなっただかもしれないが、バンダナの男と革ジャンの男は甘くはなさそうだった。

(ネットに実名で書き込んでいるくらいだから、ちよろいかもとしない思ったが実際はなかなか頭を使ってるっばいな。頭の使いどころが悪事ではあるだろうが)

美琴が願うするもバンダナの男はだめの一点張りだった。

「ダメだ、ダメだ。子供ガキはもうねんねの時間だぜ」

その言葉に美琴がピクツと反応した。そして、美琴の拳が静かにギ

ユツと握られた。それを見た白井の顔がひきつる。

(まっ、まずいですの。早くも頓挫の予感が・・・)

白井の頭の中には、『人が頭下げてんのなんだその態度と電撃をぶちまける美琴の姿が思い浮かんでいた。』

しかし実際は、

「え〜〜〜〜私そんなに子供じゃないよあ？」

キアラ崩壊もいいところだった。両手は首の近くで笑顔を強調するかのように軽く握られ、声もかなり甘えたような声を出している。

『きやはっ？』と言う擬音が聞こえてくるかのようだった。美琴の背景には、点描の泡がふわふわ浮いているようにすら見えるほどだ。ここまで猫をかぶれるとは、女ってホントに怖えと思わずにはいられない。白井もまさか美琴があんな甘えた声を出して、かわいらしさアピールをするとは思っていなかったのだろう。手慰みならぬ口慰みに飲んでいたコーヒーストをブ　　と盛大に噴き出した。その結果として、白井の前に座っていた神無月がその被害を一身に受けることになるわけで。

「熱いつ！　　というか痛いつ！　　よくそんなに熱いの飲めるな！？」

　　というか、それが眼球に直撃した俺は大ダメージだぞっ！？」

これだけの暴拳を繰り出したにも関わらず、白井からは反応が返ってこない。もっていたハンカチで顔を拭い確認をすると白井が苗字同様に真っ白になってびくびくしている。それほどまでに美琴の演技に度肝を抜かれたということだろう。どうやらここからの監視は一人で行わなければならないようだ。その様子を見た神無月は天井を仰ぐと呟く。

「不幸だ」

本当に上条の口癖が本当に感染うつりそうだなと思いつながら、使い物にならなくなつた白井をよそに不良たちの監視に戻つた。

そんなこんなのもやり取りの間にも、美琴と不良たちの会話は進んでいた。白井を機能停止に追い込んだ『え〜〜〜〜私そんなに

子供じゃないよお？』発言にスキンヘッドの酔っ払いがなかなか好感触の反応を返していた。

「だよなあ、オレはアンタ好みだぜ」

「ホントにー？」

きやはつというぶりっ子声を続ける美琴に言葉もないが、電撃を飛ばさないでいてくれて本当に良かったとも思う。予想以上の順調な聞き込み調査だった。このままいけば、案外今日中に幻想御手の正体^{レベルアップ}に迫れるかもしれない。美琴はスキンヘッドの男に目標を変え、聞き出しにかかる。

「じゃあ教えてくれる？」

「ん やっぱ、ただってわけにはいかねえなあ」

そういいながら、スキンヘッドの男は鼻の下を伸ばした、いやらしい目つきで美琴のスカートの方へ視線を向けている。

「……………」

明らかな視線に美琴も顔に笑顔を張り付けてはいるが、内心では電撃をぶつけてやりたくなくなっているように見える。

「えっとおお金なら少しは出せます」

美琴は男の意図に気が付かないふりをして、何とかごまかす。

「金もいけどこういう時はやっぱり……こっちの方がねえ」

しかし、煙に巻ききれなかった。男は、美琴の肩を抱くように手を伸ばす。だが、男の手は美琴に触れることはなかった。美琴は、ずりりと男の腕に捕まる前に抜け出し、男の手は空を切る。

「え でもそういうのはやっぱり恐いつていうかぁ……お金じゃダメ？」

かわいらしく手を合わせて小首をかしげて見せるが、男の方もごまかされない。首を振ると、

「ダメダメ。それじゃあ教えられないなあ、子供じゃないんだろ？」

そういつて美琴の方をちらっと見る。

「……………」

美琴が涙を流して目を擦っていた。

いきなり泣かれるとは思っていなかったスキンヘッドの男は突然のことに驚く。

「私・・・実は無理言っつて学園都市に来させてもらったの」

「は？ 何を言っつて・・・」

いきなり泣きながら話し始めた美琴にスキンヘッドの男は狼狽えることしかできない。

「でも、やっぱり私才能なくて、能力も全然伸びなくて、お父さんはさりげなく電話で身体検査の結果を聞いてくるし、お母さんは、

『あなたはできる子なんだから』って」

流石のスキンヘッドの男でもこの空気の中、体で払えとは言えない。

「期待に応えなくちゃって思っけど、どうしようもなく思わず嘘ついちゃって、そんなときお兄さんたちのこと知って、もう『幻想御手』しか頼れるものがなくって・・・」

「い、いや、そんなことを言われても・・・」

スキンヘッドもオロオロするばかりで明確に拒絶もできないし、強引に迫ることもできない。そこに追い打ちで美琴が、

「ダメ・・・かな？」

と涙目の上目づかいで男に尋ねる。すると、男は雷に打たれたように硬直。誰からみてもスキンヘッドは純情ハートをぶち抜かれたなと分かるほどだった。白井は白井でさらに精神的ダメージを受け、さつきよりもさらに真っ白になりテールの上で潰れていた。神無月は演技がうまくいっていることに喜びつつも笑いをこらえるのに必死だった。なぜなら、美琴の前に立っているスキンヘッドの男からは見えないが、美琴の後ろ側にいる神無月と白井からは美琴が後ろ手に持っていた目薬が丸見えだった。それに加え、能力が伸びないときたもんだ。そりゃあ、超能力者からは上がらねえだろうよと思っ、その演技に騙されているスキンヘッドを憐れに思いつつ笑いを堪えるしかなかったというわけだった。まあ、その演技にはめられたのはスキンヘッドの男だけで、残りの二人の革ジャンとバンド

ナは『何やってるんだアイツ』とスキンヘッドを見ていた。二人の位置から目薬は見えていないが、スキンヘッドのようにチヨロクはなかったようだ。だが、革ジャンのぼうが美琴の制服に気が付きバンドナに小声でつぶやく。

「（オイ、よく見りゃアレ常盤台の制服じゃねえか）」

「！」

「（意外とイイ金ズルになるかもしんねーぜ）」
「ほう」

そういつて、バンドナの男は口元をゆがめて静かに笑う。常盤台中学は、おのずと知れた有名なお嬢様学校だ。それゆえに、その生徒ということとは金持ちの娘だといえる。実際は、金持ちでなくとも入学基準を満たす能力があれば入学は可能なのだが、イメージは先行しやすいため、そこに通っているならばお嬢様だと思ってしまうのも無理からぬことだった。しかし、常盤台中学の入学条件は強能力者だ。それに満たないものはいくら金があつても入学などできない。能力の低い人間が常盤台にいるはずがないのだ。少なくともこんなところで群れているしかない不良が三人でどうにかなるものはなかった。それを知らない男は、自ら死地に踏み込んでいく。

「こんなところで泣かれてもメンドクセー金額次第で教えてやるよ」
「オ、オウ」

めんどくさいと言いながらもバンドナの男の顔は、これからせしめる金でどうするかという妄想で顔がにやけている。スキンヘッドはハートを打ち抜かれ、とりあえず領いたといったようだった。今までの演技が実を結び美琴も心の中で『やった！』と叫んだ。そういつて、財布から金を出そうとしたとき、

「これこれ童子ども・・・」

聞き覚えのある、いやほとんど毎日聞いている声が聞こえてきた。その声に美琴も内心で焦りを感じる。

「（この声は・・・！）」

いきなり割り込んできた男に不良三人が不快そうな顔を向ける。

「あ　　？　　なんだ、テメエは？」

聞き覚えのある声は言葉を続ける。

「寄よつて集たつて女の子の財布を狙うんじゃないやありません」
俺と美琴は心の中で叫ぶ。

（また、アンタかつ！！）（当麻かよっ！！）

計画が崩れていくような音が頭の中に聞こえてきた。

「イキナリ出てきて何言つてんだテメー」

いきなり現れて説教チツクなことを始めた上条に神無月は頭を抱える。

（確かに女の子が財布を狙われたなら止めるのは正しいと思うよ！

けど、何もこのタイミンゲで出てくることはないだろう！　あと、ちよつとで幻想御手レベルアップまでたどり着けそうだっていうこのタイミンゲで！）

神無月の心も知らずに上条は続ける。

「おまえらこそここがどういふ場所か分かってんのか？　レストラ
ンだぜ、食事する所だろーが」

美琴も上条の隣で固まっていた。

（ちよつと待て　　ッ！！　あとちよつとだつてのになんでアン
タが出てくんのよ！！　ヤバいこのままじゃ情報が・・・このチャ
ンスを逃がしてたまるか）

「えーこんな人、私知らない」

しかし、ヒートアップした上条とスキンヘッドは聞いちゃいない。

「サカるなら一人でビデオ相手に頑張つてろ」

「何だとおッ」

「スル　　！？」

上条とスキンヘッドは美琴の事を完全にスルー状態になった。『ス
ル　　！？』と言ったことすらスルーするぐらいにNO眼中だった。

しかも、最悪なことに計画を知らない上条は、

「だいたいな、アイツはあんなキャラじゃないぞ。お前らの手に負える相手じゃねえ。止めとけ」

と、計画を崩すような発言を繰り返す。しかし、それを伝える手段が無いため神無月は頭を抱えるしかなく、美琴も無関係を装うしかないのだった。そこで、スキンヘッドの男は何かに気が付いたと言っ顔をする。

「はっはーん。さてはテメーらグルだな？　そうやってタダで情報を手に入れようってハラか」

「はあ？」

もちろん、上条は^{レベルアップ}幻想御手の事など知らないし、スキンヘッドは間違えた結論に至ったわけだが、そんなことどっちでも同じだった。

相手に不信感を持たれた。それが示すところは一つ。つまり、計画が破綻したと言う事だった。そして、間違った結論のまま自体は進んでいく。

「きたねえ手を使いやがってボコボコにしちまおうぜ」

「クソツ、人がせつかく助けてやろうとしてんのに。　ビリビリ中学生だぞ」

スキンヘッドの男の言葉に後ろで見ていた革ジャンとバンダナも立ちあがって上条を威嚇する。

「何かよくわからんがしょうがねえ。　まとめて相手してやる三人ぐらい」

そう上条が言った時、店の男子トイレのドアが開いた。すると、中からゾロゾロ三人の不良の仲間と思われる奴らがあふれ出てきた。

上条は、不良たちの座っていたテーブル席の上を見る。1、2、3、
・・・、9。九人分の食事や食べた後の食器などが並んでいた。

「ええ　　ッ!?　　トイレに集団でゾロゾロ入るのは女の子の特権だと思いましたが　　ッ！」

九人の不良が一堂に会し、その中でスキンヘッドが上条に向かって言う。

「この人数を一人で相手にしようっていう度胸はほめてやる。今なら有り金全部出して謝るなら許して・・・」

ダツ、不良が言い終わる前に上条がダツシユで逃げだした。不良たちは全員、驚いて動きを止める。

「逃げた！？ 自分から出てきたのに!？」

「ヤロウ、追え！ ふん掴まえてギタギタにしてやる！」

そう言うと、逃げ出した上条を追って不良たちも全員店を出て行ってしまった。あとに残されたのは、ひたすらにスルーされ続けた美琴一人だけだった。不良たちがいなくなると、ポツンと残された美琴に店員が声をかける。

「お客様、大丈夫でしたか？」

「あ、お気遣いなく」

あれだけの数の不良に囲まれた女子中学生を見たら、どう考えても囲まれて逃げ出せなくなっているナンパの被害者だと思っだろう。この店員もそう思ったに違いなかった。そして、不良たちがいなくなったのを見計らって美琴に声をかけたのだ。しかも、不良たちは食べた料金も払わずに出て行ってしまっていた。そのことも懸念事項ではあったようではある。

「あ、お会計は全部この子が」

ポンと白井の肩に手を置くと、美琴もすぐに不良たちを追いかけて店から走り出していった。さりげなく白井に全部の代金を押し付けていくあたりの手際が手馴れすぎていて神無月はいつもこんなことをやってるんだろうかと思わずにはいられなかった。当の白井はと言つと美琴がポンと手を置いた瞬間にガバツと目を覚ましていた。

「何か見てはいけないものを見てしまった気が・・・ っ、何のんきに特大パフェ（全長50cm）を新しく注文して既に食べ始めてますの!？」

「H A H A H A、ナニイッテルンダイクロコ？ コノパフェーハサ イシヨカラココニアッタジャナイカ」

「アメリカのジョークっぽく言われると余計に腹が立ちますわね。」

「ってそんなので誤魔化されませんわ！」

「作戦が失敗してやる気が無くなったとか、コーヒーをぶちまけられたからその仕返しだとか、そう言えば昼間のかき氷から甘いもの何にも食べてないじゃないか！？とかそんなのじゃないんだからね！」

「ツンデレっぽく本音がダダ漏れですよ。それにしてもホントにいつ注文していつ届いたんですの？ お姉さまが『あ、お会計は全部この子が』って言うてから30秒も立っていませんのに。はっ、まさかアナタ能力でわたくしの時間だけ遅くしたんですの！？」

「ナンノコトヤラー！」

「目を不自然に逸らしてはいけませんの！ さあ、白状しなさいですのー！」

と神無月と白井が遊んでいる間に美琴は逃げて行った不良を追いかけていた。不良達を追いかけている間も、

「アンニヤロ、もうちよつとだったのに！」

と上条に悪態をつく。確かに上条の介入が無ければ美琴の演技で不良達を騙せていた可能性は大いにありうる。それがもう少しで成就と言つところで失敗に追い込まれたのだ。文句の一つも言いたくないというものだ。そうして走っていると

「いたっ！」

ついに美琴は上条を追う不良達を見つけた。そして最後尾を走っていたバンダナの男に並走して話しかける。

「ねえ、あんなのほつといて話の続きを・・・」

「ああ？ まだいたのかアンタ」

バンダナの男は美琴に気付いたがそれだけで、近くにいたスキンヘッドの男を怒った。

「元はと言えばテメーがこんなのにつ掛かるからだぞ」

「んな事言つてもよー」

その間も美琴は『レベルアップ幻想御手の入手方法とか・・・』と話しかけているがバンダナ男もスキンヘッドも相手にせず、バンダナ男がスキン

ヘッドを怒り続けている。

「エロカッコいいセレブなねーちゃんとかならともかくこんな頭悪
そうなクソガキに騙されやがって」

頭悪そうなクソガキ呼ばわりにも美琴は耐えて、頭に怒りマークを
付けながらも懸命に『せめてどんな物かだけでも・・・』と聞く。

そこでいい加減に鬱陶つうとつしくしく感じたバンダナ男は、

「うるせえ！ ガキはクソして寝ろ！」

ついに美琴はキレた。

「人が優しく言ってるのに　　！！！！」

「ギャ　　！」

美琴の怒りを買ったバンダナ男は美琴の体から発せられた電撃を浴
びて黒焦げになって地面を転がった。バンダナ男の体はボロボロ、
服も焦げ、目は白目を剥いて、バンダナも焼けているが、命に別条
はなく気絶しているだけだった。いくらキレてはいてもきちんとして手
加減している美琴だった。

「ジュンタ　　！」

「な！ テメエ能力者だったのか」

驚いたのは周りの不良たちだ。いきなり仲間が電撃で丸焦げにされ
たのだ、驚かない方がおかしい。しかも丸焦げにした能力者は今ま
でレベルが上がらず、幻想御手レベルアップが欲しいと言っていた少女なのだ。

驚きも大きい。そして、仲間一人が黒焦げにされたため上条を追い
かけることよりも美琴をどうにかする方が優先順位は高いため不良
達は全員足を止め美琴を囲むように陣取る。

「女だから見逃してやるつもりだったが能力者だってんなら容赦し
ねえぞ」

「！！」

流石の美琴も警戒をする。

（そうか、こいつら幻想御手レベルアップ使ってるんだった。　爆破魔レベルが
これだけ）

8人もいるとちょっと面倒ね・・・）
しかし、美琴の予想を他所に不良達の口から出たのは、

「パワーアップして異能力者^{レベル2}になったオレタチの力、見せてやるぜ！」
次の瞬間、美琴を囲んでいた不良たちは全員丸焦げになって地面に転がっていた。いくら同じ幻想御手^{レベルアップパー}を使っている人間といえども日々練習やら訓練で能力に磨きをかけていた爆破魔のレベルは確かにうまく上がっていたようだ。そういう意味では、爆破魔は勤勉だったともいえる。ただ、勤勉になるところを間違えたただけで。

上条は不良達を撒く^まために街中を散々走り回った拳句、川にかかる鉄橋まで来ていた。そこでようやく上条は不良達が1人もついて来っていないことに気付いた。

「追手がいなくなつた？ やつと撒いたか」

『ようやく一息つける』と上条が思い息を吸った瞬間、

「つたく、何やってんのよアンタ。不良を守って善人気取りか、

熱血教師ですかあ？」

電撃のヴェールを纏^{まと}いながら、美琴がゆっくりと上条のほうへ歩いてくる。追つて来なくなつた不良、追いついてきた美琴、そこから導かれる答えは一つ。

「……………つー事はアレだろ？ 後ろの連中が追つてこなくなつたのも」

「うん。めんどいからから私が焼^{ヤッ}いといた」

さもなげに美琴は言う。

「お前なあ……………」

「『お前なあ』はこっちの台詞よ。アンタのせいで情報取り逃がしちやつたじゃない」

「情報？」

「才能不足をズルして補う事件の情報。せつかく、あともう少しで情報が手に入るってところで邪魔してくれちゃって、どう責任とっ

てくれるのよ！」

美琴の周りでバチバチと電撃がはじける。

「待て待て、話し合おう無能力者の俺に向かつて電撃を飛ばしても情報は入ってこないと上条さんは思うんですけど!？」

「そうね・・・」

そう言う美琴の顔は笑っていない。

「でも、今日の調査を台無しにしてくれた分とストレス解消のサンドバック位にはなれるわよ！」

そう言うが早いか、美琴の手から数万ボルトの雷撃の槍が放たれ上条を襲う。美琴と上条の距離は数メートル。こんな近距離で超能力者の電撃使用である美琴の攻撃は外れない。しかし、

「で、自称無能力者のアンタは傷一ないのかしら？」
「・・・」

美琴の前には、上条が右手を突き出した状態で無傷で立っていた。

確かに、美琴の雷撃の槍は上条に直撃した。しかし、直撃箇所は上

条の前に突き出した右手だったのだ。上条の能力である幻想殺しは、

右手首から先にしか力はない。そのかわりどんな能力でも打ち消せ

るといふ代物だ。ただし、能力は打ち消せてもそれ以外の用途が無

いため無能力者という肩書なのだった。しかし、美琴は上条の能力

を知らない。自分の能力を防げると言う事は知っていてもなぜ防げ

るのかは分かっていないのだった。しかし、上条も気が気ではない

相手の能力を打ち消せるのは右手首より先だけ。それ以外のところ

に電撃が当たれば即座に丸焦げだ。それゆえに上条はガツチガチに

固まっていた。そんな上条の心境には気付かず美琴は、

「私の電撃を無効化するような力を持っていながら、不良相手に逃げたりして…強者の余裕ってやつかしら」

「だから、俺は無能力者で・・・」

「何が無能力者よ！」

美琴の手や頭、体中から雷撃の槍が飛び出し上条を襲う。

「電撃の槍を、（ズドン）、水風船みたいに、（ドゴン）、簡単に、

(バリバリ)、消し飛ばしておいて、(バゴン)、そんな二三〇万
分の一の天災が何を言っているのよ！(バリバリズゴウーン)「
美琴の連続した雷撃らいげきのやじの槍の影響で当たりは派手に水蒸気やら砂ボコ
リが舞い上がった。流石の美琴でも連発で雷撃らいげきのやじの槍を打つと息が上
がっていた。

「はあ、はあ、はあ」

しかし、あれだけの数の雷撃らいげきのやじの槍を受けても上条には傷一つない。
すべて右手で防ぎきっていたためだ。そして、上条は顔をひきつら
せながらも笑みを浮かべて言う。

「・・・何て言うか不幸っーか、ついてないよな。 オマエ本当に
ついてねーよ」

「何ですって」

「いくらやってもオマエの攻撃は俺には効かないんだ。 これ以上
続けても不毛なだけじゃねーか。 だから、こんな無意味なことは
やめてもつと若者らしく青春を謳歌しないか？」

「らしく・・・」

美琴が自分自身を確かめるようにつぶやく。

「・・・そうね。 私が間違っていたのかもしれない
わね」

「わかってくれたか」

「ええ、ずっと心のどこかでブレーキをかけてたのかもね」

そう言うと、美琴の周りで先ほどまでの攻撃とは異なる音を電撃が
かなえ始め、それに伴い空がゴロゴロと音を鳴らし始めた。

「私の全てを出し切った全身全霊の攻撃・・・」

「・・・雷雲!?!」

「人間相手に流石にこれは・・・とか躊躇するなんて本っ当、私ら
しくなかつたわ」

「・・・」

言葉もない上条。 美琴の雰囲気にとだただ足が後ろに下がる。と、
そこで上条は美琴の後ろに居る二人の姿に気がつく。

神無月と白井は店でパフェを食べ終わってから上条と美琴を探しに出ている。

「どれだけパフェを食べれば気が済むんですの！ おかげですっかりお姉さまを見失ってしまったじゃありませんの」

「でも、一分で食べ終わつたら？」

「それは最初の一個で、その後六個もパフェを注文していたなんて知りませんもの！」

「いや、一日かき氷一個とパフェ一個では燃費の悪い俺には足りなくてな」

「悪すぎですよ！ あれだけ食べればわたくし4日は持ちますわよ！」

「俺の半日分で4日も動けるのか、凄いな」

「あれで半日分なんですの！？」

「まあな。 んっ、あれって美琴の追つてた不良じゃないか？」

話しながら美琴を探していると、神無月が美琴の追っていた不良（レア：焼き加減）を発見した。

「ええ、確かに先ほどの方たちで間違いないようですけど。 お姉さまはどこに？」

「まあ、ここにいないって事は情報収集を台無しにした当麻のところに電撃を……」

と、神無月が言っている最中にドゴンという雷の落ちたような音が少し離れた鉄橋の方から聞こえてきた。

「いやー、分かり易くて助かるな」

「……そうですね。 お姉さまの相手をするなんて、あの方生きていらつしゃれば良いのですけど」

「不幸だ不幸だと言いつつ、なんだかんだで当麻は死なないと言う事に関しては運が強いから大丈夫だと思うぞ。 まあ、そんな死ぬ

ようなところに巻き込まれるのは不幸かもしれないがな」
と言いつつ神無月は、

（今回に限ってはわざわざ自分から巻き込まれに来たのか・・・あれ、今回だけか？ 割と自分から首を突っ込んでいることも・・・）と考えていると、

「何をボケつとしてますの？ 行きますわよ」

「ん、ああ」

そう言つて、白井の空間移動テレポートで二人はその場を後にし（不良放置）、鉄橋近くで美琴の『電撃の槍を、（ズドン）、水風船みたいに、（ドゴン）、簡単に、（バリバリ）、消し飛ばしておいて、（バゴン）、そんな二三〇万分の一の天災が何を言っているのよ！（バリバリズゴワーン）』という場面に出くわした。そして、二人はわざわざ死地に飛び込んでいくほど自殺願望はないため美琴の少し後ろで見守ることにしたのだった。

上条の視界が神無月を捉え、すぐさまアイコンタクトでSOSを発信する。

「一タ・ス・ケ・テ・ク・レ《有真頼むから助けてくれ》」

「ム・リ・ト・イ・ウ・カ・チ・ヨ・ウ・ハ・ツ・ス・ン・ナ《無理、美琴を無駄に挑発するから悪い》」

神無月の諦めてくれサインが上条に返つたところで美琴の体から電撃が雷雲に向かつてのび、その直後上条を含めたこの付近に雷が落ちることとなった。そして上条の、

「不幸だあー」

と言つ声が辺りに響き渡つた。

その頃の初春の部屋では、トントンという野菜を切る音で初春が目
を覚ましたところだった。ベッドから起き上がり初春が台所をのぞ
くと、

「佐天さん！ また、来てくれたんですか」

「あ、ごめん。起こしちゃった？ 夕飯作りに来たよん。つつ
てもお粥だけど」

「わあ、わざわざありがとうございます」

「汗かいたなら先に着替えちゃいなよ。 ついでに体も拭いてあげ
る」

佐天のお粥は出来上がったが、流石にすぐに食べられるほどの温度
ではないため、少しさめる時間を利用して佐天は初春の体を拭く。
そして、拭きながら初春に話しかける。状況としては少し違つが風
呂に入りながらだと腹を割って話せるといった状況に近いのだらう
か。

「ねえ、初春はさ。 高レベル能力者になりたいって思わない？」

「へ？ そうですねー、そりゃ能力は高いに越したことないし進学
とかもその方が断然有利ですけど」

「んー、そう言うんじゃないって、ほら普通の学生生活送るなら外の
世界でもできるし超能力にあこがれて学園都市（こくえんじよ）に来た人つて結構い
るでしょ」

佐天は初春の体を拭いたタオルを水を張った洗面器で洗い水を絞り
ながら続ける。

「あたしもさ、自分の能力つてなんだろう、あたしにはどんな力が
秘められているんだらうつて、ここに来る前はドキドキして寝れな
かったよ。それが最初の身体検査（システムスキャン）で『あなたには全く才能ありま
せん』だもん。 正直へコンだぜ」

そんな佐天に初春は、

「・・・わたしも能力の強さは（レベル）大したことありませんけど、白井さ
んと仕事したり、佐天さんと遊んだり毎日楽しいですよ。ここに
来なければ皆さんと合う事もなかったわけですから。 それだけで

学園都市に來た意味はあると思うんです」

と楽しげな笑顔で言った。

「初春ついはる・・・」

「佐天さん？」

「あーっもう！！ 可愛いこと言ってくれちゃって！」

と言うと佐天は初春に抱きつく。ついでに濡らしたタオルで初春の体の特に旨の当たりを重点的に弄もよほるように拭ふく。初春は驚き、

「ひゃわっ」

「おおー良い声で鳴くねー。ご褒美に全身くまなく拭いてあげよう」

「キャ ツ、キャ ツ」

佐天に体中を弄られながらも初春は、

「佐天さん、手の届く場所は自分で吹けますからっ！」

「ダーメー」

その時遠くで、ゴロゴロゴロドオーンと言う雷鳴が響き、部屋の明かりがふっと消えた。

「あら？ 停電？ 良いところだったのに」

「助かりました・・・」

美琴の起こした雷は間接的に初春を少し助けたのだった。

美琴の発生させた落雷は上条に向かつて落ちた。しかし、近くにいた神無月や白井の方にも雷は落ちてきた。まあ、全員防ぐなり避けるなりして無傷だったのはよかったことだといえる。そして、雷を防いだ上条はダッシュで逃げる。その結果として、逃げた上条を美琴が、

「待てやコラー」

と追いかける。今度は遠くへの移動ではなく見えている相手を追うため、神無月と白井は美琴を走って追いかける。そのため、全員が

走り回ることとなった。そして走り回っている最中、ふと神無月が携帯の時計を見ると夏休みに突入していた。つまり、翌日の午前0時を回っていたのだった。その時点で神無月と白井は諦めて帰寮、上条と美琴は追いかけてここを続けることとなった。こうして、馬鹿みたいに走り続けることから4人の夏休みは始まるのだった。

第05話 え

私そんなに子供じゃないよぉ？（後書き）

更新にだいぶ時間がかかりました。

自動車学校や夏休みの課題やらで夏の間にはほとんど更新できません。いませんでした。

現在、少し懸念事項が一つ。

原作の上条当麻、もしくはアクセラレータの本質にかかわる部分（まだ原作で明かされていない部分）が、

神無月有真のこれから明かされる本質とかぶっている可能性が・・・かぶっていたらどう修正したらいいか悩みどころですが、

頑張っていこうと思っています。

これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4837r/>

とある魔術の絶対重力 ブラックホール-

2011年10月26日13時32分発行